

---

# 魔法少女リリカルなのは——願う世界——

多国籍軍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは——願う世界——

### 【Nコード】

N8397P

### 【作者名】

多国籍軍

### 【あらすじ】

ロストロギア【五つの城壁】。それはどんな影響を及ぼすのか？そしてそこから始まるロストロギアの奪取戦。

「それは危険なものだから渡しなさい！！」

「空間湾曲？死者蘇生？確かに使えるが本質は別だ。」

「お……に……い……ちゃん？」

「私は『イヴ』。原点にして最強の存在。」

「質量兵器が禁止？馬鹿じゃないの。こんな綺麗なライフル使わなきゃ罰が当たるわ」

—

この小説は原作設定を参考にしていきたい（切実）ですが 矛盾がうまれたり現実で起こらない現象が起きても『作者馬鹿だなあ』と  
思っスルーしてください。

あと駄文です。

あとストーリーがごり押しです。

## 願う世界（前書き）

---

人々が自分達を貫く信念の為に罪を犯す。

目指すは全てが甘い幻想のような現実。それは絶望を味わった者達にとって夢のようだった。

五つの魂は複雑に絡み合い一つの信念の下に集まった。      ロンド  
これから始まるは黒の円舞曲。

悪が偽善の大剣を振るう時、世界は廻る。

理不尽にゆっくりと……。

## 願う世界

何も無く寂れた廃墟が周りを囲む裏街、“ミーチイス”  
その裏町は行き場を失った子供達や親に見捨てられた青年達、さら  
には裏の世界に生きる犯罪者までいる。

そしてこの少年もまた、裏の世界に手を染めていた……

### 裏町の最奥部

すべてはここから始まった。

「なあ……理不尽だと思わないか？」

少年は語る。

目の前にいる人物に向かって

「俺って昼は嫌いなんだよ。なんにも出来ないから……」

最悪といった風に肩を竦めた。

「“アイツ”はいろいろ出来たのになあ……

……ってさっきから聞いてんのか！」

少年は目の前にいる人物がまったく反応しなかった事に腹を立て少

し声を張り上げる。

これだけ聞いていたならただの自分の不幸に酔う痛い少年だろう。

しかし少年の服に付いているドロリとした赤いシミが少年を普通でないと言っている。

そしてもう一つ少年が普通じゃないと言っている部分がある。  
それは――

《Excuse me Master（すみません、マスター）》

「ん？どうした『シャドウ』？」

《He is dead（その人死んでいます）》

「ん？ああ……死んでたのか。じゃあ答えられないな」

その少年は人が死んでいるという事実を知っても顔色一つ変えずに話し続ける。

冷酷に……

冷酷に……

「死んでるならしょうがないか……。じゃあ、ロストロギア古代遺物は戴いてくよ」

少年が右手を死体に翳す。次の瞬間、死んでいる人物から何万何億もの光の粒子が散乱し辺りに漂った。一時的な停滞を見せた光の粒子は次に、なんの抵抗も無く少年の右手に収束し鍵の形になった。

そしてそれを見た少年は満足そうに頬を緩ませ、死体の背中から一本の短刀を引き抜く。引き抜いた瞬間赤黒い血が飛び散った。他に外傷がない事からこれが直接的な死因はこれなんだろう。

その血を真つ正面から浴びた少年は意にも帰さず死体に背を向け歩きだす。

「……………あと四つ」

少年が呟いた言葉は暗闇の中に溶けるように消えていった……

P r o l o g u e

E N D

出来ればその提案は却下させてほしい（前書き）

正義とか悪とか俺には関係ない。ただ俺は自分の夢を叶えるだけだ。  
そしてアイツを理不尽に奪ったこの世界を変えてやる！！

その為だっ たら俺はこの手を血に染めても前に進む…… 進み続ける。  
絶対に……

ブラック ボックス  
黒い箱

序列無し・推定魔導士ランクA

「深淵のJoker」  
ジョーカー

【神無月 龍】

出来ればその提案は却下させてほしい

某管理外世界

秘密結社『ブラックボックス』会議室

「帰ったぞー」

漆黒のような黒いローブを着た俺『Joker』（本名じゃないぞ？）

『は無駄に金銀を散りばめた扉を蹴り飛ばして入室する。ちなみにとつくに遅刻しているが気にしない。』

会議室の中に入っていくと薄暗い部屋の中で四人の男女が個々の形で待っていた。

どうやら遅刻した俺を待っていたようだ…

罪悪感の小指の先程もわからない。

「で？こういう時は何て謝るのJOKER？」

このままでは微妙の空気になるかと思ったが俺の右横にいる少女が言葉に刺を添えて俺に問い掛けてきた。

「黙れ少女。お前に謝る事はしねえ」

「誰が少女だ！！！」

「お前だよ」

コイツはQueen（本名じゃない）。身長は130前半を中学二年になった今でも維持してる。

太陽の光に当たったら反射するであろう金髪を腰まで延ばしているが特にリボンで留めるような事はしていない。ファッションに興味がないのか服装で判断したかったが生憎今日はローブを着て全く見えない。

首に金色の十字架をチェーンで繋げている。これはこの少女の愛機、カートリッジシステム搭載のミッドチルダ式デバイス『ミーシャ』の待機状態だ。

とか考えてると左奥の方から仲裁がかかる。

「ジョー！！駄目だよクーちゃんにそんな事言っちゃ。」

「そうだ！！そうだ！！もっと言ってやってKingー！！」  
「だから俺はジョーじゃないって……もういいや。」

変なあだ名を誰これ構わず付けてくるコイツは『King』の『フエンディ・ウィリアム』略称『ウィル』。身長は150前半でとても明るい茶髪が印象的な奴だ。

喧嘩の仲裁役などで真っ先にコイツが出てくる。本当に仲間思いな、いい奴だ。

あとは無類の甘い物好き？

使用デバイス『グリフォン』は対近接戦闘においては最強の戦闘力を有する。それを自分の手足のように扱うKingはブラックボックス序列二位の実力を持つてる。

後は序列一位『Ace<sup>エース</sup>』と序列四位『Jack』がいるがこれ以上待たせると後々怖いので割愛。

あつ

Queenは序列三位だ

キャンキャン子犬のように吠える少女とKingを黙らせ俺はボスに任務報告をする。

俺と対面するように座っている赤髪の長身女性がこの組織のボス『<sup>ゆかり</sup>東堂 縁』だ。

この人の目指すのは完全な世界：  
支配とかそういうのじゃなくて皆が笑って暮らせる世界。その為なら人の命をも厭わない。それは此処にいる奴の共通の思いだ。  
まあそういう汚い仕事は俺だけけどね。

「第一級危険物指定の古代遺物<sup>ロストロギア</sup>『五つの城壁<sup>ランバレット</sup>』の強奪完了しました。

「ご苦勞様。」

と、満足そうな笑顔で言った。

が、すぐにハツとした表情になり“どこか怪我してない？怪我してるなら正直にいいなさい。”と、まるで子供を心配するような親のように迫ってきた。

「大丈夫ですよ『縁』さん。まったく『縁』さんは心配し過ぎですよ…そんなに心配ばかりしてたら胃をやられますよ？」

そう言うとき『縁』さんは「そう…ならいいけど」と若干まだ不安そうに言った。

だけどそこは一つの組織の長。すぐに顔を真剣なものに戻した。

「いい皆、今日は会わなかったけどこれから古代遺物<sup>ロストロギア</sup>を回収するにつれて管理局の魔導士に遭遇する機会が増えるわ。」

「貴方達の中には管理局の事を心良く思っていない人もいるから戦うなどとは言わないけど……当面は古代遺物<sup>ロストロギア</sup>の事を最優先にして。」

この計画には大質量の魔力を含んだ古代遺物<sup>ロストロギア</sup>の存在が必要不可欠だ。だから一%の不安も取り除きたいのだから。

でもAce<sup>エース</sup>は心配するだけ無駄だろうけど……念には念を入れてというやつだ。

その事は俺達もわかってる。だから誰も文句どころか嫌な顔一つしない。

むしろ気を引き締めている（当然と言っちゃ当然だが）。

今日集まったのは計画の失敗は赦されないという最後の念押しだろ

う。

あのは詳しい任務報告で特に必要がない部分なので省略

「龍はもう今日は上がっていいわよ。あとはこっちがやっておくら……」

「ちよっ！！『縁』さん今仕事中だからコードネームですよー！」

「……細かい事は気にしないで、ほら帰った帰った」

シッシツと猫を追ひ払う動作で手を払う。

眠くなつてちよつと言葉遣いと行動が粗くなってる。……ここは従った方がいいかな。

「わかりましたよ。帰りますけどボスも無茶しないで下さいね。ただでさえ歳なんですから……」

「……私まだ24よ？」

「嘘だあ」

「…殺…」

「じゃあ、お先に失礼します!!」

本気の殺気を浴びた俺は死にたくないので大急ぎで帰った。

## 機動六課

管理局のエリート達が集まっている『機動六課』といえは数々の難事件を解決している部隊だ。

その代表といえは、やはり次元科学犯罪者ジェイル・スカリエッティを中心とした『J・S事件』だろう。しかしそれだけのエリート部隊。やはり何かしらの制約がある。

例えばこのエリート部隊は各部隊長にリミッターがかけられている。

そしてもう一つこの部隊は一年間のテスト部隊だった。

しかしJ・S事件を始めとした事件の功績が認められて再び新たな難事件のために集められた。

―ミッドチルダ中央区画湾岸地区―

古代遺失物管理部

『機動六課』部隊長室

今、此処には三人の女性がいる。十代後半だろうか？とても若い印象を受ける（いや、実際若いんだろう）。

「今日二人に集まってもらったんわ…今回の事件を正式にうち（機動六課）が捜査する事になったからや」

茶髪がかった黒髪のショートカット。そして関西弁が特徴の女性。

『八神 はやて』が一番最初に口を開いた。

「じゃあ今日集まったのはその…」

「事件絡みの事？」

八神はやての対面に座っている金髪の女性『フェイト・T・ハラオウン』が次に口を開くと連携するように栗色の髪をサイドアップにした女性『高町 なのは』も口を開く。

「そつや。今回の事件内容を先に各部隊長さんに伝えようと思うてな。」

「それでどんな事件なの？」

はやては引き出しの中から一つの資料を取り出す。資料と言っても何枚も紙が重なって束になったぶ厚いものだ。

「昨日の深夜に管理外世界194の裏町『ミーチイス』で殺人事件が起きたんや。被害者はその町でバーを経営している男性。背中を鋭利な刃物で一突き。金品を取られたうちゅう形跡はなかったんやけど……」

そこまで読むではやては言葉を濁す。

「……どうしたの？はやてちゃん？」

その様子を見たなのはは、はやてに声をかけた。

「……実はこの男の人魔法使いなんよ。しかも重犯罪者の。」

「「え？」」

「魔法を使った強盗、誘拐、脅迫、薬物そして挙げ句の果てには数えきれない程の殺人。罪数えだしたらキリないわ。」

「で？はやては何が気になるの？」

「実はこの男、ロストロギア古代遺物も持ってたみたいなんや。そしてこれが今回の捜査対象。」

そう言うとき長テーブルの中央に十字架を基調とした黄金の鍵のホログラムが現れた。

「形状は鍵型。魔力容量は大体SSランク五人分ぐらいやな。次元断層なんて簡単に起こせる代物や。」

そしてこの古代遺物の詳しい情報の事なんやけど………わからないんや。」

「どういう事なのはやてちゃん？わからないって……」

「それがなんかな……」

本局のお偉いさんがなんでか情報をくれないのや。」

肩を竦めて溜め息をはいた。

「でも情報が無いものなんて危険じゃ……」

「だから、色んな成果を挙げた私達の部隊なら対処出来ると思ってまた機動六課を編成したのやろな……」

二人ともなるほど納得したみたいだ。はやては話続ける

「まあ今回の古代遺物はそれだけ謎の物や。だからスターズ、ライ

トニング共々気をつけるようにしといな。」

「わかったよ。はやてちゃん。」

「伝えとくよ。はやて」

そう言うとはやては満足そうに頷き立ち上がる。

「ほな、今日は解散や。集まってくれてありがとな」

はやてが言つと二人とも気にしないでと言って立ち上がり扉から出て行った。

はやては疲れたように椅子にもたれ掛かる。何もやる事が無いのか遊びただけなのか椅子に乗った状態でくるくると回り始めた。それも飽きてきたころ新たに扉をノックする音が聞こえる。

「開いてますよー」

はやてが一言言つと二人の女性が入ってきた。一人は妖精のような体躯のはやてのユニゾンデバイス兼部隊長補佐の『リインフォース？（ツヴァイ）』だ。

「はやてちゃん。新人の子、連れて来ましたですよ。」

「ありがとなリイン。」

そう言つて部屋にリインフォースと一人の少女を招き入れる。

少女と言っても身長は、はてよりも小さいが大差はなく充分高いので女性と言った方が良いでしょう。日本人特有の黒髪を肩辺りのショートカットにしていいて首には二つの指輪をモチーフにしたアクセサリーを付けていた。

少女は緊張しているのだろう。辺りをキョロキョロ見回したり。忙しなく腕が揺れている（震えているの方が正しいが…）。

その少女の緊張っぷりに気付いたはやては

「そんなに緊張しないでええよ。じゃあまず自己紹介をして貰えへんか？」

その言葉を聞いた瞬間少女は立ち上がり叫ぶ

「本日から機動六課のフォワードに配属されました。冴木凜さえき りんです。よろしく願います！！」

その時彼女のアクセサリーが太陽の光を受け光った。

朝

それは目覚めの時

サンサンと輝く太陽の光が部屋に侵入し容赦なく俺の顔を照らす。人間は朝、身体をリセットする為に太陽の光を浴びた方が良くと言

われているが俺はそうは思わない。太陽の光なんて浴びて“ん”と  
か言ってる奴の気が知れない。  
むしろヤバい奴とすら思う。

……と

太陽の光を精一杯呪いながら朝に弱い俺こと『神無月 龍』は目覚  
める。

ふらふらと覚束ない足取りで階段を一段一段降りていく。朝食を作  
る為に台所に行かないといけないからだ。

朝の挨拶ぐらいしたいが生憎、家に誰もいないのでそれは叶わなか  
った。

朝食は適当に焼いたパンにお好みでなんか付けて食う。なのでだい  
たい10分も食事にはかからない。だからその分他の事に費やせる。

と言っても今日はゆっくりする必要がないので手早く身支度を済ま  
せ俺は玄関に向かう。

「じゃあ行ってくる…」

返ってくることもない言葉を放ち俺は外に歩きだす。

これが今日の始まり……

アスファルトに籠った熱が目の中の景色を歪める。それは多分塵気楼なんじゃないか？

なにせよ暑いことは変わらない…

学校指定のYシャツが肌にピタリとくっついて気持ち悪い。肌から剥がそうとしてもやっぱり肌にくっつく。

その不快感と夏特有の暑さで俺は倒れそうだった…

しばらく歩いていくと一つの校舎が見えてきた。何と云うか……豪華に豪華を掛けた感じ。

ぶっちゃけそこまで詳しくこの学校を説明する気はないが一言だけ言つと学校の中に馬鹿でかい湖みたいのがある。

……… 本当だぞ？

守れるのは巨人だけじゃねえか？と思う位の馬鹿でかい正門を抜けて細かい所まで金をかけている靴箱で上履きに履き替え、そして裕福なお坊ちゃまお嬢さまが大量にいる廊下を抜けて俺は教室に入った。

だが残念な事に教室は寂しい事になっていた。

俺のクラスはめんどくさがりが多いから朝のHRが始まる10分  
前じゃないと人が来ない。  
つまりいつもより若干早めに来た俺のクラスに今人はいないという  
ことだ。

……本でも読むか

――

――

――

「……」

「――い――るな――!」

「……」

「――おい！！無視――るな！！」

「……ん？」

「おおい！！無視するな！！」

どうやら本の世界に熱中し過ぎてしまったようだ。いつの間にか教室には人がたくさんいた。

そして必死に俺に声をかけている男子にも気付いた。

この男の名前は『兵吾』だ。天然な茶がかかった黒（ほとんど茶髪）の髪の毛を短くしている。

制服を着崩すという事はまったくしてないが首元に見える龍のアクセサリーがコイツをチャラくしている。

俺とは腐れ縁だ。

俺は読みかけの本に栞を挟み閉じる。

表紙に書いてある“男の力強さ大図鑑”と言う文字に『兵吾』は一旦目をやったがすぐに視線を戻し…

「この本くれ。」

「やだ」

俺は男の魅力を手に入れたいんだ！！

……っと

暴走してしまった。

「で？なんか用か？」

本を鞆にしまった俺は『兵吾』に話かける。

『兵吾』は“そうだった”と言って話だした。

「知ってるか？なんでも第一級危険物指定の古代遺物ロストロギアが盗まれたらしいじゃん？」

そつだコイツの情報収集スキル半端ないっけ…

「いや知らない。どういう物なんだ？」

「んー。それが、よくわかんねえんだ。管理局のデータベースにハツキ………忍び込んでも情報が無かったし。」

「お前、ハッキングは犯罪だぞ？」

「気にすんな。」

それより管理局でわかんなかったから勝手に調べただけど…なんと！あの古代遺物は世界を変えるだけの力を持つてらしい！！

「どういうことだ？」

「さあ？詳しいことはわかんなかったな。古代文献を漁ってたら出て来ただけだし。」

何処に古代文献があるんだよ、とか古代文献なのにそれだけしか情報ないのかよとか色々言いたかったがコイツの生態系は謎なので言うのをやめた。

……それに俺はわかってるし…

「おい。てめえら席着け。ホームルーム始めっぞ」

教室に担任（『葵』ちゃん。独身）が来たので俺達は急いで席に着いた。

そしていつものように顔を伏せ寝る。この瞬間がどれだけ至福かわかる奴にはわかる。

‘授業の様子はぶっちゃけ説明する必要がないだろう。だるいだけだ。

ちなみにさっきから魔法という単語が出てきているけどいいのか！と思う人がいるかもしれないので言っておくがぶっちゃけ大丈夫だ。

なぜかというこの学校自体が魔法を教える所で今現在も魔法について授業をしてる。なので俺達は魔法の概念から歴史、果てに戦闘

術まで幅広く学んでいる。  
スーパ―魔法生徒だ！！

……………ごめん

―――  
昼

授業はだるいので要所要所を聞いてあとはボ―ツとした。サボりは学生の特権だと思う。

ちなみに今は夏休みであつて本来学生が学校にいるべきではないのだが……なんとこの学校は休みを返上してまで俺達を勉強させたいらしい。

本気で迷惑だ。

だけど学校側も良心というものがあつたらしい。授業は午前中だけ……要するに。

「終わった。」

「なにがだ？人生か？それとも命か？」

「それだと、どちらも変わらないけどな。」

俺が言った終わったとは勿論授業の事だ。『兵吾』にツッコミをいれ鞆に教科書を入れる。

「そうだ。龍この後暇か？」

コイツがこうやって言う時は必ず何かに誘われる。まあこの後は暇だから別にいいが……

「暇だけど？」

「ならよかった。今からミッドチルダに行かないか？」

なんでコイツ、ミッドなんかに行きたがるんだ？確かに此処からなら転移場所が近いからそんなに時間はかからないが……俺にとつては“飛んで火に入る夏の虫”状態だ。ばれてはないだろうけど……

「……なんでまたそんな急に思いついたんだ？」

「いやー」

昨日ハッキングした時にちょっと情報を仕入れてね」

そして鞆から一つの紙を出す。

「なんとあの伝説の部隊『機動六課』のスターズの隊長『高町なのは』さんとライトニングの副隊長『シグナム』さんが模擬戦をやる

んだよ！！これは行くしかないでしょ！！」

手渡された紙には詳しい情報が書いてあった。どうせ非公式だろうが…

俺は頭の中で考えをまとめる。

「（逆にこれはチャンスかもしれない。俺達が起こした事件は、古<sup>ストロキア</sup>代遺物が関わってるから十中八苦、機動六課が出てくるだろう。そう考えておくと少しでも情報が欲しい。それに捕まっても模擬戦を見にきた生徒達で済ませられるし……………なにより）」

『兵吾』の顔を見ると“行こうぜ！！行こうぜ！！オーラ”がとも出ていた。

「（…………コイツ機動六課のとてもないファンだから一人で行かせると碌なことにならない。）」

要するに俺にデメリットはないに等しいのでここはコイツの提案に従おう。それが俺の出した答えだった。

「わかったよ。じゃあ行くか……時空管理局に。」

chapter one

END

,

出来ればその提案は却下させてほしい（後書き）

おはようございます、こんにちは、こんばんは!!

この小説を見てくださり、ありがとうございます。

多国籍軍です。

初めて小説を投稿します。といってもモバゲーじゃ消されるから来たんですけど……。

駄文ですがよろしく!!

感想も待ってます。

ちなみにこの小説は主人公の影が薄いです。

それは誰の物語り？（前書き）

貴方達にわかるのだろうか？

私達、僕達、俺達の物語りが……

多分わからないだろう。

だけどせめてこの話しが有ったという事実だけは忘れないでほしい。

願わくばこの物語りの人物に安らぎを……

それは誰の物語り？

ここはどこだろうか？

少なくともとても大きな部屋だというのがわかる。

その部屋は大きさも去ることながらところ狭しと並べられた金、銀の装飾品というものに目を奪われそうになる。

その豪華絢爛な部屋の中、一人の少女が天蓋付きのベッドで腰を下ろしていた。

天蓋から延びる薄い幕が少女の顔を隠しその表情が読み取れない。

「あら、どちら様？」

少女は今気づいたのだろう。自身の部屋にある沢山の窓の内の一つ——私がいるところに視線を送ってきた。

「……私？」

「貴方以外にいるの？」

「…そうだね……私は『——』。」

「ああ、貴方がそうですのね。これからよろしく『——』。私の名前は『——』よ」

「……よろしく」。」

これは遠い遠い過去の事。そして夢のような過去。私は一人の少女と出会った。

——私は何？

少女の思いに白銀の月が輝いた。

さて、これは誰の物語り？

それは誰の物語り？（後書き）

ご精読ありがとうございます！！

多国籍軍です！！

この章は間章の役目です。重要な名前、表現、物などはすべて伏せさせてもらっています。

後半に役に立つかわかりませんが……

この章は読者の皆様にいろいろ想像して貰うために作りました（…  
…エロい意味じゃないよ！！）。

ミステリーみたいなものを間章では目指しています。

この章は結構頻繁にでるかな？かな？

自分でもわかりません。

面白くなるようがんばります！！  
応援よろしく！！

感想もお願いします。

ではがんばります。ノシ

## S i d e S t o r y 買い物（前編）（前書き）

その日は友達と買い物に行くだけだった。

まさかこんな事になるとは……………まあ、後悔はしてない。

友達になってメリットもあるがデメリットもある。本当はそんなことを考えたくないんだけど仕方ない。

私は悪の組織に属しているんだから……………。

## S i d e S t o r y 買い物（前編）

---

夏真っ盛りの猛暑の中、私こと『アリス・B・ティーゼル』は今ミットチルダの中央区の繁華街にいる。

中高の学生は今は夏休み真っ只中だ。例外として龍と『ウィル』が通ってる国立魔法学校は夏休み返上で勉強らしい。

……さすが有名校

私に通ってるのは私立のしかも女子中。だからそこまで規則は厳しくない。だから今は夏休みを満喫中だ。

私がいるのは繁華街の中にある公園のでっかい時計台の下。ここで友達を待ってる。周りには他にも友達を待ってそうな奴からイチヤイチヤするカップルまで沢山いる。

……いちゃつくなよ。腹立つから

待ち合わせ時刻は一時で現在十二時五十分。十分前だが全然問題ないだろう。私はそう思い近くの避暑地のベンチに向かった。

——三十分後

いくら避暑地と言っても暑さまでは変わらない。このくそ暑い中三十分も待たされれば（十分は自業自得だが……）熱中症の危険だつて出てくる。待ち合わせに遅れてる人はそれがわかつてるのか？いいや、わかっていない。

——更に三十分後

流石に不安になってきた。私の待ち合わせ人は、なんだかんだ言つて不幸に絡まれ易い人だから何か事件に巻き込まれているのかもしれない。

そして私はその後始末に駆り出される。

「……………」

想像しただけでも今日の安らぎ時間を壊される。それだけは本当に嫌だ。

私は立ち上がつてとにかく片っ端から捜そうと真夏の照り付ける太陽の下に足を踏み出した。

案外すぐに見つかった。

捜しに行こうと繁華街に出ようとした時に、ものすごく大きな罵声が出ている事に気付いたので“まさか”と思ったが……面倒事は回避できなかったようだ。

三人の中学生ぐらいの人物が五人の高校生ぐらいの典型的不良に絡まれている。

一人が知り合い……というか私の今日の待ち合わせ相手のイヴ。身長は私よりも高く150あるかないか位で紫の髪を両横に縛っている少女だ。

残りの二人は面識がない筈だ。見たことがないので多分と言わざるおえないが男女でいるという事はカップルなんだろう。

さらに、ちらつと不良の方を見ると不良の一人の足に付いている“夏には絶対に買ってしまおうランキング堂々の第一位”のバニラアイスクリームが付いている。これが騒動の原因なんだろう。その部分を挿しながら怒鳴ってる。

とても大人気ない。

大方その子供二人組（身長は私より高いが……）がラブラブデートの中でアイスを買ってそれをたまたま通ったヤンキー共の足にかけてしまったんだろう。

そしてそれを見かけたイヴが止めに入ったんだろう。

まったく人が善いんだから……。私はそんな事を思いながら騒がしい集団に近づいた。

「何事も思い込みは捨てて物事に臨め。」私が子供の頃から父に言われてきた事だ。

今日はそれを身をもって感じた……

確かに不良はアイスをつけられて怒鳴っていた。

しかし怒鳴られていたのは二人組ではなく

……

私の待ち人だった。

「ゴラアア！！てめえ、何しつてくれてんの？コレまじで高いんだよ？クリーニング代払えやああ！！！」

「そんな事言わないでください！！この子も反省してますから！！！」

二人組の一人、赤髪の少年が不良に言う。

「そうですよ！！許してあげてください！！！」

二人組のもう一人、ピンク髪の少女も必死にイヴを庇っている。

「……………」

イヴはただその言い合いを静観しているだけだ。  
それを周りの人は見て見ぬふり。

…まったく自分の事が、かわいい奴だらけね。

まあ、あの子は誰の助けも必要ないだろうからいいけど

「てめえ！！いい加減にしろよ！？」

私が考えてる間に不良の一人が一向に喋らないイヴに怒鳴った。

「……………」

それをイヴは無視をして黙り続けている。無機質な目には何が映っているのか私にもわからない。

私はそろそろ不良達が殴り掛かる頃だから助けようかなと思ったが私の思ってもみなかった人物の介入でそれは終わりを告げる。

「どうしたの？エリオ？キャロ？」

唐突にそんな声が聞こえたかと思ったら管理局の服装をしている金髪の女性が三人と不良の反対側（私から見ると調度道路一つ分離れた所）から歩いてきていた。

「あつ！！フェイトさん！！」

「……………えっ？」「」

フェイトって……………あのフェイト・T・ハラウン！？

数々の事件を解決してきた執務官であり若くして空戦ランクSを所持している管理局の切り札。

フロントアタッカーとしてあまりに有名な存在だ。

【管理局の白い悪魔】こと高町なのは、【金色の閃光】こと、フエイト・T・ハラオウン。【夜天の書の所持者】八神はやて。

この三人が今現在の管理局が所有する最高戦力な筈。

どうしてこんなところに！？

まさか私達の正体が！？

もし私達の存在がばれたのだとすれば戦闘になるのは必須。

イヴなら戦えるだろうが所詮私は非才の魔術師。時間稼ぎが関の山だ。

私の持っている質量兵器融合型デバイス【ミィシャ】はこんなところで起動させて戦うには厳しすぎる。

私は手に冷や汗をかきながらポケットの中のデバイスをにぎって臨戦体制になる。

イヴも相手の強さを理解したらしい。いつでも動けるようにしている。

不良達はいきなりの大物の出現に驚いている。

……ていうか不良が管理局の人達の事知ってたんだ。

「で？どうしたの？」

そして彼女は赤髪の少年——おそらく『エリオ』——に話しかける。

「あつ……フェイトさん！！実は………」

「きよ、今日のところはこれで勘弁してやる！！」

不良達はエリオが何か言う前に捨て台詞を吐いた。そして不良は自分達が敵わないとわかったのだろつ。最終的にエリオが説明している間に潔く帰っていった。

そして姿が見えなくなっていた。

問題は私達だ。

この状況で助けてもらったのはイヴの方だ。不自然な印象をつけさせずにどうにかこの現状を打破したい。

とにかくお礼をしなくちゃ……

「どうもありがとうございます。」

私は出来るだけ笑顔を作りながらフェイトに近付く。

「ん？あなたは？」

「私は『アリス』です。それで助けてもらった彼女はイヴ。私の友達です。」

私は“ほら挨拶しなさい”とイヴの頭を小突く。

「……イヴ」

簡潔に一言で挨拶をすませる。どうやら必要以上に関わるつもりは無いようだ。

その意図に気付いたのだろう。フェイトは苦笑いを浮かべている。

「私はフェイト・T・ハラオウン。よろしく」

「エリオ・モンディアルです。」

「キャロ・ル・ルシエです。この子は飛竜のフリードです。」

「キュー」

三人の自己紹介が終わり一段落するのが私は一刻も早く逃げたい

「というわけで今日は本当にありがとうございました。」

「というわけで？」

「いや、気にせずに」

お礼も済んだところでいち早くその場所から逃げようと廻れ右。少し印象がつくかもしれないがこの際仕方ないでしょ。

だが、これもまたフェイトの一言によって崩れた。

「あなた達、今暇なの？」

暇どころか今すぐ違う場所に行きたいだけだ。などとは言えないが

……

「どうしてですか？」

私が聞くとフェイトさんは笑顔で答えてくれた。

「実はこの子達あまり遊びとかしなくてね。それで友達がいなくてとても不安で……。やっぱり同年代の子と遊んでほしいの」

ようするに私達と友達になりたいって事かな。

管理局の人と知り合いになるのでさえデメリットになる。その息子、娘の友達になるっていうのもちょっとまずい。

イヴはやっぱり嫌がるかな。

そう思いイヴの方に顔を向ける。

「……私は……いいよ。」

だが私の思いとは真逆な事にイヴはこれを承諾した。それなら

「わかりました。

それじゃあ、『モンディアル』君。『ルシエ』ちゃん。遊びに行こ  
！！」

「エリオでいいですよ。」

「私もキャロでいいです。」

「そう？ならエリオ。キャロ。遊びに行こ」

こうして私達は昼の街中に踊り出た。

S i d e S t o r y

E N D

## Sidestory 買い物（前編）（後書き）

ご精読ありがとうございます！！

多国籍軍です！！

本当はこの話しは次の話しとセットなんです。ページ数が多くなるのでわけさせてもらいました。

原作キャラが次々と出てきますね。ですがオリキャラも結構でると思います。（ていうかです。）

人物説明は小説内でしかないので何章かで、まとめるとはしないと思います。

あとはモバゲーの物（非公開ですが）をコピーしています。だから誤字、脱字または内容が合わないなども結構出ると思います。

なのでそういうのも気づいたら注意してくれるとうれしいです。

がんばりますので、感想も応援もよろしく願います！！

,

## 親友の無駄な一面（前書き）

私は知ってしまった。  
この世界の醜さを…

私は知ってしまった。  
この世界の不条理を…

私は知ってしまった。  
この世界の悪を…！

私以外の誰かがやってくれたかもしれない。私が行動したって微々たるものかもしれない。  
でもほっとけなかったから…。  
私はこの手で世界を変えてみせる。

ブラックボックス  
黒い箱

序列三位・推定魔導ランクAA+

「救済のQueen」  
クイーン

『アリス・B・ティーゼル』

## 親友の無駄な一面

### 時空管理局模擬戦場

管理局本部の敷地内にあるこの模擬戦場は少し特殊な装置がついている。

それは擬似投影システム

投影といっても形もあれば重さもある。ようするに本物と何も変わらない。

そしてその模擬戦場の中心では二人の女性。

一人は桃色の髪の女性『シグナム』もう一人は栗色の髪の女性『高町なのは』だ。二人は投影されたビルが一番上で向き合っていた。

その周りでは本部の管理局員達が我先にと押し寄せていた。

「ええーと、最近は何かと物騒です。なので今日は管理局で実施している訓練の向上を目的とした……………」

今にも戦いが始まりそうな空気なのだが、決まりなのだろう一人の黒髪の女性『冴姫凜』が淡々とこの模擬戦の意味やルールを説明する。

彼女自身ものすごい気になっている試合なのでぶっちゃけものすごいスピードで説明している

「……………というのがルールです。では双方、健闘をお祈りします。」

そういつて彼女は巻き込まれないように離れる。

「高町。お前と闘うと思うと心が躍るぞ。」

「私もです、シグナムさん。」

そう言つてデバイスを構える。

そして闘いは始まった。

俺『神無月 龍』は友人の『兵吾』に誘われて管理局のE級模範戦を見に来ている。担任（『アオイ』ちゃん）の帰りのHRが長引き開始時間に間に合わなかったんだが……

「凄まじいな。」

遅れたといつてもだいたい15分位なんけどもはやここは荒地

とかしていた。

見える範囲のビルはすべて倒壊して地面には大小それぞれのクレーターが出来ていた。

まず俺の攻撃とは火力の桁が違う。というか火力だけじゃない。射撃の正確性、剣撃のレベルそしてスピード。全てに、おいて俺は負けている。

ゆりかごを落としただけはあると思う。

ていうか教導官の高町なのはって奴、砲撃魔法だけであの剣士シグナムと渡り合ってるって……

彼女達の得意分野で戦ったらまず勝ち目は無いだろう。考えただけで恐ろしい。

横にいる『兵吾』も自分が想像してたのよりも高い闘いだっただろう。口を開けて固まってやがる。

「コイツは予想外だな」

「いや、いくらなんでもレベル高すぎだろ。」

・・・

「兵吾。お前あれらと闘えるか？」

「まず、瞬殺されるな。」

「その後は？」

「意識が無くなるまで O H A N A S I ですね。わかります。」

「……………」

ありえそう。

『兵吾』は将来管理局に勤めたいと思っていたただけあってこの模擬戦でまた一つ目標が出来るだろう。

俺もこの試合から何か対策を練らないと……………

例え汚くても

醜くても

確実に勝利を勝ち取るために……………

「君らだれなん？」

「えっ……………！？」

いきなり声をかけられた俺達は振り返り驚いた。

ちなみに言い忘れてた（描写忘れでは決してない！！）が今は管理局の内部に侵入してた。もちろん無断で……。だから見つかったら即刻逃げるつもりだったんだが振り返って居た人物があまりにも凄い人物だったのでそれは叶わなかった。

時空管理局

機動六課の創始者にして自身も魔導士ランクSSを持つ八神はやて本人がそこに居た。

「で？きみらは何でここにいるん？」

俺達が答えなかったからだろう。もう一度聞いてきた。

ヤバイここで捕まったら困る（主に世間体が）

[illegible]

俺の中に電流がはしる！！！！

そうだ！！アルバイトの清掃員で言えはいんだ！！

そうすれば学生服って言うのも領けるし何よりここにいても何ら不自然じゃない

これだ！！！！

「実は……「貴女のファンなんです！！！！結婚して下さい」……。」

今退路が無くなった

隣にいる奴にわりと本気な殺気を浴びせつつ弁解する。  
ていうか、しないと死ぬ（社会的に）

「いや、別にファンだったから忍び込んだとかそういう事じゃなくてですね「結婚してください！！！！」……お前は黙れえええ！！！！」

口封じしないとコイツはめんどくさい事を言い続けるだろう。なので鳩尾にパンチを一発お見舞いしてやった。泡吹いて白目剥いてるが気にしない。

というかマジで状況説明しないとマズイ。不審者になる。  
そう思い説明しようと口を開けたのだが……

【パスツ】と『兵吾』の鞆から一枚のファイルが落ちる。普段ならまったく気にしたりしないんだがいつもと状況が違うからか目がいってしまった。

『マル秘！！機動六課女性隠し撮り写真』

タイミングが悪すぎた。言い訳の内容も一気に放棄して俺は一目散に『兵吾』を担ぎ逃げ出した。

後ろから聞こえるのは八神はやてが怒鳴り声で部下に俺達を捕獲する指示をしている声だった。

このページは音声のみでお送りいたします。

「ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！！！！なんでコイツ犯罪に手染めてんの！？意味不明なんですけど！？って人の事言えないか！？」

「いたぞ！！アイツらだ！！」

「げっ！！はやっ！！」



「うるせええ!!せめて方向を言えよ!!」

「見てわかれ!!!!とにかくそのドアを開けて外に逃げろおお!!」

「わかったあああ!!!!」

「……少し頭冷やそうか。」

「へ?」「は?」

先に結果を言おう。

逃走開始三十分で見事に捕まった。

……………なんだよ、その冷めた目は？

だってここ管理局のホームだぜ？逆に三十分逃げたことを褒めてほしいし……

ていうか高町の野郎（野郎じゃないが）わりと本気で「スターライトブレイカー」って技使いやがった。

「どう？頭冷えたかな？」

「……………」

「まだ足りないのかな？」

「むっちゃ反省してます。ですから笑顔でカートリッジをロードし

ないでください。お願いします。」

椅子に縛り付けている状態でこの仕打ちは酷いと思う。

逃げだした時にはやてが念話で集めたんだろう機動六課が大集合していた（全員ではないが）。

今ここにいるのは

六課部隊長

『八神 はやて』

スターズ分隊長

『高町 なのは』

ライトニング副分隊長

『シグナム』

スターズ隊員

『スバル ナカジマ』

スターズ隊員

『ティアナ・ランスター』

……どうしよう。

ここから無事に帰れる気がしない……。

「で、貴方達何したのかわかっているの？」

俺の前に『ティアナ』が来て話を始めた。

「器物破損に不法侵入、あげくの果てに……と、と、盗撮なんて。」

「いや、盗撮はコイツだけだ。」

隣にいる『兵吾』を顎に差して言う。

「なににしる貴方達は罪を犯したの。わかる？」

困った『兵吾』が捕まっても構わないが（構わなくないと思うが……）俺が捕まると芋づる式で色々でるから何とかしなければ……。

「なら司法取引しませんか？」

今まで黙っていた『兵吾』がいきなり喋りだす。

……って、司法取引？

何言ってるんだ？

「それはどういう事なん？」

八神が喰ついてきた。

ここで『兵吾』が爆弾を落とす。

「簡単な話ですよ、はやて様。第一級危険物指定の古代遺物【五つ

ロストロギア

ランパレット  
の城壁】の情報。それからそれを奪った組織………なんてどうですか？」

一同が固まる。というか俺ですら驚いてる。

六課組は何故その事を知っているのかという事で。俺はまさか親友のコイツにしつぽを掴まれるとは思わなかったからだ。

コイツ、本当は色々情報手に入れてたのに黙ってさっき嘘つきやがったな。

「……………その情報の信憑性は？」

「かなり高いですよ。ちなみに情報源は秘密です。」

八神はそれを聞き“うーん”と考える。そして何分か考えた後に顔を上げた。

「まず話を聞こか。」

「わかりました。あの古代遺物ロストロギアの正式名称は【五つの城壁ランパレット】。第1  
2管理世界で3年前に発見及び回収。

そして各研究所をまわり最後に次元犯罪者『ラッシュ・エドガー』の手により研究所外に持ちだされた。」

「ティアナ。調書にそこまで書いてあるの？」

高町がそう言う。

「いえ、書いてないです。」

「それはそうですよ。俺がこの情報掴むのにどれだけ苦労したか……」

“はあ”と溜め息を吐きながらもちよつと自慢げに語る『兵吾』。

コイツの情報収集能力嘗めてたな。まあ外部に出てる話に大事な話が入って無いはずだけど……

「続けますよ。といっても後はそちらの情報とまったく変わりませ  
ん。」

「なら、その古代遺物ロストロギアを発動させた場合の結果は？」

「そうですね……簡単に言つと空間湾曲、認知妨害それから創成が一  
辺に起こります。」

「簡単に言つてねえよ」

やべー！！ツツコミ入れちゃった！！

「確かにそうだな……例えば今ここで誰かが死んでも誰も気づきません。というか認識ができません。」

「それが認知妨害？」

「そうですね。これが認知妨害です。」

「それなら後二つは何なん？」

はやてが疑問に思っている事を聞いてくる。なるべく多く情報を聞き出したいんだろう。こういう所は部隊長らしい。後は只の女の子みたいだけど……

「空間湾曲と創成ですね。さっきの認知妨害も無茶苦茶ですがこれはもっと無茶苦茶です。なのはさん、その鞆に入ってるファイルを取ってくださいませんか？」

なのはが預かっている鞆から一つのファイルを取り出す。

『幼女大図鑑』

「……………」

たつぷり一分間の氷河期。なんでコイツはこんなに皆を静かに出来るんだろう？

「なのはさん！！それじゃない、違う方です！！」

「えっと……ゴメンね？」

うわっ

めっちゃ気を使われてる。逆にあれは傷つくでしょ。

「……続けます。」

それでも『兵吾』は高町からファイルをもらいその中の資料を皆に渡す。

「何やこれ？」

はやてがその紙を見て一言。俺だって何が書いてあるかわからない。専門的な言葉や難解なグラフ等のオンパレード状態だ。

「それはこの古代遺物が発動するために必要な魔力。それからそれの被害状況のシュミレーション。後はその他諸々ですね。」

「これ全部がなの!？」

「はい、そうです。」

暇人か

六課のメンバーが書いてある紙を次々読んでいく。だがある一枚で手が止まる。

「……………嘘やろ」

「……残念ながら本当です。」

## 古代遺物【五つの城壁】ランバレットの詳細データ

---

### 認知妨害

高密度の魔力を辺りに分布させて人間の感覚を支配して使用者の思い通りにする。後遺症がでる事もある。

### 空間湾曲

魔力を指定した空間に短時間で大量に流すと一種のブラックホール状態となる。【五つの城壁】ランバレットはそれを任意で引き起こせる唯一無二の古代遺物である。

### 創成

植物や人工物は勿論。さらには人や動物といった生物まで創成できる。

現在は死者を生き返らせる研究が進んでいるという。

補足

この古代遺物は効果の利便性はとても高いがその分使う魔力が半端なく高い。大容量の魔力が封印されているロストロギアを使うとしても数が必要。

ある文献にはこれと同一のものが五つあると記述されている。

「こないなもん使われたらこの世界終わってしまつて……」

はやては呟くように言った。だがその言葉は重く六課の人間にのしかかっている。

「でも、そんなすごいロストロギアなら使う魔力だって相当な筈です。簡単には使えませんよ」

ナカジマ スバルは空気を变えようと明るい口調で話す。

「確かに使う魔力は半端ないです。だいたい魔力ランクSSの魔導士が数万人分かな。こんなの集められません、

・・・

「正攻法なら」

「それってどういう事？」

「そのままの意味ですよ。正攻法が駄目なら裏技を使えばいいじゃないですか。」

六課組は首を傾げている。ちなみに俺も皆に合わせて首を傾げている。

だが一人わかっているみたいだ。

「……………それがロストロギアちゅうわけか。」

「そうですよ。大容量の魔力がそのまま封印された古代遺物<sup>ロストロギア</sup>。かなり数は限られますがこれを四つでも集めれば魔力は貯まりますね。」

コイツ俺達がやろうとしてることをバンバン言ってくからこれから大変になりそうだよ。

「で、誰なん？こないな危ないものを盗んだ組織っちゅうんは」

……遂にきたか。

これで俺達が動ける範囲が狭まる。

「掲げる信念は革命。向かってくる敵には容赦無し。構成は戦闘員が五名それをまとめるリーダーが一人の少数武闘派組織。」

『黒い箱』（ブラックボックス）。それが【ランパレット】を盗んだ組織です。」

「ブラックボックス？そんな組織聞いたことが無いな。本当にそうなのか？」

今まで沈黙を守ってきたシグナムが口を開ける。他の奴もそれに同意らしく首を縦に振っている。

「秘密結社ですから情報が無いんですよ。でも嘗めない方がいいと思いますよ。俺の調べではメンバーの一人が魔導士ランクSSで後のメンバーも比較的に高いランクの持ち主ですから。」

「個人の名前はわからないの？」

「残念ながら全員名前で呼ばないし仮面を付けているので……」

“そうなんだ”と高町は一人納得したらしい。

俺としてもあまり組織の情報が流れるのは好ましくないのでもそろそろ逃げたい。

「すみません。こんな所でどうですか？もう充分だと思っんですが……」

俺がそう言つと八神は“ああ、そうやったな”と言つて俺達の縄を解く。

「ていうか別に管理局の中に入るのも別にそこまで悪いわけやないんや。ただ盗撮はあかんと思つてお灸を据えようとしただけなんやけど……想わぬ情報が入ってきたっちゅうわけや。」

……………えっ？

俺達の情報は柵から牡丹餅レベルだったの？

「とにかく貴方達は今後こんな事をしないように。」

「「わかりました」」

そうして俺達は帰してもらった。

龍はあの後『兵吾』と別れて一人で暗い路地裏を歩いていた。六課の奴らに拘束された時間が長かったらしく街は暗闇と化している。その中で龍はおもむろに携帯をだして電話帳を開き電話をかけた。

「ああー、『縁』さん？マズイことになりましたよ。管理局の六課の奴らに俺達のことかばれました」

『……！！……！！』

「違います違います。俺じゃなくて俺の友達です。だからそんなに怒鳴らないでください。というか、俺がばらすわけないじゃないですか。」

『——。——』

「そうですね。計画を早めましょう。遅麻にカートリッジと試作デバイスの作製を急がせます。」

『——。——』

「わかってます。慎重にいきますよ。それじゃ三日後に……」

会話を終え携帯を閉じる。そして辺りを見回し誰もいない事を確認した龍は奥に歩いていく。

路地裏にいたはずの龍はいつのまにか闇に溶けていた。

chapter Two

END

## 親友の無駄な一面（後書き）

ご精読ありがとうございます！！

多国籍軍です！！

読み返して気づいたんですけど話しの展開が無理矢理だったかな？  
ちよつと残念です。

そちらをもうちよつと意識して執筆していきたいです。

それでは

がんばりますので応援も感想もよろしくお願いします！！

それは誰の物語り？（前書き）

今回は二つだすので最初の後書きは書きません。

.....  
すいません

それは誰の物語り？

汚れ一つ無い真っ白な壁に真っ白なベッド。そして辺りには病院ならではの消毒液のような匂いが広がっていた。

ベットには一人の2、30歳台の女性——僕の——が弱々しく横になっていた。そしてそのベッドの脇に僕がいた。

——どうして？なんで——」がこんな目にッ！？

考えたって出てこない永遠の疑問。

「そこにいるの、——」？

「——」はその弱々しい口を開け僕の名前を呼ぶ。

「……いるよ、——」。

「よかった。私はね……もう長くないわ。」

「そんなことないよ——」！！大丈夫、絶対僕が助けるから！！だからそれまで……」

「いいのよ、——」。自分の身体だもん、わかるわ。だから私の話を聞いて。」

僕はその言葉を聞いてグッと押し黙る。

「ありがとう」。

「……いいんだよ。それより話って何？」

「ごめんね……私はこの家を守らなきゃいけなかったの。代々受け継がれた、」

「家を……。」

「わかってるよ、」

「……だからこれからも僕と一緒に……」

「……違うわ。言ったでしょう？私は長くないわ……。これからは貴方だけで守るの、」

「家を。」

そう言つて「」は僕の手を自身の手で優しく包みこんだ。

「貴方はまだ小さいのにこんな大変なことを頼んでごめんね。本当に私が不甲斐無い（ふがいない）ばかりに……」

「そんなこと無い……」

「は世界一頼りになるから……だからそんなこと言わないで。」

「……………ありがとう」——「」

そう言った直後、『——』はゆっくりと目を閉じていく。

「『——』。出来ることなら私はもっと、貴方たちとあ、そびた  
かつ……………た、なあ……………」

ピー——つと機械特有の甲高い音が鳴り響く。

その音を聞き付けたのか白衣を着た男が危機迫る顔で『——』に近づき、後から来た看護婦に指示を出す。

「心配しないで。僕が必ず『——』——『家を守るし』——『の敵<sup>かたき</sup>を討つから……………」

これは遠い遠い過去のこと。一人の少年は女性の亡きがらを前にして折れぬ誓いを立てた。

——全ての悪に永久<sup>とわ</sup>の眠りを…

そして彼はデバイスを握る。

さて、これは誰の物語り？

## 襲撃と不確定要素（前編）（前書き）

……私は壊れてしまった。どんなに頑張っても笑えなくなつて、誰かを傷つけても罪悪感なんて沸かない。

感情欠落

一種の病気なんだろう。

……いやもしかしたら感情なんて最初から入れられなかったのかも  
しれない。

だって私は戦うために造られた『——』だから……

ブラックボックス  
黒い箱

序列一位・推定魔導ランクSS+

「不完全なAce」  
エース

【イヴ】

この章は視点がコロコロ変わります。……………すみません

## 襲撃と不確定要素（前編）

俺達が起動六課の奴らに捕まった日から数えて調度三日たった日の夜。

俺はブラックボックスの会議室にいた。……遅刻せずに。

「悪いな、今回は俺の責任だ。」

俺は開口と同時に頭を下げる。周りの奴らはすでに話を聞いているのだろう。

「違うよ龍やん。今回ばかりは誰の所為でもない。むしろそこまで調べた君の友達を褒めるしかないね。」

「そうね。貴方は遅刻もするし寝坊もするけど敵に情報を渡す程バカじゃないしね」

「……………しかたない事。……気にしない。」

ウィル、アリス、イヴの順番に言った。

「まったく、めんどくさいことになったな。」

初登場の中性的な顔立ちの短い黒髪の子供。身長は『King』より小さい。今はブラックボックスのメンバー用のロープを身に纏って首元に二つの指輪をモチーフにしたアクセサリーをつけている。

コイツは『Jack』の『東堂逞麻』（とうどう たくま）。  
特別な希少能力レアスキルはないがコイツの発明と思考は凄いものだ。

「どうすんだよ。管理局の奴ら、俺らが狙うロストログアわかって警戒態勢になってんだろ。それじゃ奪えないじゃねえか」

逞麻はそう言ってるが興味なさそうに目の前の知恵の輪に集中している

「それはもう考えてある。……危険だが二手に別れて一方は誘導も一方は奪いにかかる。」

「へえー、二手にすんのか。で、どんなチーム分けにするんだ？」

「俺一人とお前らで別れる。」

これには全員驚いたらしくこっちに顔を向ける。

「おい、責任感じてならそれはお門違いだぜ。どうせばれるもんだっただ。それが少し早くなったただけなんだからな。」

おっとそんな風に捉えられたか……

「いや、そんなんじゃないぞ。ただ俺が隠密に長けてるからってだけだ。それにあの伝説の部隊を相手にするんだ。やっぱ戦力はとって置いた方がいいだろ？」

俺がそう言つと遅麻は“そうかよ”と一言呟いて黙り込む。

「他に異論はないな。それじゃ始めるぞ」

---

S i d e アリス

どうやら今私達が狙つてるロストログアが研究のために他の施設に移されるらしい。今回はそこを狙うんだそうだ。もちろん警戒は厳しいだろうが……

龍から聞いた作戦は簡単だった。私達が派手に暴れてその間に龍が目的のものを取ってくるだけ。

要するに私達は囷ということ。別に構わないけど……

「そろそろ行きましょうか『ミーシャ』」

ビルの最上階で私は準備する。

《OK my Master（わかりました。マスター）》

《Standby Ready?》

「セットアップ!!」

私の服が粒子状になりバリアジャケットになる。魔導士というよりも騎士がつけている鎧のような金の重装。着たら動けなくなるようなものだ。実際に起動力はもの凄く低い。

「よし。『ミィシャ』!!超長距離砲でいくよ!!」  
ロングバレル

《All Right》  
わかりました

その瞬間私の目の前に一つの大型砲が顕れた。私の身長をゆうに二倍にした大型ライフルのような物で砲先の先端が四角いのが印象的だ。

対魔法障壁貫通機能付きの『大型ライフル』

装備された瞬間に地面が耐えきれずに輝<sup>ひび</sup>がはいる。元々の鎧が重かったのだろう。だが私は動かない。

ここから狙撃するのだ、とてつもない集中力がある。

「それじゃ始めましょうか!!!!!!」

私の足元に六亡星の魔法陣が浮かび上がり砲先を守るように展開した。

そして光の収束

集められた光は新たな光を吸収し膨れ上がる。

その光が集まる限界まで私は動かなかった。

光の弾はバスケットボール並まで大きくなり停止。

狙うのはロストログアを運んでいる三つの飛行艇の内の一つに射撃をする。

最後まで狙いを定めて私はトリガーを引く。

「ロングバレット超長距離貫通砲 fire!!!」

トリガーを引いた瞬間に伝わる衝撃。それは腕、肩、腰、脚と続いた。

砲口に何重にも表れる魔法陣から放たれた螺旋状の収束砲は大気を切り裂き進んでいく。

今開戦の狼煙はあがった

S i d eなのは

私達機動六課は今回ロストログアの警護にあたっている。何があっても対応出来るように三つの飛行艇で死角が出来ないように飛んでいる。

「本当にあんな奴の言う事を信じるんですか？なのはさん。」

私の隣にいる『ティアナ』はとても不服そうに言った。

そういえば『ティアナ』は最後まで『兵吾』君の事快く思っていない。

「でも今こっちは情報が無いのは事実なの。それに何も無ければそっちの方が嬉しいし……」

私がそう言っているとティアナは“それはそうですね……”と言った後黙ってしまった。

このロストログアも危険性が高くフェイトちゃん達ライトニングがロストログアの傍にいて私達スターズが周辺警護をすることになっている。

しかし周辺警護といっても辺りはパラパラと草の生えた荒野と少し見えるビル。何に対して注意をはらえばいいのか？

その油断があったからだろう。直後一番後ろの飛行艇の翼に砲撃が

撃ち込まれた。

威力と貫通性を重視した収束砲。もし動力部分に当たったら粉々になっただろう。だがそれは左翼に当たりえぐれ、飛行艇はそのまま土に飲み込まれて墜落した。

私はすぐに臨戦体制をとる。と、見計らったようにロストログアを積んだ飛行艇の周りに三つの魔法陣が描かれてその中から仮面とローブを被った人達が出てきた。三人の中で一番小さい子が私の所に凄いスピードで向かってくる。武装解除の指示をしたが聞く耳を持たなかった。

「レイジングハート!!」

《accel Shouter》

「シュツート!!」

向かってくる子に魔力球を放つ。全てその子に当たるような軌道にして、何十という光の球が向かう。

だが消えた。

何の前触れも無く突然その人物の前で……

「なっ！！」

「……………むだ。」

私が驚いている間にその人物は私の目の前まで迫ってきていた。

そしてその人物は私の腹部に正拳をいれる。

その一撃は何の抵抗も無く私のバリアジャケットを貫いた。

なんで？こんなに簡単にバリアジャケットが抜かれるなんて

一つの疑問が浮かんだが今はそんな事を考えてる場合ではない。

第二撃目が目前に迫っているからだ。

顔に当たる軌道での蹴り。咄嗟に魔力で対物の障壁を張る。

だが消える。

それは力負けをしたとかそういう問題じゃなかった。本当にただ消えたのだった。

咄嗟に顔と蹴りの間に腕を入れたが障壁無しの蹴りを喰らい、私は飛行挺に叩きつけられる。

「なのはさん！！！」

「あんた何を……！！！」

「その青髪ちゃんと茶髪ちゃんの相手は僕達だよ」

薄れる意識の中でスバルとティアの悲痛にも似た叫びを聞いた。

「……………King、Jack……………此处は私……………一旦力を切るから……………貴方達は下で」

「わかったよエーちゃん。」

「俺もお前の力に巻き込まれたくないからな。同意だ。」

そう言つてJackと呼ばれた男が懷から一つの紙を出して地面に着ける。

「転移」

最初に出てきたような魔法陣が今度はスバルとティアの足元にもでる。魔法陣が発光したと思つたらその時は私と小さな襲撃者がいた。

「……………私はAce。<sup>エース</sup>……………見せてエースオブエースの力を」

S i d e ティアナ

「転移」

いきなり襲ってきた三人組の一人 Jack と呼ばれた男がそう言った瞬間辺りの景色が一変する。  
さつきまでは飛行艇の上にいたが今は平地いや荒野だろう。

何も無いと言いたいが一番最初に墜とされた飛行艇が炎をあげている。

ロストログアを守るためにいるのはスターズのメンバーと新しく入った凜ちゃん。

実力は充分にあるけどさっきの収束砲がまたいつ撃たれるかわからない以上ボヤボヤもしてられない。

「貴方達が『黒い箱』（ブラックボックス）ていう集団？」

スバルが私の横から聞いた。

「へえー、僕達の事知ってるんだ。珍しいねジャッキン？」

「……俺さ前から思ってたんだけどよお。お前俺の事嘗めてんだろ？ 何だよ、『ジャッキン』って!？」

いきなり私達の前で喧嘩を始めた二人。といっても一方的にだが。

「武器を捨てて投降する気は？」

「「ないね。」」

「ならボヤボヤする時間はないわね。行くわよスバル！」

スバルが前方の二人に駆け出す。向こうもKingと呼ばれた男が出てきた。

どうやら既にバリアジャケットを着ているようで腰から両刃の西洋剣を取り出した。

だがやはり武器を持つてる分遅くなるのは明白だった。

先に拳を振り上げていたのはスバル。Kingはそれに慌てる事なく回避行動をとる。

「シッ！！」

そして回避行動をとりながらの下方からの切り上げ。素早く重い斬撃がほぼ零距离で襲う。

がこれをスバルは切り上げる前に腕を押さえた。

そのまま横腹に閃光のような蹴り。

腕を押さえられたことと予想以上の速さの蹴りがKingの身体に動く時間を与えなかったのだろう。

まともに受け吹き飛んだ。

しかし彼は吹き飛びながらも空中で半回転。地面に足から降りる。

「強いねー、青髪ちゃん。陸戦ランクA Aってところかな？普通にやったらめんどくさいよ……」

嬉しそうに

悲しそうに

羨むように

呆れるように

彼は言った。

「悪いけど僕は出し惜しみする気はまったく無いから。いくよ『グリフォン』」

《yeah》  
わかった

彼は自分の持つてる西洋剣を捨てて新たなデバイスを使おうとする。

「……っ！」

「甘いわよ。」

だが私達がそんなの待っている必要がない。瞬間私が『クロスミラー ジュ』で作った弾丸の嵐が襲う。すぐにスバルはKingから距離をとった。

着弾

凄まじい砂埃がKingの周りをつつんだ。

これでもう立てないだろう。そう判断した私は反撃に気をつけつつもう一人の男『Jack』の方に声をかける。

「貴方の仲間はやられたわ。大人しく投降しなさい。」

するとJackは不思議そうに言ってきた。

「はあ？てめえらの目は節穴か何かか？あれでやられる奴はうちにはいねえよ。」

その言葉を聞き私達は砂埃に目を向ける。

全弾当たったはずのKingは何事もなかったように立っていた。

「んー、僕は今の攻撃は良いと思うよ。喋ってるこっちが悪いんだしね。むしろ定石だとすら思うよ。」

バリアジャケットは真っ白な鎧。仮面は顔の半分だけを隠す不思議なものだった。

Kingの少し前の地面には西洋剣が刺さっている。さっきまで使ったような適当なものではなく柄が青色で普通より若干細いのが特

徴的なものだ。

「だからこれを見たのは運が悪いからだと思って。……恨まないでね？」

その西洋剣に触れた瞬間、剣がKingの周りに何十にも何百にも増えていく。ある程度増えるとその剣の一部が合わさって新たな剣を創る。それは普通の西洋剣になり、その次は大剣になった。

その三種類の剣はKingを中心に回る。クルクルと……………

「これは『グリフォン』の固有スキル。だから非殺傷設定になっている。安心してね。」

そう言つてKingは空中に漂つてゐる細い西洋剣の一本を掴みながら向かってくる。

今度は身体強化魔法も掛けたのたろう。速さが桁違いだった。

「くっ!!」

スバルは『マツハキヤリバー』で剣を受けとめるが踏ん張っていて動けないようだ。

私はスバルを援護しようと魔力弾を放とうとする。

「スバル!!」

「させないよ。」

「っ！！」

だがそれも叶わなかった。いつの間にかKingの周りにあった筈の剣が私の方に向かってきたからだ。

剣の嵐

そう表現するしかない程の大量の剣は位置はバラバラだが全て私を狙ってきている。

私は『クロスミラージュー』でその剣を迎撃しようとしたが数が多すぎる。

そんなことをしている間にスバルとKingの均衡も破れてていた。Kingの一本目の斬撃を防いだがもう一本の剣が振り上げられたからだ。

一本を受け止めるので必死の様子のスバル。多分二本目は防げない。

私はとっさにそう判断したが剣の嵐が私を自由にさせてくれない。

しかしスバルの心配は要らなかったみたいだ。

スバルは一本目の剣を受け止めている腕を横に流して相手の身体を崩す。

そして崩すと同時にさっきと同じ横腹に蹴りを放つ。

しかしKingも二度は同じ手を喰らわなかった。

途中までスバルを斬ろうとしていた剣を自分が崩されたと同時に防御にまわしていたからだ。

蹴りを剣の腹で受け止めるKing。

「ふう、あぶないあぶない。勘弁してよ、もう。」

Kingはそう言ってそのまま防御に使った剣を振るう。

私も援護したいが剣の嵐が一向に減らない。

「……………なんですか？」

「ん？」

激しい攻防の中スバルは聞いた。

「貴方達は何が目的でこんな事をしてるんですか!？」

本当にわからないのだろう。スバルが戦闘を続けながら叫び声に近い声で聞いていた。

Kingの蹴りが宙をきる。

「目的ねえ。そんなこと聞いても意味ないと思うんだけど……………」

「そんなことないですよ！！私達が出来ることなら手伝います。」

「……………手伝う、ねえ」

「おい、King！！お前、それは——！！」

突如Kingの空気が変わった。魔力が爆発的に増える。

「都合がいいね、君らは。今更そんなことを言うんだ？  
手遅れなんだよね。全部！！！」

私の周りから突如剣が消えた。いや消えたんじゃないでまたKingの周りに集まっていただけだった。

「もう話す事は何も無いよ。『グリフォン』！！」

《load cartridge》

カートリッジが四つロードされる。

そして大量の剣は収束しある形を作っていた。

「……………これって十字架？」

「……………でかい」

空中にそびえ立つ剣で出来た十字架は全てを見下ろすようにそこにあった。

「我等が主よ！！全ての因果を裁ち切り罪人に永遠の安らぎを！！」

《conviction: crucifix panishment  
t【断罪：十字極刑】》

そしてその十字架は糸が切れたように高速で落下を始め全てを飲み込んだ。

Sideなのは

私はボロボロの身体に鞭を打ち立ち上がる。そしてAce<sup>エース</sup>と呼ばれている少女（声で判断した）と相対する。

「貴女達は どうしてこんな事をするの？」

「…………… 答える気はない。」

Ace<sup>エース</sup>はそう言って構えを作る。左手足を前に出した半身の構え。何かの武術だろうか…………

「でも…………強いて言うなら…………貴女達は…………管理局は…………嫌い。」

【AMFVer2発動】

辺りに機械的な声が響いた。

A M F って、アンチ・マギリング・フィールド！！なんでこの子がそんなもの使えるの！！

そして最初に見せた超加速

一瞬でまた私の懐に入られた。

魔法が効かないなら魔法の付加効果で……っ！！

ここで私は異変に気づく。

魔力が練れない！！

さっきまでは魔力は練れた筈なのに！！

魔力が練れない私に成す術はなかった。そのまま A c c e<sup>キース</sup>は私の左腕を持ち一本背負い。

またも飛行挺の翼に叩き付けられる。

だがそれだけでは終わらない。私が起き上がる前に蹴り上げられ空中に放り出される。

ここでやっと魔力が練れた。

それを感じるとすぐに飛行魔法を行使する。

A M Fはフィールド魔法。つまり接近されればされる程こっちは魔法が使えなくなる。

でもあのA M Fはガジェットに付いていたA M Fとは性能が段違いだった。ガジェットのA M Fは多少無茶すれば魔法は使えるレベルだったのに、このA M Fはまったく魔力が練れないレベル。

私はとにかく距離を空けて攻めることにした。目測でいうと大体四、五百メートル  
これ以上近づくとA M Fに引っ掛かる。

A M Fがある以上直接攻撃は狙えない。なら……

「スターダスト フォール！！！」

レイジングハートを中心にいくつもの小石が浮かび上がる。さらにそれは意思があるようにA c c e<sup>エース</sup>に向かつていった。

直接魔法が当てられないなら魔法付加でダメージを与えればいい。

「……」

だが捉えられなかった。スピードが速すぎる上に全て叩き落としている。

しかし彼女も避けてから動かない……いや多分動けないんだろう。

彼女は自分の周りにA M Fを張っているのでどうやら飛行魔法は出来ないみたいだ。

ならここからは長期戦になるだろう。私はそう思っていた。

突如彼女は私に興味を失ったかのように飛行挺の右翼まで行く。

「……………【絶招】蒼天<sup>そうてん</sup>」

彼女は脚を高々と振り上げる。そして一番上まで上げられた脚はそのまま最短距離で翼に到達するように降された。所謂、踵落としというやつだ。

その一撃は魔法無しでは破壊不可能と言われた強化合金の翼をあつさりと砕いた。

翼を失った鳥は飛べないも同然。飛行挺は急降下を始めた。あの中にはフェイトちゃんやライトニングそれに凜ちゃんもいるのに！！

私は助けようと近づこうとするがA c e<sup>エース</sup>がそれをさせてくれない。

「……あ。………Jokerが中に入ってた。」

その声は私に届かなかった。

,

## 襲撃と不確定要素（前編）（後書き）

ご精読ありがとうございます！！

多国籍軍です！！

今回も（？）新キャラが出てきました。この人も重要なキャラです（多分）。

あと最近まったく話しが思いつきませんし思いついても描写出来ません。困った限りです。

もつと頑張らなくちゃ……

応援も感想もよろしくお願いします。

では。また次回に ノシ

**襲撃と不確定要素（後編）（前書き）**

すいません、前書きは特にありません。

## 襲撃と不確定要素（後編）

---

Side Joker

俺は今変装をしてロストロギアを積んだ飛行挺に乗っている。明るい艦内は思いの他、人でごちゃごちゃしていた。

無理もないか

いきなりの奇襲を冷静に対処しろといってそれが出来る方がすごい。

ま、だから俺が侵入出来たんだし……

俺がそんなことを考えながらロストロギアが保管されている保管所まで向かう。艦内の位置は既に頭の中に入れてあるから脚運びはスムーズだ。

俺の横には現状を知ろうと躍起になって走り回っている人や他の艦と連絡しようと必死な乗組員が通っている。

そんな人達を意に返さず俺は保管所についた。

いくら騒ぎを起こしているとはいえ必ずロストロギアを守っている人はいる。此処からは俺の演技力と運の問題だった。

出来るだけ従業員用の制服を崩して着て準備した。そして……

「ロストロギア 古代遺物は大丈夫ですか!!」

カ一杯扉を開く。

中にいた人達は俺が入った瞬間全員武器をこつちを向けた。だが従業員服を着ているとわかるとホッとしたように武器を下ろす。

フェイト・T・ハラウンにキャロ・ル・ルシエ、エリオ・モンデリアルというと“ライトニング”か……ん？知らない奴もいる。新しく配属された奴か？

「大丈夫ですよ。少し揺れてますがこの通りロストロギアは無事です。」

そう言っ指したのが球体状の魔力保存用ロストロギア【グライン魔力晶】。  
水晶のような形をしているが中の六芒星で見分けられる。

「そうですかそれはよかった……でも此処じゃ色々な物があって危ないので移動しましょう。」

そう言っ俺は一步ロストロギアに近づく。

ちなみにこの保管所は意外と大きくなれ縦横がだいたい六、七百メートル位ありその中央位にロストロギアがある。

ハラウンは少し悩むような様子をしたが同意してくれたようだ。  
“そうしましょう”と言った。

「なら急いで場所を変えましょう。外にいる奴らにばれるとまずいですから。」

そう言つてまた一步ロストロギアに近づく。

「じゃあ、自分が持つていくので六課の皆さんは此处を出る準備をしておいて下さい。」

ロストロギアに触れてこの中から逃げるのが俺の勝利条件。あと少しで俺の勝ちだ。

「待つてください。」

あと数？というところで俺の腕が止められた。俺が知らない六課の奴にだ。

「どうしたんですか？」

“くそ、もう少しだったのに”表面では何でもないようにしてるが内心じゃ舌打ちをしていた。

「そういえば貴方の名前を伺ってなかったの……」

「ああ！！すいません。確かに名前を言ってますでしたね。従業員てんぐだ まこぐの『寺田 真』です。」

“よろしく”となんの悪びれもなく偽名を使う俺。

「では寺田さん二、三聞きたい事があるんですがいいですか？」

「？？ええ、構いませんけど？」

「ありがとうございます。では一つ目。実はこの飛行艇にロストロギアが乗っているのは極秘事項で従業員は誰も知らない筈なんですよ。知っているのは私達起動六課と少数の研究員。しかも研究員ロストロギアが積まれてる事しか知らないんです。どうして貴方は知っているんですか？」

はい、疑われてる。めんどくさい事になったな。

「ああー。実はですね。その研究員の一人とは昔からの付き合いの奴がいてですね。そいつが酔った勢いで言っちゃったんですよ。」

完璧な言い訳！！

「そうですか。つまり貴方は聞いただけで見たことはないと……」

「そうですけど？」

「では二つ目です。どうして貴方は此処にロストロギアがわかったんですか？」

「は？」

言いたいことがわからない。どうして此処にロストロギアがわかったかだって。そんなの下調べ……………っ！！

「気付きましたか？おかしいですね。研究員はどこにロストロギアがあるか知らない。そしてこの飛行艇には沢山の宝石や水晶が保管されている保管所は沢山あります。それで貴方はどうして真つ先にロストロギアに駆け付けられたんですか？」

「……………」

「答えられませんか？なら次の質問にいきます。」

まだあんなのかよ…………

「今、念話ではやて部隊長に聞いたんですが従業員に『寺田 真』という人はいません。」

貴方は誰ですか？」

その言葉を聞いた瞬間俺は行動を起こした。

「『シャドウ』！！」

《Ready?》

「セットアップ！！」

俺の服が一瞬で黒のバリアジャケットに変わる。黒の軽装甲それは漆黒よりも深い黒だった。

既に向こうは戦闘の準備が終わってこちらに捕獲魔法を使ってきた。

「よっ！！」

それをかわしていく。

ただど相手は四人しかも管理局のエリートばかりだ。このままじゃ追い詰められて負けだろう。

……どうする？

やっぱり不意を突くしかないか……

俺は近くにあった木箱の後ろに隠れる。

くそっ

よりによって影が俺のいる場所と反対側（木箱の向こう側）に出ていた。

『シャドウ』は魔力で影と影を繋ぐゲートを創る（時間制限があるが……）。これを使い最初は潜入した。

「抵抗せずに武器を捨てて投降しなさい。」

ハラオウン……めんどくさい。フェイトが俺に警告してくる。

ん？

まてよ

俺のいる所の逆に影があるっていう事は俺の後ろに光源があるんじゃないのか？

振り返ると案の定俺を照らしているライトがあった。

最初に気づけよ俺……

素早くライトを割った。

辺りにガラスが割れる音が響き渡る。

保管所は沢山のライトがあるが俺が一つライトを割った事で影が手前に出来た。

と、木箱の向こう側からジェット音に似た炸裂音。多分だれかがこちらに向かってきてるんだろう。  
急いで影に入る。

俺はさつきと逆側の木箱の影にゲートを開く。ちょうどあいつらの背後を取った形だ

「フェイトさん！！誰もいません！！」

「な！？」

おっ？

気付いたかな。

それじゃロストロギア戴いておさらばしますか。

俺の『影渡り』はまだ気付かれるわけにはいかないなので懷から閃光弾を取り出してピンを抜き六課がいる所になげる。

“カッ”と控えめな音が響く。六課の奴は警戒があだになったな。  
音がした瞬間にそちらに勢いよく振り向いてしまった。

閃光

太陽の光のような閃光が辺りを照らした。  
俺は影のゲートを開きエリオの背後に出る。

光を直接見たらしくエリオは目を押さえていた。その首元に一閃手  
刀を入れる。  
崩れ落ちるエリオ。だが俺には関係無く次の行動に移っていた。

短刀を出して更に影のゲートを開く。そしてキャロの背後にまわっ  
た。

短刀の柄でキャロの鳩尾を強打し戦闘不能にした。

フェイトと知らない女は目をつぶっていた。

チャンスだ！！今ならこのエース級を墜とせる！！

ここで俺は欲がでてしまった。そのままロストログアを奪っていけ  
ばよかったんだが俺はそれをせずに短刀を振りかぶりフェイトの頭  
に振り下ろす。

《p r o t e c t i o n》

だがそれはフェイトの愛機『バルディッシュ』のオートバリアで防  
がれてしまった。そしてそこからの対処も早かった。

どうやらフェイトはいち早く危険を感じて目を閉じていたらしく既に  
目を開けてこちらの姿を確認していた。

ヤバイ

そう思った時には大剣と化した『バルディッシュ』の一振りによって吹き飛ばされていた。

ガードしたがそこらじゅうにある木箱に突っ込んだ俺は遥か後方（壁際の近く）まで飛ばされていた。身体中をぶつけた俺は顔を歪める。

俺のバリアジャケットは機動性を重視しており装甲を薄くしてある。今回はそれがあだになった。

立ち上がりたかったが足が震えて立ちづらい。

「決着は着きました。大人しく投降して下さい。」

大剣を持ったフェイトは再び俺に言う。  
俺はそれを嘲笑いながら拒否る。

「ふざけんな。あんたらに捕まるなら死んだほうがマシだ。」

「……そうですか。なら拘束していきます。」

そう言ったフェイトの周りから電気を帯びた球体が発生した。

おいおい。こっちはもう動けないんだから手加減してくれよ。

俺はそんなことを思ったがどうやら無理のようだ。俺の意識を飛ばして連れていくらしい。

どうやら神様に見離されたかな。そんなことを思ったが奇跡が起きた。

「きゃっ」

「くっ」

突如横揺れ。それはとても大きく誰も立っていられず膝をついた。何となく上の部屋から騒音がする。誰かが踵落しでもしたのか？

とにかくその揺れによって置いてあったロストログアが俺の前に転がってきた。

「俺、今日から神様のこと信じるわ……」

急いでロストログアを掴む。そして逞麻が渡してくれた『緊急脱出用転移符』をだす。

「六課の二人。今回は俺達の勝ちだ。」

そんな台詞を言った後に“転移”と言って俺は逃げる。

最後に見たのはあの二人の愕然とした顔だった。

土埃がおさまらない中僕は声をあげる。

「ゴメ——ン。ジャツキュン生きてる——？」

「てめえのせいで死にそうになったわ——！」

そう絶叫しながら土から這い出るジャツキュン。  
そして土を払いながら僕に近づいてくる。

「……お前いいのか。今の魔法『継承魔法』だろ？そんな魔法使ったら一発でお前の身元ばれるんじゃないかねえか？」

「心配してくれるのジャツキュン？」

「なっ——！ち、ちげえし——！お前が捕まると俺達の身元がばれるから困るだけだからだし——！」

焦っちゃって。弄ると楽しいなジャツキュンは……

『継承魔法』

それぞれの家で代々受け継がれている魔法の事を総称してそう呼ばれている。僕の場合は『断罪魔法』と言われる魔法を使うことができる。

「大丈夫だよジャッキン。公にはこの魔法を使える人は全て死んでる扱いだから……」

「はあ？それってどういう意味……いや、やめとくか。とにかくお前に被害が無いならそれでいい。」

そう言っただけジャッキンは周りを見回す。

「にしても派手にやったな。死んでんじゃないか？」

辺りは僕が使った魔法で酷い事になっていた。最初からなにもない所でやったけど全体的に窪んじやった」

「そんなのやだよ。」

そんな話をしたが杞憂に終わった。

「ウイングロード……！」

突然岩陰から一本の幾何学的な模様がある道が現れた。

「どうやら相手も本気になったみたいだな。」

「そうだね。でも僕の「crucifix punishment」【十字極刑】」受けて立つなんて……甘く見てたかな？」

僕は“慢心は敵だ”と呟きながら青髪ちゃんに向かおうとする。

「今度は俺もサポートに入るぞ」

ジャッキンは僕に確認するように言い、朱い本を開こうとする。  
が突如念話が入る。

「ああー、俺だJokerだ。皆ご苦労さん、目的の物取ったから  
直ちに戦闘打ち切って退却してくれ。」

頑張ったなりゆうちゃん。

一人でロストログア奪取なんて……後で褒めてあげよう。

その念話が終わった瞬間僕は引き返しジャッキンの所に行く。

青髪ちゃんはそれを警戒して見てるだけだった。

あれ茶髪ちゃんは？

「青髪ちゃんと茶髪ちゃん。何で本気でやらなかった知らないけど  
次もこんな感じだったら……壊すからね」

「まあ、俺はもう会いたくないけどな……」

「待ってー!!」

そう言ってジャッキンは懷から一枚の紙を出して“転移”と言う。

そして景色が変わる。

管理局の高町なのはという人はずっと私のAMFの範囲外で起きた魔法の付加効果で私を攻撃してきた。

だけど当たらないしこっちからは仕掛けられない。

仕方ない……秘密兵器を

「ああー、俺だJokerだ。皆ご苦労さん、目的の物取ったから直ちに戦闘打ち切って退却してくれ。」

その念話がきて私はホッとした。私が龍を殺したら寝覚めが悪いからだ。

「……今回は引く。」

そう言って私は懷から一枚の紙を出した。

「……貴女は確かに強い。……でも私には敵わない」

そう言って私は転移を発動させた。

「……私は管理局が……嫌い」

…今度はハッキリ言った

Side 龍

ブラックボックス『会議室』

俺が一番乗りで部屋についた。部屋に『縁』さんだけしかいないが今さっき念話をしといたのですぐくるだろう。

「あつ。龍おかえ……………どうしたのその傷!？」

「『縁』さん。ただいまです。いやですね、予想以上に管理局の奴らが強くて…………多分肋骨と左腕もってかれました。」

歩く度に激痛がするから多分間違いない。

「だったら急いで治療しなきゃ!？」

「いや、だったら急いで報告しちゃいます。」

そう言つて『縁』さんが話す前に報告をした。

侵入経路から相手の特徴、自分が使った武器。そしてイレギュラーな存在の女。つかこの女がいなければ幾分か楽になったのに……

そう思いつつ『縁』さんの前にロストログニア【魔力晶<sup>グライン</sup>】を出す。

「なんだかんだ言つて成功したので気にしないでください。あとす

「いませんが今日は帰ります」

「治療はどうするの？」

「こつちでやっておきますから気にせずに。」

“…そう。無理しないでね”と言ってくれた『縁』さんに“無理出来ませんよ”と言って俺は部屋を出た。

・  
・

「そつえば龍。今回あれ使わなかったんだ。」

chapter Three

END

## 襲撃と不確定要素（後編）（後書き）

ご精読ありがとうございます！！

多国籍軍です！！

今回はオリジナル設定を出しました。

【継承魔法】というものです。【先天系の魔法】と似ているが違つと、ここでは扱っていいこうと思います。

【先天系の魔法】は生まれつき備わっているのに対して【継承魔法】は、親が子供に『なんらかの方法』で覚えさせる。又は『記憶に刻むもの』とさせて頂きます。

これと同じものが原作で出ていたら……ドンマイです。

あと、また展開がヘンかな？自分の文章力の無さを痛感します。

また次の章も頑張ります。

なので、応援も感想もよろしく願いします!!

それでは ノシ

**S i d e S t o r y   買い物（後編）（前書き）**

遅くなりました。  
スイマセン。

## Side Story 買い物（後編）

お祭りなのかと思う程の賑わいが町の中を包んでいる。町全体での規模で行われている路商がさらにその賑わいを引き立てている。

その中にいる四人の男女

両手一杯に紙袋をさげている赤い髪の少年『エリオ』

ぐったりとした様子で歩いているピンクの髪の少女『キャラ』

無表情で歩いている紫髪の少女『イヴ』

元氣一杯に歩いてる腰まで伸びた金髪が印象の少女『アリス』

彼女達はフェイトと別れた後物凄い量の店を廻った。しかもその全てで山のように買うので“男の僕が荷物持ちしますよ”と言ったエリオが死にそうだ。キャラも死にそうだが……

そんな事を知らずに笑顔でスキップしているアリスは次に何処に行こうかと辺りを見回していた。

‘アリスは管理局に情報は流さないように気を配って会話してたが午前中一杯を買い物に費やし、思いの外エリオとキャラが良い奴という事がわかりおもいつきり遊んでいる。

「次はあの服屋に行きましょう!!」

「待つてアリスちゃん!! 少し休みをいれないとエリオ君が死んじやうよ」

「……アリス。……楽しみ過ぎ」

「いや……僕の事は……気にせず……に」

何か息切れして喋り方がイヴみたくなっちゃってるわね……

「そうね。じゃあ少しその喫茶店で休みましょう」

そう言つて指したのは一つの店。会話からわかると思つが喫茶店だ。たまたま近くにあつた店なのでまったくどんな店か知らない。

早速入ることにした。

カランカランとドアに付いている金色の小鐘が私達の入店を知らせる。

店は明るい店内に対して人がまったくいない事が印象的だった。

その中で私達は窓際の四人席に座る。ちょうど私がエリオとイヴがキャロと対面する形になる

私達は適当にパフェやらドリンクやらを注文しといた。

「ここでただ待つてるのも暇だし少し話でもしましょうか」

「……どんな話？」

「暇さえ潰せれば何でもいいわよ」

イヴは“……そう”と言って黙る。

「あっ！！じゃあお二人はどういう関係なんですか？」

「関係ねえ、改めていわれると……」

そこで私は少し考えてから口を開く。

「仕事仲間であり友達であり親友であり……そして何より家族かな。」

「……………」

うわっ！！

イヴも私も顔真っ赤になってる。

私は恥ずかしくなり話題を逸らした。

「あなた達はどんなの？」

そこでキャロは間髪入れず答えた。

「そうですね。私達も家族って割合が強いですね。」

そしてキャロとエリオは私達に自分達の生い立ちを教えてくれた。  
なぜ自分達の親がフェイトさんなのかということから自分達が六課  
に来たわけまで……

「これが私達が今までに経験した事です。……すいません暗い話を  
してしまつて。」

「……………あなた達それで世界を恨んだ事は無いの？」

「世界をですか？」

「そう世界。この腐つた世界を恨んだことは無かつたの？」

子供を実験台にしたり大きな力に怯えて子供を遠ざける親。  
全てが腐つてゐる。

「確かに憎かつたかもしれませんが。でも……………」

「私達にはフェイトさんがいましたから。」

そう言つて満面の笑みを浮かべるエリオとキャロ。いっぱい傷つい  
た筈なのにどうしてこんなにも笑つていられるんだろう。

私達のやり方は間違つてゐるかもしれない。他の方法で助けられる人  
もいたかもしれない。でも……………それでも……………

「絶対に負けないわ。」

「何がですか？」

「ふふ、秘密♪あつ！！パフェがきたわよ！！」

その後はパフェタワーを四人で食べたりイヴがブラックコーヒーを無表情で一気飲みしたり、また買い物したり皆で話したりと楽しい時間を過ごした四人であった。

「今度は翠屋って喫茶店に行きましょう!!」

S i d e S t o r y

E N D

,

## Side Story 買い物（後編）（後書き）

ご精読ありがとうございます！！

多国籍軍です！！

今回結構短いなあと思いましたが勘弁してください。お願いします  
m (・・) m

結構重要ですが実はもう小説のストックが無くなりそうで焦ってます。

ストックがなくなった場合更新がヤバい程遅くなります（今回も遅かったけど……）。

まあ、それはまた考えていきます。

それでは頑張りますのでよろしければ感想と応援をお願いします！

六課と黒い箱の日常？ 六課編（前書き）

——ただ、許せなかった。理由はそれだけだ。

『黒い箱』（ブラックボックス）

序列四位・推定魔導ランクC

「孤闘のJack」  
ジャック

【東堂 逞麻】  
とうとう たくま

## 六課と黒い箱の日常？ 六課編

私の名前は冴姫凜。最近 機動六課に異動した管理局員だ。

今日はこの前六課が担当したロストログアの護衛でわかった情報を集める事になり集まった。

「ほな始めよか」

部隊長のはやてが開始を告げた。

「今回襲撃してきたのは多くて五人だね。」

「なんで多くてなの？なのは。」

「私達のところに三人フェイトちゃんのところに一人それで飛行挺を撃ち落としたのが一人だけ飛行挺を撃ったのは姿がわからなかったから一応だよ」

フェイトさんは“なるほど”と納得したようだ。

「それにしても馬鹿げた威力やな。この収束砲。」

「本当ですね。一発で本局の護衛挺を貫くなんて並の火力じゃないですよ。」

スクリーンでは護衛挺が貫かれた時の映像が流されていた。

「でも死者が一人も出なかったのは凄いね。」

「本当。奇跡やね」

そして次に移った。

「じゃ、フェイトちゃんの方から聞こか。」

その言葉を聞いてフェイトさんは立ち上がり説明を始める。

「私達のところに来たのは従業員に変装した声からして男性が一人。変装は稟が気づいたんだけど……ロストロギアが奪われちゃった。」

「そこんともう少し詳しくええか？」

「稟が変装に気づいて私が武装解除するように言ったんだけど聞く耳を持たなくて……バインドで拘束しようとしたら木箱に隠れられちゃったの。」

フェイトさんはあそこからよくわからないらしい

「それでエリオが接近したんだけどその時にはもういなくて、いきなり私達の後ろから物音がして振り向いたら……」

「閃光弾というわけやな」

「そうだよ。私はギリギリで目をつぶれたけど三人は直で見ちゃったらしくて目を押さえていたんだと思う。で私が目を開けたらエリオとキャロが倒れてたの」

「フェイトさんも『バルディッシュ』のオートプロテクションが動しなかったら危なかったですしね。」

私が付け加えといた。

「実力はどうなんや？」

「わかんないな。三秒たらずでエリオとキャロがやられたのは事実だけど……」

そこでフェイトさんは黙る。そして何秒かあけて

「はつきり言つて正面で戦えば負けることはないと思う。」

「それには私も同意です。私も見た限りフェイトさんの一撃でほぼ戦闘不能でしたから」

「そうか。なのはちゃんの方は？」

はやてさんはなのはさんの方に振り向いて聞く

「私の方はA c e<sup>エース</sup>って呼ばれてた女の子とやったんだけどAMFを使つてたの。」

「AMFってアンチ・マギリング・フィールドのことかいな!？」

「そうなの。しかも性能はガジェットよりも高性能だったよ。」

ガジェット映像が出てAMFの稼動域がでる。このデータを見るとAce<sup>エース</sup>と呼ばれていた人物のAMFはガジェットのAMFの稼動域の四、五倍であり無効果濃度はガジェットの十倍だった。

「それに最後の飛行艇が墜ちたのってそのAce<sup>エース</sup>って子がやったんだよ」

「「は？」」

「あれって狙撃されたんじゃないかなかったですか？」

スバルさんが隊長達に聞く。だが実際に戦ったのはなのはさんだけだ。

「いや違うよ。彼女が飛行艇を墜としたの……………」  
踵落として」

皆が顔を見合わせる。

「……………生身あの強化合金を砕いたんか？」

「生身でね」

「魔法がきかへんし、力も異常なんて化け物やないか。」

はやてさんはそう言って椅子に座り込む。

「その対策もせんとな……で、スバルとティアナの方はどうなん？」

ティアナさんが立ち上がり報告を始めた。

「私達はJackとKingと名乗る二人組に接触その後戦闘になりました。」

「それで何か変わった事はないの？」

それを聞きティアナさんは数秒考えて喋る。

「Kingという方は【継承魔法】を使っていました。」

「【継承魔法】というと家名がわかる魔法？」

“そんな感じですね”と言ってティアナさんは続ける。

「それでその魔法をもとに身元を探ったんですが……」

「誰なん？」

「実は……この魔法を使える家名が全ての記録から削除されてます」

そしてティアナさんは語りだした。

【断罪魔法】に関するものは大小関係無しに削除されていた。  
どんな魔法かも誰が使っていたのかも何もわからない状態

内部から消されたようであとは辿れなかった。

「じゃあ、最後にこのJackつつ奴や。どないな奴なん？」

今度はティアナさんと入れ替わりでスバルさんが立ち上がる。

「この人は戦ってませんからわかりません。」

「ほな、外見的な事でいいから言うてくれへんか？」

「外見ですか……………そうですね。黒いローブと変な仮面を付けていたのによくわかりませんでしたし。」

あっ！！！！？

でも稟ちゃんとまったく同じペンダントを着けてました。」

「……………えっ!？」

このペンダントは【継承魔法】と同じく代々冴姫家で渡される物だ。

そして今現在それを持っているのは冴姫家の長女の私『冴姫稟』。

もう一人は昔魔力が無く追い出された私の双子の兄。冴姫家の長男『冴姫逞麻』。追い出された際に情けで渡されたらしい。

するとこの人物は……

「……………お兄ちゃん」

「え？」

……………バカバカしい。なにを今更  
だいいちあの人は魔力が無いはず。そんな人がこんな武装集団にい  
るわけが無い。

「いえ、なんでもありません。」

このJackという人物はまったく戦闘に参加してないので直ぐに  
終わった。

後日また改めて会議をするらしい。今度はヴォルケンリッターの人

も入れて。そして今日は解散になった。

私の中に一つのモヤモヤを残して……

,

## 六課と黒い箱の日常？ 六課編（後書き）

ご精読ありがとうございます！！

多国籍軍です！！

ちょっと今回は短いかな？でもこれからは二から四ページで公開していくと思います。

それで今回報告したいことが……

実はワタクシ、多国籍軍は『英語が死ぬほど苦手です（泣）』。

なので最初のほうはデバイスが英語表示になっていますが次回からは『技名またはそれに準ずるもの』は英語表記で『それ以外の英語会話』は日本語で書かせていただきます。

本当にスイマセン。

でも頑張っていこうと思いますので感想も応援もよろしく願います！！！！

そ  
れ  
で  
は  
ノ  
シ

六課と黒い箱の日常 黒い箱編 (前書き)

連続投稿します。

後書きは最後の投稿のやつで

## 六課と黒い箱の日常 黒い箱編

今日は久々に学校も任務も何も無い日だった。なのだが今は久々に『黒い箱』ブラックボックスの中を歩いている。

この『黒い箱』ブラックボックスは地下の奥深くにある。辺りに窓なんかなく、ただ真っ直ぐに通路がある感じだ。

その中俺は歩いている。

包帯を左手と脇腹に巻きながらだが……

六課の奴らに攻め込んだ後の夜、救急で病院に行ったんだがやつぱりというかなんというか……  
左腕も肋骨も断裂骨折だった。

どんだけの力でやられたんだよ。

俺は一つの黒い扉の前で止まる。ここは日々『黒い箱』ブラックボックスのメンバーが自分を高めるために為に使う場所。所謂トレーニング室だ。そこを開いて中に入る。

「ああー！！りゅうやんじゃん！？」

「ん？本当だな。ていうかお前腕大丈夫か？」

「よおウィル、逞麻。大丈夫だよ。ちなみに腕は全治一ヶ月だ。」

中にはウィルと逞麻が練習をしていた。六課を襲撃して今日で三日目。一応連絡はしておいたがやっぱり心配されてたらしい。

「で、龍は何しに来たんだ？腕折れてんのに」

「ちよつとここら辺を廻ってただけだよ。お前らは？」

「僕は魔法構築のチエックだよ！！この前、青髪ちゃんと茶髪ちゃんに『crucifix punishment【十字極刑】』を防がれちゃったからね。」

へえ、【十字極刑】で言ったら『ウィル』の魔法の上位級じゃん。それ喰らって立つとか……あと、青髪ちゃんと茶髪ちゃんて誰？

「俺は魔力が練れないからな……『ウィル』の魔法を使ってこれに入れてるんだよ。」

逞麻は何処からか一冊の本を出す。といっても只の本じゃないんだが……

魔力蓄積兼魔法陣構築の古代遺物

【majority Archive（魔女の書庫）】

これはあらかじめ貯めていた魔力を使うことによって魔法書に書かれている魔法陣を使うことが出来るというロストログアだ。ちなみにミッドで使われているような魔法陣も使えるがこの【アーカイブ】に書かれているのは全部、逞麻のオリジナル魔法だ。

「で、どうしたんだ？模擬戦でもしたいのか？」

「アホか、左手とアバラ折れてんだぞ。俺が死ぬだろ」

「何言ってるの。」

りゅうやんならむしろその怪我は

.....

アドバンテージでしょ？」

「まあ、否定はしないけど.....俺の稀少<sup>レアスキル</sup>能力はめっちゃくちゃ痛いから嫌なんだよ。」

「「だろうね（な）。」「」

そんな話をしていると俺の後ろの扉が開く。  
控えめに開けられたドアの先には紫色の髪の少女『イヴ』が立って

いた。

「よう、どうしたんだ。」

「イーちゃんも練習？」

そう言うといヴは小さな首を縦に振った。

「…………私の相手…………強かったけど……………つまらなかったから。」

そう言って近づいてきた。

「イヴ、だからってあまり六課を冒めてかかるなよ。」

俺は一言注意を添える。過信は敗北に繋がるからだ。  
そう言うといヴはこちらを“じっ”と見つめてきた。

「…………龍はどうして……………あいつらを…………警戒するの?。」

…………警戒か

「昔、本当に昔にな。あいつらみたいな奴に叩きのめされたから…  
…かな？」

あつ

皆“ぽかん”とした顔しちゃった。

「とにかく、油断はするなってことだよ。」

「……わかった。」

話が纏ったところで『ウィル』が話す。

「なら、全員で模擬戦でもする？練習になるからね」

「いいな。そうするか」

「でしょでしょ…！…じゃあやろつよ…！…」

辺りには壊れた剣、穴の開いた地面そして山のような瓦礫。それがこの部屋一杯に拡がっていた。その中央でイヴは倒れているウィルに一本の斧剣を突き付けている。

だがいつもの彼女と違い右目には二重の魔法陣に囲まれた六亡星があった。

「……さすがウィル。……私に【IS】と……【右目】を使わせる……なんて。」

「いやいや、かすり傷一つ負ってない人が何言ってるの。ていうか、その斧剣って『対軍』とかのレベルじゃないっけ？」

「……それは結果論。……途中危なかった。……あと……この斧剣は……気にしないで。」

イヴはウィルの手を掴み立たせた。

「イーちゃんにそう言ってもらえると嬉しいよ。」

ウィルを立たせたイヴはスカートの裾をはたき、こちらに顔を向けた。

「……………なのに……………遅麻と龍は……………」

……………ちなみに俺と遅麻は開始三分で戦線離脱して今は地べたに仰向けで倒れている。

「ふざつ……………けんな。お前……………らの……………戦闘能力と……………一緒にすんな」

「本当だよ。お前達は【黒い箱】<sup>ブラックボックス</sup>のトップ2なんだからな。暗殺専門の俺と開発専門の遅麻と一緒にするなよ。」

「いや。結構りゅうやん平気でしょ？全然息切れてないし……………」

“手を抜くな”と『ウィル』に怒られたが俺は休養をしたかったの  
で早めに抜けたただけだ。

あれ？

それが駄目だったのか？

考えるのがめんどくさくなったので俺は適当に挨拶をして部屋を出た。

「つたく。龍の奴は本当にテンションに左右されるな。」

「でも、実際にりゅうやんは凄いらね。暗殺術から魔力隠蔽能力。一応白兵戦でもやっていけるしね。」

そう言つて『ウィル』はデバイスを胸ポケットにいれた。

「そうだ、イヴ。お前の試作デバイスが出来たぞ。」

そう言つた逞麻は隅にあつた鞆から二つ一組の籠手を取り出す。羽のように白い籠手はなん汚れも無くそこにあつた。

「……………これが私の…………デバイス。」

「そうだ。精神融合型のアームドデバイス『ハピネス』。と言つても、そのデバイスはイヴの能力の補助的な事しか出来ないからな。」

“あとAMFを起動してると使えないからな。使つなら【神格装甲】の時だけだぞ”と一言添えられたが、イヴは目をキラキラさせて「

ハピネス』を見ているため聞いているか貞かでない。

それに気づいた逞麻は溜め息を一つつきイヴの頭を小突いて正常にしてもう一度説明をする。

それを“……わかった”と一言で返したイヴの目はうつすら涙目になっていてとても可愛かったらしい。

「たくやあん。僕の試作デバイスわあ？」

「お前のは、あとAIを『グリフォン』から移せばいいだけだ。それでも結構時間かかるから渡すなら早めにな。」

それに『ウィル』は“わかったよお”と言って『グリフォン』を渡してきた。

「ていうか、あと『アリス』と『龍』のデバイスもやらなきゃだろ。……めんどくせえ」

「それだけたくやんの事信じてるんだよ。」

「……逞麻の作る……デバイスは……すごい」

二人の口から“たくやん、すごい”やら“……凄腕整備士”などの沢山の褒め言葉が出た。逞麻はどうやら素直に褒められると恥ずかしいらしい。顔を真っ赤にしている。

「な、何言っただよー！お世辞なんか言ってもにやん……ごぼつ。」

なんにもでないぞ」

噛んだことを必死に隠す逞麻。『ウィル』はそれに対して“かわいいなあ”と言う。

「じゃあ、たくやんお願いねえ」

「……疲れたから………寝る。」

「俺はまだやってくから先に行つていいぞ」

そうしてウィルとイヴは一緒に部屋から出ていった。

部屋に静寂が訪れる。

・・

その中で逞麻は呟いた

「不思議だよな。お前と一緒に極めた技術がこんなところで役にたつなんてな……」

「大丈夫だ。忘れないよ。俺は今まで死に物狂いで力を磨いてきた

んだ。全ては復讐のために……………」

「お前の憎しみ怒り。全てあいっすらにぶつけてやる。だから安心して眠っていてくれよ……………」

・・・

……………」。

## Chapter Four

END

それは誰の物語り？（前書き）

遅れてすみません。

それは誰の物語り？

暗闇の中に影が二つ。

「…………バケモノ。」

男は暗闇の中で呟いた。辺りは誰もいない黒の世界で白銀の月が彼を照らす。

「…………バケモノ、バケモノ」

縋る（すぎる）ように怯えるように男は言う。『バケモノ』と……。しかしその言葉は彼を止めるには軽すぎた。

「う、うわああああああ！死ね、バケモノ！！」

ついに男は耐え切れなくなり、自らの懐にはいつていた刃渡り三十センチ位のナイフを引き抜き彼に襲い掛かる。男のナイフは月の光を受け白銀に輝いた。

「いやいや、バケモノは酷いだろ？…………ていうかバケモノっぽいこ

と何もしてねえし。」

「……………っ!？」

彼は男のナイフを掴み、たたき落とす。

「うーん。恨みは無いのかな?……………まあ、いいか。俺達のために死んでくれ」

次の瞬間、男の胸から一本の黒刀が真っ赤な血飛沫とともに生えた。

これは遠い遠い過去のこと。少年は闇の中で生きることを決め十字架を背負う。

——初めてにしちゃ出来さ。

彼は、また悪を殺す。

さて、それは誰の物語り？

エンカウントそして……（前編）（前書き）

なんか文章が残念なことに……

エンカウントそして……（前編）

皆は死について考えたことある？

死んだら天国に行く？

それとも地獄に行く？

もしかしたらそんなものないのかもしれない。

死んだら無

何も考えられないし何も感じられない。

そんな虚無の世界かもね。

僕の家はそんな『死』について一番近いところにいた。

誰にも手が出せない。そんな罪人を裁く家。

そんな家にいた僕だからこそ『死』についてたくさん考えた。

結局わかんなかったんだけどね。

とにかく『死ぬ』事の重みを知って生きる事に貪欲になった。

でもそんな『死』が突然に母様を襲った。その時に僕は何も出来

ずに、ただ見てるだけだった。

……………母様を助けるためには【五つの城壁<sup>ランバレット</sup>】が必要なんだ。

その為なら禁忌に触れてでも構わない。

そんな僕——『フェンディ・ウィリアム』の話。

「じゃあ、また明日に会おう!!」

学校の帰りのHRをその言葉で締めた僕の担任は暑苦しいほどブンブンと手を振る。

暑苦しいのはいつもの事なので誰も気にせず一人、また一人と教室から出ていく。

「おーい『ウィル』!! 帰りにちょっとゲーセンに寄ってかね?」

「ざーんねーん。今日はちょっと寄るところがあるんだ。」

「そうか、じゃあ仕方ないな……」

僕は友人の誘いの言葉を片っ端から断り通学鞆を手に持つ。

そして

教室をでて

校門をでて

町をでて

世界をでた。

第四十二管理世界『フォレスト』

僕はその世界にいた。

僕が友達の誘いを断ってまで来た理由は僕の母のお墓に行く事。

本当は先週行ったから、もう少し先の予定だったんだけど『縁』

さんが近いうちに大きな仕事があるって言ってたから行けるうちに行こうと思ってね。

「相変わらずここは綺麗だねえ。」

静かで、周りに人工物が無く風がとても気持ちいい場所

その中に一つのお墓がある。

お墓といっても土が盛り上がっていて、その上に石が置いてあるという簡単なものだけど……

母様は自然が好きだったしゴテゴテした装飾も嫌い（お金持ちだったのに……）、だからこれでいい。

「やあ、母様、先週ぶり。いやー、最近は暑くて暑くて何ごともある気がなくてねえ。いろいろ——……」

そしてお墓の前で母様にこの一週間のことをほづこく——

まあ

母様は何も<sup>こた</sup>心えてくれないけどね

「じゃあ、また今度ね。」

話かけて、だいたい三十分は過ぎただろうか。そろそろ帰ろうと僕は母様に挨拶をしてこの場をあとにしようとする。

「ん？」

だがそれは前から来た一人の少女によって遮られた。

前から来た少女は長い髪をちょこんとサイドにしばっており右が薄碧、左が朱色の目をした可愛らしい容姿をしている。

「うわぁあん！！ママぁ！！何処にいるのおお！！」

……………その子が凄く大きな声で泣きながらこちらに近いてきた。  
放っておくわけにもいかず僕は早足で少女に近づいた。

「君、どうしたの？」

僕はなるべく優しい声で話し掛ける。なるべく安心させたほうがいいと思ったからだ。

すると少女はこちらに顔を向ける。

「ママがいないのぉ。何処にもいないよぉ」

「ママ？じゃあ、はぐれちゃったの？」

「わかんない。気付いたらここにいたの。」

困ったな―、一応この世界は結構な広さがある。それに樹海のような森だらけだ。だから迷ったりしたら笑い事じゃないんだけど……

……

とにかく詳しい話を聞こうかな。

聞いた内容を纏めると、この子の名前は『高町ヴィヴィオ』ちゃん。

あれ？

『高町』って、どこかで聞いたことがある名前のような？

……まあ、いいかなあ

話を戻すとヴィヴィオちゃんがこの世界に来たのは、ヴィヴィオちゃんのお母さん達がここで訓練をしているらしく（なんの訓練だろう……キコリかな？）そうなるとヴィヴィオちゃんが一人になるからお母さん達とこの世界に来たらしい。

でもヴィヴィオちゃんもまだ子供。知らない世界に来てテンションが上がりにながってしまい……

↓走りだす

↓回りだす

↓森に入る

↓迷いこむ

……で、気付いたら僕のところ泣きながらきたというわけだ。

「ん、仕方ないか。じゃあヴィヴィオちゃんのお母さん達を探しに行こうか」

「……………いいの？迷惑じゃない？」

ヴィヴィオちゃんは目をウルウルさせて恐る恐るといった感じで聞いてきた。

「いいんだよ。子供はそんなこと気にしないで。子供は周りに迷惑をかけて少しづつ大人になっていくものだから。」

“それにヴィヴィオちゃんだけ置いていけないしね。” っと付け加

える。

ヴィヴィオちゃんはその言葉を聞いてハテナマークを浮かべていた。

ちよつとまだ難しかったかな？

「うん、よくわからないけどわかったよ。ありがとう!!  
お兄ちゃん!!」

そういつてヴィヴィオちゃんは花のような笑顔を僕に向ける。

内心やっぱり女の子は笑顔が似合うねえ、とかキザな事思っちゃったりして……

……恥ずかしい

「じゃあ行こうか。」

そう言つてヴィヴィオちゃんの手をとり僕等は歩きだした。

「そつえば、お兄ちゃんの名前は？」

「ん？言つてないっけ？

僕の名前は『フェンディ・ウィリアム』だよ」

この時、名前を名乗った事を後悔するのはすぐ後である。

その後は順調にことが運ぶ。

ある一つの出来事を除いて……

「すみません！！私達が目を離れたうちにいつの間にか、いなくなってしまったんですよ」

「ここまでありがとう！！お兄ちゃん！！」

「キニシナイデクダサイ。ヒトトシテトウゼンノコテヲシタマデデスヨ（棒読み）」

「カタコトかつ棒読み！？」

なるほど聞いたことある名前の『高町』。

まさか六課の『高町』さんだとは思わなかったね……

そう言っただけで周りを見回す。僕の視線の先に一つのログハウス。その周りに六課の戦闘班が大集合していた。

そして全員が『ヴィヴィオ』ちゃんの無事に安堵している。

「ところで貴方は？」

そう言って茶髪ちゃんが僕に聞いてきた。

——少年説明中

「なるほど……つまり貴方がヴィヴィオをここまで連れて来てくれたのね。」

「……………あとなんでそんな声が高いの？というか、なのはさんにそっくりね？」

「地声です！！（CV：田村ゆかり）」

「こっちは一度会ってるからばれるかもしれないんだよ！！」

「お兄ちゃん。もうちょつと低い声じゃないっけ？」

「さっきまで風邪だったんだよ（CV：田村ゆかり）」

「そうなの？お大事に……………」

罪悪感バリバリだけど仕方ないね。

まさかこんなことになるとは思わなかったのでデバイスを持って来なかったことがイタいなあ。

ばれても成す術無し。

スーパ―ふるもっこタイムに突入するんだろうな。

僕は軽く挨拶してこの場から逃げようとしたが六課組がそれを許してくれず、どうしてもお礼をしたいということでログハウスに連れられた。

「うわー、広いですねえ」

「凄いでしょ。泊まり込みの訓練とかで使ったりするんだよ。」

ログハウスの中はとても広く吹き抜けもあり安らげる感じだった。

「訓練というと、時空管理局のですか？」

その言葉にヴィヴィオちゃんが“スゴイでしょー”と言って話してくれた事を思い出した。

ちなみにヴィヴィオちゃんが時空管理局の事を話してる時、辺りの警戒をしてたから何も聞いてなかった。

「そうだよ。……ん？私、時空管理局に勤めてるって言ったっけ？」

「ヴィヴィオちゃんから聞いたんですよ。」

「そうなの。」

あつ、ティアナ、スバル。そこのお皿取って。」

「「わかりました。なのはさん。」」

おお

スゴイ統一感

どうやらヴィヴィオちゃんを届けたお礼に僕に食事をごちそうしてくれるらしい。

「そういえばなのはさん、此処にはこのメンバーで来たんですか？」

「違うよ。今さっき呼んだからすぐくると思うけど、あと九人位くるよ。」

「九人ですか……多いですね。」

その九人が来たら皆で食事をしながら談話でもしようということだ。

なのはさん、スバルちゃん、ティアナちゃん（青髪ちゃんと茶髪ちゃんの名前をここで初めて知った。）は皆が来るまで料理作り。僕とヴィヴィオちゃんは外で遊んでいることになった。

僕達が外で遊び始めて30分位したらいきなり庭に魔法陣が浮かび上がる。

一瞬驚いたけどすぐにこの人達がなのはさんの言っていた人達だとわかった。

ヴィヴィオちゃんが“ママァ”といいながら飛びついたのが気になったが……。

「

ママ!!

ママ!!

………

フェイトママ!!」

“ドクン”と僕の心臓が高鳴るのがわかる。まるで長年会わなかった恋人に出会ったような胸の高鳴り。

そっかあ

たくやんが『フェイト』の名前を出した時まさかと思ったけど、…あの金髪と双眸そらめづ。間違いない。

.....あれが僕の

エンカウントそして……（後編）（前書き）

最後です

## エンカウントそして……（後編）

九人が揃ったので皆で食事をした。その時に『りゅうやん』が不確定因子と言っていた少女『さえきりん冴姫凜』ちゃんの事もわかった。

でもこの子。多分……

……まあ、それはりゅうやんに相談しよう。

「そういえば『ウィル』君？」

食事が終わり一段落していると『茶髪』ちゃん、もとい『ティアナ』ちゃんが僕に声をかけてきた（僕の方が年上だよ……え？でも僕の方が背が低い？……うるさい……！）。

「どうしたの？」

「貴方、私とどこかで会った事ない？なんかどこかで会った気がするのよね。」

「あああ！！それ私も思った！！」

「……スバルも？」

ピインチ!!!

ていうか一応声変えてるはずなのに何故!?

「気のせいじゃない??僕は初めて会ったと思うんだけど……」

飛行挺襲撃の時に会ったなんて言えないし……

「そうだね。」

「なんか不思議だよね」

「……?」

スバルちゃんはすぐ納得したけどティアナちゃんはまだ考えてる。

「そういえばもう一個不思議だなと思ったんだけど……」

スバルちゃんが話を続けた。

「『ウィル』君、魔法のこと聞いても全然驚かないよね。なんで?」

「ん?そういえば言ってなかったね。僕、魔法学校に通ってるんだ。」

「魔法学校か。どうりで驚かないと思ったよ。どこの魔法学校?」

「『国立ティップノッチ魔法学園』だよ」

「……………」

あれ？

皆固まっちゃった。

なんで？？

「ねえ、どうしたん「ええええええ！！！！」…うわ！！」

固まっただと思っただけいきなりの大絶叫。

しかも周りにいた人達まで絶叫してるから質<sup>たち</sup>が悪い。

「ちよっ、どうしたの！！急に！！」

「どうしたのじゃないよ！！」『ティップノッチ魔法学園』といったら全世界にある魔法学校の中でも一、二を争うエリート校じゃない！！」

「そうよ！！貴方、見た目のほんとしているように見えるのに結構やるのね。」

「え。『ウィル』お兄ちゃんってすごいのか？」

「『ウィル』君、すごいんやね。」

他にも『なのは』さんや『シグナム』さん、『凜』ちゃんに褒められた。

……『フエイト』さんにも

まあ

ようするに全員だね

褒められて悪い気はしないけどそろそろ帰りたい。

なのでその旨を伝えようとしたが……

「そんなにスゴイ学校にいるなら魔法戦闘も習ったりするの？」

「はい。一応、護身術程度はやってます。」

「それならやるか。」

「……………は？」

いきなり何を言ってるんだろう、この『シグナム』さん。

「やるって何をやるんですか？」

「話しの流れるに模擬戦だろう。」

「……………いやいや。僕死んじゃいますよ？」

「大丈夫だ。非殺傷設定にしてあるからな。」

「いやいや、そういう問題じゃないんだけど……………。ていうか殺傷設定にしたらヤバいでしょ。」

「僕デバイス持ってないですよ？」

「大丈夫だ。こちらに量産型だが何個がある。」

「……………貴女達は強いんですね？そんな人達に勝てるわけないじゃないですか？」

「根性で勝て」

「投げやりだなあ。なんでそこまで模擬戦をやりたいのかな？」

「とにかく逃げれないと感じた僕は渋々、了解をだした。」

「『ウィリアム』はミッド式とベルカ式。どっちを使うんだ。」

「『ウィル』でいいですよ。僕はベルカを使いますね。」

“ほら”と言って『シグナム』さんは僕にデバイスをわたしてくれた。

うん。

普通のデバイスだ。

「それじゃ始めるぞ。」

「待ってください！！僕、誰とやるんですか！？」

「じゃあ、まずはエリオとやるか。」

「……………まずは？」

「それは一回じゃ終わらないからな。もちろんだろう？。」

“にやつ”と悪者も真っ青の笑みをこぼす『シグナム』さん。

どうやら今日は厄日らしい。

模擬戦が七回を終えた時点で僕は膝をつく形で地面に手をついてい  
る。

↓ o r z

みたいな

「……良くここまでもったな。」

シグナムさんが僕に近づいてきた。

一回目の対エリオ君はスピードが速かったがぎりぎりで勝てた。

二回目は凜ちゃん。魔法主体のために僕が近づけず敗北。

三回目。スバルちゃん。拮抗するがやはりいつも訓練しているよう  
な人には勝てなかった。

四回目。ティアナちゃん。体力不足で負けた。もうなんかへロへロ

五回目、六回目、七回目。『なのは』さん『ヴィータ』ちゃん『シ  
グナム』さん。

論外

負けた。

ちなみに僕は魔力制限と体力制限を架けているからしょうがない  
と言ってしまえばそれまでなんだけどね。

「……どうする？どうせならもう一人のエースとやるか？」

「……誰ですか？……もう一人……のエース……って？」

ていうか息がヤバい。休みが欲しい。

「テストロッサだ。やる機会なんてないだろう？」

「シグナム！！それはいくらなんでも！？」

まさかのだね。

こんなところで……――

まあ

いいかな

そう思い僕は魔力と体力の制限を一段階緩める。

「……いいですね。やってみたかったですよ。僕も……」

なんとかあと一回ぐらい模擬戦も出来るだろう。

「やりましょうよ。」

・・・

『フェイト』さん

「

その言葉を放った時の僕の双眼は獰猛な輝きどつもうを帯びていた。

――

「どうもありがとうございました。」

「別に気にしなくていいのに……。本当に帰るの？」

「はい。明日学校があるので……」

全ての模擬戦が終わり僕は帰ることにした。

と、ここでののはさんがしまったという顔になる。

「そっいえば大丈夫なの！？ご両親が心配してない！？」

そんなの気にしないでいいのに。

「大丈夫ですよ。」

僕、親いませんから……」

「……え？」

……やっぱり驚くよね。  
全員が驚いていた。

「気にしないでください。じゃあ」

そう言っ僕は立ち去ろうとするが……

「待つて!!」

僕が呼び止められる。

「これ持つていつて。」

たくさん名刺みたいな物を渡された。

「これは？」

「私達の連絡先だよ。困った時に連絡して。きっと役に立つから。」

「いいですよ！！悪いですし。」

そういつてもなのはさんは受け取ってくれない。なので僕は渋々受け取った。

「じゃあ、今度こそ。さようなら。」

「お兄ちゃん。またね」

「また遊びに来なさいよ！！」

「じゃあね——『ウィル』君——！！」

他にもいろいろな別れの挨拶をもらったがそれを 背中に受け僕は夜の庭で転移した。

めぐりめぐって出逢った  
二つの信念

この出逢いはお互いに何をもたらしたのだろうか？

それは誰にもわからないが……

運命の針は確実に動いた。

C h a p t e r   F i v e

E N D

エンカウントそして……（後編）（後書き）

ご精読ありがとうございます！！

多国籍軍です！！

今回はたくさん連続投稿してしまいました。

反省はしている。後悔はしてない。

あとすいません。今回声優ネタとオリジナル設定を出してしまいました。

あくまでこれはこの小説内の設定ですご了承ください。

え？

フェイトとの模擬戦はどうなった？

ふふふ。

それは次回に、です。

それではまた ノシ

応援と感想もよろしくお願いします。

## 死神との模擬戦（前書き）

遅れてスイマセン。

弁明はこの後に……

あとページ四にまとめようと思いましたが……スイマセン。  
フリーダムになります。

あと連続投稿します。  
駄文でスイマセン

## 死神との模擬戦

Sideフェイト

「……………ん。」

私はログハウスのソファで目を醒ます。

「やられたな、『テストロッサ』。」

そして私がソファに腰をかけ直すと同時に『シグナム』が近づいてきた。

「本当ですよ。まさかあんなに強いなんて……………」

それは模擬戦の中で起こった出来事だった。

『ウィル』君は七回の模擬戦をした後で体力が切れていたが、まるで息を吹き返したかのような鋭い動きだった。

なにより気迫がさっきまでの模擬戦とはまったく違う。

さすがに私が遅れをとるということはなかったが厳しい状況だった。

『ウィル』君は『シグナム』が渡した『剣型』の量産型支給デバイスを自在に操り私の急所を的確に狙ってきた。

それに対して私は【バルディッシュ】を起動させ、それを捌きながらカウンターの要領で斬撃を加える。

「はああ!!」

気合い一閃

力を込めて【バルディッシュ】を振るう。

「……ちつ。」

『ウィル』君はゾツとするような冷たい声で舌打ちをしながら頭を下げて私の攻撃を避けた。

そしてその態勢のまま私に三連突き。ひとつが頭、もうひとつが胸。最後が鳩尾と、やはり全て急所狙いだった。

「くっ……。」

私も身体が崩れている状態なので【バルディッシュ】の【プロテクション】を使い防ぐ。

それは急ごしらえだったが斬撃を防ぐという役割を果たしてくれた。

『ウィル』君はその一瞬で失敗したと判断したのだろう。間合いを取るために後ろに下がった。

そして次の瞬間に左手に魔法陣が出現する。

「【一筋の光】（レイ）」

簡易詠唱での魔法攻撃。一本の線のようなその光撃は速さがずば抜けていた。

私にその魔法が衝突する。しかし威力自体は低く私の動きを少し鈍らせたただだった。

「いきなりですけど質問いいですか？」

突如『ウィル』君が私に話かけてくる。

「いいよ。どうしたの？」

「二、三個聞きたいことがあるんですよ。」

“しょうもないことですけど”と『ウィル』君は笑う。  
私が“構わないよ。どうぞ”と言うと『ウィル』君はしゃべりだす。

「フェイトさんは死刑制度ってどう思います？」

「死刑制度？」

「そうです。死刑制度です。罪を背負い過ぎた人が行き着く最後の場所。」

私はその質問をなぜ今する必要があるのかと思ったが約束したので答えないわけにはいかなかった。

私は今まで出会った人達のことをそして私自身のことを考えてしまった。

時空管理局の執務官という役柄である私は今でもたくさんの悪人と出会い、ぶつかり、そして別れていった。

その中にいる人達でも死刑になってしまった人がある。だが決して根から悪い人はいなかった。

だから私は話し合ってそれから罪を償ってもらえると信じている。たとえ死刑がなくても……

「……私は死刑はいらないと思う。」

“だって”と私は続けて

「死刑になる人がいても……その人が初めから悪い人じゃないはずだから。きつと話せばわかってくれる。そしてきつと自分が犯した

罪を後悔して償ってくれる。だから——……」

——死んで罪を償うっていうのは間違ってると思う。

「……………」

『ウィル』君は目を細める。

何か気に入らないことを言ったのだろうか？

そう思ったがこれは私が思っていることだから仕方ない。

「……………二つ目です。」

少しの沈黙の後『ウィル』君が喋り出した。

「貴女は管理局が正義で犯罪者は悪だと思えますか？」

「……………？。」

なんて当たり前のことを聞くのだろう。そう思わずにはいられない

い質問だった。

だが『ウィル』君は真剣な眼差しを送ってきた。

まるで私という存在を試すかのように――

それでも私は自分の信じたままに進む。

「私はそう信じてる。……といつても犯罪者が全員悪というわけじゃないと思うけど。」

最初の部分を聞いていた『ウィル』君は一瞬頬を緩めた気がした。だけれど私が最後の部分――付け足した部分を聞くて目を見開いて驚いている。

――どうしたの？

私はその出かかった言葉を飲み込む。

なぜかこれは聞いてはいけない気がしたから……

「どう―てあ―た―？な―で？僕が――いの？お―え――母様……」

だからだろうか？『ウィル』君の放った言葉が妙に聞き取れなかったのは

「え？今なんて……」

「本当はまだありますがいいです。」

『ウィル』君は声を少し大きめにして私の言葉を遮った。

「わかりました。やはり僕と貴女達は根本的に違うみたいですね。」

「僕は死刑は必要だと思っし管理局を正義だと思わない。」

『ウィル』君は再び剣を構える。

「……どうして誰もわかってくれないんだろう」

「どうしたの『ウィル』君!？」

『ウィル』君が光りを失った目で誰かに呪詛を吐くかのように呟いていた。まるで世界を呪った言葉。

「すべては母様のため……そしてウィリアム家のために。」

【召喚<sup>サモン</sup>】、来て!!!『ライチ』『カナリア』

「なっ!!!召喚魔法!？」

「召喚魔法とは少し違いますけど……そんな感じです。」

まさかベルカ式のデバイスで召喚魔法を使うなんて考えてなかった私は焦り、魔法を使った。

「バルディッシュュ!!」

《Thunder Rage》

私の周囲に光る稲妻。稲妻は一時空中に漂ったがすぐに光の矢となつて『ウイル』君に向かう。

その光の矢は本物の雷にも負けない速さで飛ぶが『ウイル』君は避けるそぶりも見せない。

——なぜ?と思ったがすぐに理由がわかった。

「『ご主人様あああ!!』」

「『ライチ』、『カナリア』。久しぶグフツツ!？」

『ウイル』君が使った召喚魔法の魔法陣から出てきたのは二人の小柄な男女。

少女は猫のような耳と尻尾をたずさえた、所謂獣人といわれる種族だろう。背中に大剣を背負っているがそれ以外は普通の女の子の

ようで、可愛らしい口と大きくパツチリした目が特徴的だ。

もう一人の少年は中肉中背のどこにでもいそうな少年。だが背中から生えている真つ白な翼が普通じゃないといていた。

その二人は魔法陣から出た瞬間に『ウィル』君に抱き着き後ろを確認せずに魔法を迎撃するために動く。『ライチ』といわれた女の子は、抱き着いた瞬間に背中の大剣を片手で引き抜き光の矢を叩き切る。

もう一人の魔法陣から出た男の子も『ウィル』君に抱き着いた手をひるがえ翻した。何かの魔法を使ったのだろうか？すべての矢が地面に押し潰されていた。

「ご主人様！！なんで最近呼んでくれなかったんですか！？寂しかったんですよ！？」

「あれ？さつき『最近楽だなあ、ヒヤッホオオイ、です！！』って言ってないっけ？」

「『カナリア』。少し黙ってなさい、です。」

二人は『ウィル』君に抱き着いたまま、楽しそうに話していた。

それは年相応の柔らかい笑みのように感じる花のような笑顔。

「忙しいところごめんね。ちょっと手伝って欲しいんだ。」

「全然大丈夫なんですよ、ご主人様!!」

「ご主人様のためなら、たとえ火の中水の中?」

「そう、じゃあ一緒に戦って。」

「「わかりました!!」」

そうして『ウィル』君はこちらを向いた。

「『フェイト』さん、卑怯だと罵<sup>ののし</sup>ってくれてもいいですよ。……だ  
けど僕は貴女にだけは絶対に負けません。」

『ライチ』、僕と一緒に前へ!! 『カナリア』は援護を!!」

指示を出した『ウィル』君と『ライチ』ちゃんは私に向かってきた。

『カナリア』君は翼を広げて空中に移る。

「ぐらびてい　あろー?」

『カナリア』君は空中から私だけを狙い、黒い矢を放つ。数はそんなに多くないが逃げ場を制限された。

——回避も出来るけど……は……

私はあえて回避をせずに防御魔法【ラウンドシールド】を使いその場で魔法を受ける。

「『ライチ』、右に！！挟撃きさげをしかけるよ！！」  
「はい、です！！」

ダツと私の直線上から左右にわかれて私の視界から外れようとする。そして右から来た『ライチ』ちゃんが魔法の終わりと同時に大剣を振るった。

《Flash  
Flash  
Move》

だがその大剣は高速化した私を捉えきれずに宙をきる。

だが『ライチ』ちゃんは斬撃がはずれたのを見るとすぐに私を視界に納めようと辺りを素早く見回していた。

一対多の時は本来逃げるのが定石セオリーなんだけど模擬戦なのでそんなことは出来ない。

なので私は各個撃破を優先で戦うことにした。

そう考えた私は高速化した状態で『ライチ』ちゃんの背後を取る。

だけど

「ッー!!」

彼女は私が背後をとった次の瞬間に大剣を後ろにむかい振り下ろす。

シュツと私の横に風切り音。

——完璧に死角にいたはずなのに攻撃された!?  
なんで!?

「【狩りする一筋の光】（ハンティング レイ）!!」

「【円形防御魔法】（ラウンドシールド）あんど【重力の牙】（グレヴィティ ファンク）?」

私が足を止めると『ウィル』君と『カナリア』君が私に魔法を放ってきた。

『ライチ』ちゃんにも当たるかと思ったが『カナリア』君が最初に使った防御魔法——ラウンドシールドによって防がれている。

思考が一瞬止まっていた私に猛スピードで近づいてくる魔法に対処する術はなく私を襲う。

「なっ！——くっ！？」

二人の魔法が直撃した私は吹き飛ばされた。地面に転がり投げ出される。

——さすがに三対一は厳しかったかな？それでも『ウィル』君のあの悲しそうな目、どうしても聞かなくちゃいけない。

そう自分に言い聞かせて立ち上がる。

——かなりボロボロになっちゃった。多分次に撃つ魔法が最後になる。

「バルディッシュ。次の一撃にすべてをかけるよ」

《Ye<sup>はい</sup>s》

ウィル君達は私の雰囲気が変わったのがわかったのかデバイスを強く握る。

決着は一瞬でついた。

《Load Cartridge》

「雷光一閃!」

《Plasma Zamber Breaker（プラズマザンバーブレイカー）》

その時一瞬私の右手に激痛が走った。だがそんなこと気にする余裕がない。

「加重崩壊?【重力八倍】（オーバーグラビィ）?」

「電光招来。【雷と雷】（サンダーサンダー）、です。」

「神撃再現。【神の……】——」

『ウィル』君がなぜか途中で魔法を撃つのをやめた。

だが『ウィル』君が魔法を撃つのをやめたといつても『カナリア』君と『ライチ』ちゃんの魔法も強力で拮抗を見せた。

だがやはりまだ甘いのか徐々に私の魔法が押していた。

そして

——…また、私の右手に激痛が走る。

今度は痛みとともに衝撃が加わり私の右手を飛ばす。それによって外れた私の魔法。

最後に覚えていたのは『カナリア』君と『ライチ』ちゃんが放った魔法が視界を白く染めたことだった。

「私は気絶してたんですか？」

ここまですを思い返して疑問を口にする。

「ああ、そうだ。にしてもいくらリミッターを付けているとはいえ『テストロッサ』が負けるとはな。」

——確かに。いくら数の有利があつたとはいえ負けるとは……。将来有望だ。是非とも管理局に来て欲しい。そうしたら、なのも喜ぶだろうし（主に訓練的な意味で）。

「そつえば『ウィル』君達はどこにいるんですか？」

「ん？もう時間が遅かったからな。帰らせた。」

「そうですか、と私は呟いてソファーから立ち上がる。」

「そつえば『ウィル』から伝言だ。」

「そう言つて『シグナム』が私を呼び止める。」

「『三対一なんてすいません。また機会があつたら戦いましょう』  
だそうだ。」

「律儀ですね。」

「そうだな。一応ぎりぎりまで看病していくと言つていたんだがな。  
『ウィル』に用事があるらしくてな。」

「そうですか……。」

「また会える時に看病をしてくれた事にお礼をしよう。」

「っ!!」

「その時に私の右腕に痛みがある。」

私の右腕はなぜか赤くなっていた。

——おかしいな。私右腕にダメージを受けてなかったんだけど……

「アリス!!」

ガン!!と扉を叩き付けるように開け中にいる。そして少女に目一杯に怒鳴った。

いつもの僕らしからぬ態度だろう。他のメンバーも何事かと、こちらに目を向けてきた。

「……どうしたの？」

「とばけないで!!アリスでしょ。僕と『フェイト』さんの模擬戦の最後に……」

——『フェイト』さんの右腕を撃って邪魔したでしょ!?

「

「……」

アリスは焦ったように黙ってちらつとりゅうの目を見た。

その行動で僕はりゅうが少なくともアリスに指示か何かをした、と理解した。

「りゅうが指示したんだね、こんなことを!!」

「……アリスが撃ったとは限らないだろ？」

「苦しい言い訳だよ。僕は『アリス』が質量兵器の長距離狙撃銃を使うのを知ってるし、なによりちらつと見えた魔力光がアリスとりゅうの魔力光と同じだったよ!!」

そう言うとりゅうはハアと溜め息をついて肩を落とす。

肩を落としたいのはこちらだよ!?

「なんで邪魔したの!!あれは僕と『フェイト』さんの真剣勝――

……」

「三つだ。」

りゅうは僕の台詞に被せるように言ってきた。

「……なにが」

「『ウィル』。お前ならわかってるだろ。あの模擬戦を止めた理由だ。」

ちらつと僕の中に出たのは最後に使おうとした魔法——神撃再現【神の裁き】。省略詠唱をして威力がそこまで出ないようにした。

だけど問題はそこじゃない。問題はそれが

継承魔法である『断罪魔法』ということだ。

「……確かに『断罪魔法』を使おうとした事は謝るけど、しっかりとキャンセルを——」

「そのキャンセルする前の詠唱でばれるかもしれない。」

「うっ」

「確かに相手がああ、『フェイト・T・ハラオウン』だったから使いなくなる気持ちもわからないが……」

「……今はその時じゃない。」

“それに”とりゆうは続けて

「二つ目。お前、『ライチ』と『カナリア』まで出しやがって……」。

あそこで止めなかつたら完璧に全力でいつてたろ。」

「うっ」

「三つ目。いくらお前が強いからって、あんな六課組がワラワラいるなかでバレたりして戦いなんてことになったら………なあ？」

「うっ」

「そしてあの時止めた方が俺達に迷惑が掛からな——」

「うっわあぁん!!りゅうやんがイジメるよぉ!!」

そういつて僕はドアを飛び出し夜の外に向かい走っていった。

「——い、っていうのは建前で。ん?『ウィル』どこに行った?」

周りを見ても誰もいない。おかしいな。

「あんたがイジメるから帰っちゃたわよ。」

さっきからテーブルで自分の愛銃とデバイスを磨いてる『アリス』が声を掛けてくる。

「なに言っただよ『アリス』。イジメてなんかないだろ。」

「（気づいてないのかしら……）……まあ、いいわ。で建前でなんなの？」

その話し続けるのか……

「『ウィル』に管理局に潜入して貰う。そろそろあいつらも動くだろうし。」

「はあ？」

今日の夜も、いつもどおりに深い黒だった。

Chapter Six

END

## 死神との模擬戦（後書き）

ご精読ありがとうございます！！

多国籍軍です！！

今回も駄文すぎワロタ

しょーせーつー難しい！！書きたいことが書けない！！

本当はもうある程度設定も固まってるのに……

あと『カナリア君』と『ライチちゃん』はウィル君の秘密兵器……  
なのかな？

多分前半はそんなに出ないかな？出るとしたら後半。

それまで忘れてほしくないな

と、左耳で東方ヴォーカルアレンジを聞きながら書く俺。残念すぎる

あと死刑論もあくまで視点が俺。それも残念すぎる

次も暇があつたら読んで下さい。

あつ！！あと感想も（ry

## 修学旅行（前書き）

修学旅行編始めました

あと主人公をちょっとフランクにしてみた。

駄文で（ry

追記

Flatさんのシークレットゲームの続編の体験、神ゲーだろ。鳥肌立った、絶対買っわ

## 修学旅行

夏がそろそろ終わる筈な九月中旬。

俺は折れた左腕を庇いながらキャリアバックを持って学校に向かっている。といってももう腕もアバラも治りかけてるんだが……

まあ、いいか。

それよりなぜキャリアバックを持っているかって？

ちよつと遅い修学旅行さ。

この『国立ティプノツチ魔法学園』はとても遅い段階で修学旅行を行う。修学旅行までの期間を勉強費やし修学旅行後にラストスパートをかけるらしい。

もう卒業まで少ししかないのに……。

とにかく今日は学園に一度集まって皆で向かうらしい。目的地は第19管理世界『ティーゼル』。

文明がそこそこ発展している世界だ。

そこにあるいろいろな歴史的建造物を見に行くらしい。

問題はそこだ。

.....

何が嬉しくてあんなところに行かなくちゃいけないんだ……。

不幸だああああ（CV：上条さん）

「なあ、龍。今からトランプやろつぜ」

「兵吾、お前は子供か。」

「はあ？馬鹿じゃねえの！？修学旅行の行きといたらトランプだろ！！」

「そうだよ。りゅうやん！！トランプ、トランプ！！」

「待て、ウィルがここに居るのは違う。コイツはクラスも、乗る次元挺も全部違う。だからこそ違う。違うったら違う。」

あの自分が不幸だと悟ったあとは早かった。

とにかく教室に向かい適当にクラスの奴らに挨拶をして担任（葵ちゃん『独身』）の指示に従い次元航空機に乗っている。

で今に至る。

上文のウィル、兵吾、俺？の会話でわかるように今は全員が修学旅行特有のハイテンションに襲われている。

——めんどくさい

でもまあ、これから行く国でトラブルに巻き込まれるわけでもないし、そもそも王女に会わなければいいだけだし……。久しぶりの息抜きだと思ってゆっくり休むか。

「なら、ダウトやろっぜ。負けたらバツゲームな。」

「ふふふ。いいの、りゅうちゃん？僕……………ダウト恐ろしく強いよ？」

「ダウト」

嘘つく時に目を逸らす奴がダウトで強いわけがない。

「くつくく。俺もこの学園内じゃ、言わずと知れたダウト職人。『変態兵吾』とは俺のことだ！！」

「だからどうした」

「そろそろ着くから各自降りる準備をしなさい。」

ダウトは俺の圧勝。だが降りる時間になってしまったので罰ゲームはまた今度にして、今は俺達の担任『葵ちゃん』の指示に従うことにした。

「わかりましたー、葵ちゃん。」

「桜木、私は先生だ。しっかりと先生をつける」

ちなみに桜木は兵吾の苗字だ。

「わかりました。葵ちゃん先生。」

「おい、神無月。お前は斬新なことを言うな。過去なんか担任を持ったがそんな風に言われたのは初めてだ。」

「そうですよねえ。葵先生」

「ウィリアム。お前はなぜここにいる。」

ウィルがここにいるのはやはり駄目だったらしい。

うちの修学旅行は一般的な学校に比べて長いとされている。

実際に平均的な修学旅行の日数はだいたい二日から三日とされている。

だがうち（ティブノツチ魔法学園）は一週間から二週間だ。

いや、長すぎるだろう。

そう思うのが普通なんだが学園長が決めたことに文句は言えない。

悲しすぎるかな、縦社会

ちなみに今回は一週間、この世界で歴史見学。ならびに観光地巡りをするらしい。

結構楽しみだ

中世ヨーロッパのような街並み……と言っても伝わらないだろうか  
ら簡単に言うがキレイで広くて活気がある街。

それがこの世界に着いてからの俺の感想だった。

商人達は露商でこれでもかという程、声を張り上げて自分達の商品  
を宣伝し……—

「その旦那！！そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題無い。」

「そんなこと言わずに見てくだけでもさあ。ね？」

「確かに見てくだけならタダだしな。」

「でしょう！！じゃあ——」

「だが断る」

——……ているんだろう。多分、おそらく……

とにかくそんなような街だ。

「りゅうやん」「龍」

「ん？どうした二人とも」

今は自由時間。せつかくの異世界ということで今、俺達（ウィルと兵吾）は適当に歩いているとこだったんだが………前に歩いていた兵吾とウィルがなんだか急いだ感じで振り返ってきた。

「前の方で女の子が大量の不良に絡まれてる！！」

テンプレ乙

「助けてあげてよ、りゅうやん」

「お前が助けるよ。俺はこの世界で騒ぎを起こしたくないんだよ。」  
アイツが出てくるから

「いや、ねえ？助けたいには助けたいんだけど………」

「……？」

なんでコイツ口籠ってんだ？

「俺はDQNが恐いだけだ!！」

「黙れ。変態兵吾」

「ダウト!！」

「お前が言っただぞ？」

なんて言っただがまったく言っていないほど埒があかない。仕方ない行くか

「わかったわかった。行ってくるからそこで待ってるよ」

そう言っただ俺は少女のいる方向に歩きだした。

S i d e 冴姫 凜

どうしよう？

今私の前には体格のいいスキンヘッドやらモヒカンやらリーゼントといった見た目重視（笑）のイケイケなお兄さん（笑）に囲まれて

いる。

もうすぐスバルさんやティアナさんとの待ち合わせ時刻なのに……

「スイマセン、お兄さん（笑）達。少し邪魔なので消えてくれませんか？」

私はさっきからこういった風に丁寧にお引き取り願ってるのに帰ってくれない。面倒だなあ

「そんなこと言わないでさあ、今から俺達とドライブしに行かない？」

「いえ、ですから私は待ち人がいるので行けませんと何度も……」

「いいじゃんその人達も一緒にいいからさあ。どっか行こうぜ」

——いい加減煩わしくなってきた。そう思った時不良達の後ろから声がした。

「ハゲか」

ペチツと黒髪の男の人の手首が効いたツツコミがスキンヘッドの頭にはいる。

「……あつ？それともカラオケでも行く？俺達が奢るからさあ。」

「女子か」

ベチツと今度はさつきよりも強めなツツコミがスキンヘッドの頭にはいる。

「………どうだい？とにかくどっか行かない？」

「ナンパか」（ベチャツ）

「トオオメイトオオオオオがオレエエのあたまああでえええ！！！」

「「あ、兄貴！？」」

「なにこれ楽しい」

「……………」

………最後らへんは私も何が起きたかよくわからなかった。

わかったのはなぜかさつきからツツコミを入れていた黒髪の男の人がいきなり大量のトマトを持ってスキンヘッドの男の人の頭に叩きつけて自らの手とスキンヘッドの頭を真っ赤にしていたことだった。

「て、てめえ!! 兄貴に何するんグワツ」

「た、田中!! お前何すんだ……!! え? な、何持ってたよ!! や、やめっ。それはそこに入れるものじゃっ——。」

アツ——  
「<sup>♂</sup>

あ。モヒカンにトマトがいった。

そしてリーゼントにもごぼうが植えられている（物理的に）。

その惨劇は黒髪の青年が飽きるまで続いた。

S i d e 神無月 龍

スゲーな。人間の穴にごぼうつてあんなに入るんだな。

「おい、お前ら。まだごぼうが足りないか？（主に物理的な意味で）

」

「「「ひいい！ーご、ごめんなさい！ー！」」」

俺の脅迫が効いたのか、俺の両手に装備されたごぼう（背中にはさらに大量のトマトを背負っている）に怯えたのかはわからないが不良達は我先にと逃げてくれた。

……正義は勝つ！！

「あの、ありがとうございます。」

俺が勝利の余韻に浸っていると後ろから聞こえた a s o n g  
o f p r a i s e（讃歌）

振り返るとそこには少女という名のエンジェル Angel が……

「私、時空管理局の起動六課に所属している冴姫凜さえきりんです。ああいう輩はしつこくて……。本当にありがとうございます。」

来るわけなくDevil（悪魔）ですね。わかります。

ていうか普通、職場や役職は言わないよね！？  
ただの威圧だよね！？

お前もあのイケイケなお兄さん（笑）みたいなことしたら管理局にしょっぱくぞつてな具合にね！！

「あ、ああ。当然のことをしたまだよ。俺は学生をやってる神無月龍だ。よろしく。」

少女は今まで俯き加減だった顔を上げて日本人特有の黒髪が俺の前に姿を現す。

ってコイツは！！

「不確定因子！？」

「……？」

まさかこんなところでこんな奴に会うとは……。

とにかくここは離脱するしか……

「りんちゃん！とあれ龍君？」

「本当だ……は！？じゃあアイツ（兵吾）もいるんじゃないの！？」

「あつ、ティアナ先輩、スバル先輩。おはようございます。」

おう、シット！！  
逃げられなかった。

初日から不幸だな……

## 修学旅行（後書き）

ご精読ありがとうございます！！

多国籍軍です！！

駄文すぎワロタ

今実家にいます。そして毎日のように徹夜もどきしてます。

クッソねみい

それは置いて一部はこの修学旅行編で終わり？なはずです。多分、おそらく

Sideストーリーはあんまり入らないかな？

わかりません

とにかくもつとおもしろくしてきたいです！！

次回も暇があれば見て下さい。

あつ！！あ后感想（r y

## その二 接敵（前書き）

連続投稿

後書きは最後で

## その二 接敵

「「ええっ！！ウィル君と龍君は同じ学校だったの！？」」

「私はそれよりも先輩達が龍さんと知り合いだった事に驚きましたよ……。」

「あれ……俺は？」

「「黙れ変態兵吾」」

「龍はわかるけど凜ちゃん！？俺達初対面なのに酷くない！？」

「なぜか貴方は生理的に受け付けません。」

「さすが兵吾、安定したキモさ。」

ひとまず皆混乱してたので近くの喫茶店で話し合う事にした。

ちなみにウィルが

『いやあ、りゅうやんなら凜ちゃんと面識無いからさりげなく帰してくれるかなと思って……』と笑いながら言ったのでゲンコツ一発。

——せっかくの修学旅行になんで管理局と関わらなくちゃいけないんだよ……。

「そつえば起動六課の人が三人も集まってどうかしたんですか？」

ある程度、世間話と言った自己紹介をした俺達に漂いそうだった話題切れという空気。

それを打ち破ったのは兵吾の疑問だった。

「ああ！僕もそれ気になってた！！何かの事件なの？」

そしてそれに便乗する形でウィルも質問する。

「いえ事件ではないんですが……いや、これは事件何でしょうか？」

「私に聞かないですよ。……とにかく一般人に教えていいものじゃないのは確かね。」

不確定因子こと冴姫凜と起動六課のティアナ・ランスターは言う。  
ちなみにスバル・ナカジマはパフェ食ってる。

「だから、今日は私達は『ただこの世界に買い物にきた』ってことにしといて。」

「ふいみはちみもほえがいいとおみようでひよ？」

「スバル先輩は『君達もそれがいいと思うでしょ？』と言っています。」

まあ、俺達もそれがいいと思うぞ？だって俺達忙しいし（主に修学旅行的な意味で）遊びたいし（主に修学旅行的（ry）集団行動だし（主に（ry））。

本当に関わりたくない。

でも、ちょっと遅かったんだよなあ。

「敵だ。俺から十時の方向に三人。三時の方向に二人。六時の方向にも二人。距離は六時方向の奴らが一番遠い。」

「武器はわかる？」

「多分何かの質量兵器だな。六時方向の奴等は多分狙撃出来るもの。」

「え！！マジか！？龍の魔法に引ッ掛かったのか？じゃあ本物だよなあ」

ウィルと兵吾は長年の付き合いだ。すぐにデバイスを出し戦闘体制になる。

だが六課組は何が起こったかわからないらしくキョトンとしてる。そこでウィルが説明を始める。

「りゅうやんが常時展開してる魔法だよ。効果は殺意またはそれに準ずる何かを察知して使用者に伝える。要するに探索魔法の一種だね。まあ、りゅうやんの使ってるのは精度も範囲も桁違いだけどね。」

——めっちゃくちゃ簡単にまとめられた！？まあだいたい合ってるんだけど……。

「めんどくさいから騒ぎを起こさないように一瞬で片付けてくれ。うれしい事に向こうはこっちの姿を視認してないから大丈夫なはずだけど一応【認識障害】と【身体強化】をかけとくぞ。」

「わかったよお」「力がみなぎるぜえ!!」

「待った!! 私達が行くわ。貴方達は民間人でしょ!?!」

そういつてティアナは立ち上がるがまあ、待つてくれと兵吾が片手で制す。

「レディー達は座つてティータイムでも満喫してな。すぐに片付けてくるから。」

「さすが兵吾、安定したキモさ。」

「ガッデム(ちくしょう)!!」

そう言つて二人は外に行つた。

俺? ティータイムだけど?

お前はレディーじゃないだろ? ナニッテルノワタシハオンナヨ?

「貴方は心配じゃないの?」

変なことを考えているうちにティアナが話かけてきた。

「心配つて何が?」

「兵吾君とウィル君だよ！！彼らはまだ学生だよ！？」

スバルがそう言うが

——というかお前達って俺達より年下じゃないっけ？

「知ってるか？今年のティプノツチ魔法学園の三年は学園設立史上最強って言われてる。」

「だから！！それでも彼らは——」

「最後まで聞け。それである二人は学園のNo.1とNo.2だ。もちろん即戦力の次期エースとして管理局や聖王教会からも誘いがきてる。」

——なぜかウィルは全部断ってるが…

「そんな奴らが素人に毛が生えただけのチンピラに負けるとでも？」

「でも……」

スバルが続けようとしたが次の瞬間辺りに爆発音が響きわたる。

「終わったか……」

そして龍だけが終わりを確信していた。

暗闇の中一人の少女がいた。少女の容姿は暗闇でわからないが腕にクマのぬいぐるみを抱いていた。そして少女の周りにはたくさんの男達がいる。

——生きてるか死んでるかは別にして……だが。

「……探し物は見つかった？」

少女の声には生気が無く死んでるんじゃないか？と聞かれたらそうかもしれない。と答えてしまいそうになる。

「見つけたよ！！ロストロギア【五つの城壁】ランバレルをねえ！！」

声の発生源は少女が持っている人形。本来しゃべるはずがない物がしゃべっている。

だが少女はそれに驚いた様子がない。

「だけど問題が起きた。」

クマの人形はさっきとは打って変わり少し低い声で話を続ける。

「……………何？」

「【五つの城壁】ランバレットを管理局が回収しちゃった。」

その言葉を聞くと少女は少し考えた後自身が思ったことを口にする。

「……………回収出来そうに無いの？」

「出来ないこともないけど…………。」

クマの人形はそう言って口ごもる

「……………どうしたの？」

「今【五つの城壁】ランバレットを持つてるのが起動六課の連中なんだよねえ」  
少女はクマの人形が口ごもった理由を発見した。

## 起動六課

本来ではありえないほどの高ランク魔導士の集まった部隊。そして将来のエース級を集めた部隊でもあると聞いている。

そんな部隊が相手なら確かにこちらの方が分が悪い。

「それに、おまけでもっとめんどくさいものがついて来たよ。」

まだあるのか。ただでさえ起動六課を相手にしなければならぬのに……

少女はそう思いながらもクマの人形の話を聞こうとする。

「……なに？」

「さっき戦闘に出した奴らの情報。【五つの城壁】ランパレットを持つてる奴らの近くに『博士』の息子と『天使』の息子がいるらしい。」

頭痛がした。

よりによってなぜ？

博士というのは私の産みの親であり今回のことを頼んできた張本人だ。その息子となると下手に手を出せない。

だがそれはいい、問題はもう一人だ。

天使『エルディ・ウィリアム』

昔、管理局に存在した数少ないエースの一人。それでいて継承魔法【断罪魔法】を得意としていたベルカ式の騎士。

家柄をとて重視してたがその実力は折り紙つきだったはずだ。

その息子となれば当然【断罪魔法】も覚えているだろうし戦闘の訓練を受けているだろう。

分が悪すぎる。

でも

「……やらなくちゃ。」

少女は暗闇の中で力強く呟いた。

「おい、俺はお前達になんて言った？」

どうやら戦いが終わったみたいだから会計をしてウィルと兵吾がいる場所に向かったんだが……

「「はい、龍様は騒がしくならないように殺れと私達におっしゃられました。」」

「そつだよな。じゃああれは何だ？」

そつ言つて俺は街のある一角を指さす。

なぜか地面が盛り返していて、大小様々な穴が多数あき、なおかつ一キロ先の家からは煙りが上がっている。

もちろん周りの人々はとてもパニックっている。

「……」

「さあ、いい訳を聞こうか…」

「で、最終的に襲ってきた奴らは何を狙つてたんだ？」

「……」

ボロぞうきんのような容姿になった二人は何も言わず（言えず？）地面に俯せで倒れていた。

「はあ、……。」

（溜め息でごぼっセット）

「……ッ!!」

（尻を隠しながら立ち上がる二人）

「で、奴らは何が目的だったんだ？」

そう言つとウィルは肩を竦め答える。

「さあ？なぜか、彼ら何も話してくれなかったからね。でも人殺しするつてよりは何か探してるぽかったけどね」

「そうか、何か探す感じ……か。少なくとも俺達は『今は』そんなすごい物持っていないしな……」

・・  
嘘は言っていない。『今は』  
【五つの城壁】ランバレットも【魔力晶】グラインも持っていない。

となると十中八九、六課組が何か持つてゐるはずなんだが……。

横目で六課組の方を見ると案の定三人で集まって何か話していた。

「どうする？ 龍君達なら誰かにばらすってことはないと思うけど？」

「いや、でもウィル君達は一般人だし……」

「スバル先輩。わかりますが彼らが関わってしまった手前情報を与えないのは逆に危険かと……」

ああでもない、こうでもないと話し合ってる様子。

だがそれもすぐに終わった。

「わかりました。今から事情を説明するので一旦管理局の方に行きましょう。」

「ええー、管理局う。僕あそこ嫌いなんだよなあー。」

「我慢しろウィル。事情を話して貰えないぞ。」

「はあーい。」

「では行きましょうか。」

そういつて全員凜に着いて行った。

「……ん？」

「——??、どうしかしたかウィル？」

「いや、……今りゆうやんの魔法に何か引っ掛かった？」

俺は言われて魔法陣の乱れを探したが……

「いや何にも引っ掛かってないぞ？」

「そっか、じゃあ気のせいかな。」

「どうしたんだウィルっち。なんか感じたのか？」

兵吾がひょこつと顔だけこちらに向け話してくる

「いや、殺気というよりは寒気かな？ってものを感じた気がしただけ。」

「どっちも同じだろ！？それにそれらの類だつたら龍の魔法が捉えてるからな。」

なぜか自信ありげに言つ兵吾に溜め息を吐く俺。

「そうだね。それこそ、りゅうやんが魔法で捉えられないものは無機物とか、あとは生きているものじゃ……——

戦闘機人くらいか。」

「そうだな。アレ生きてるけど一応機械みたいなもんだし。」

少し離れたところで龍達についていく一人のクマのぬいぐるみを持った少女がいたことに誰も気付かない……

### その三 必殺兵吾ガード（前書き）

後書きは最後で

### その三 必殺兵吾ガード

管理局本部

龍と兵吾が来た時とは別の部屋に通された。

以前来た部屋より圧倒的に大きく、いかにこの前ぞんざいな扱いだったか見て取れる（まあ盗撮したからな……兵吾が）。

以前と違うのは

「おいおいウィルと……あと誰だ？」

赤髪幼女がいたマル

「……………ほらほらお嬢ちゃん。ここは遊び場じゃないからね、早くお家に帰ろう。それともお兄ちゃんが家に送っていいところか？」

「ふんッ！！」

「必殺兵吾ガード！！！」

「アベシッ！？！」

なんだこの幼女、いきなりハンマー振り回してきやがった。

「ヴィータ副隊長やめて下さい！！この人達がさっき連絡した民間協力者の方達です！！」

ティアナ達が必死で赤髪幼女をあやしている。

なんだただの子供か……。

「離せ！！あいつ絶対私のこと馬鹿にしてる！！」

「考え過ぎです！ヴィータ副隊長！！ほら龍さんも誤解を解いて下さい！！」

「ほらそんなに怒るとカルシウムを使って、ただでさえ小さい背がさらに小さくなるぞ？」

「余計なお世話だ！！」

ん？でもカルシウムとイライラは科学的因果関係はないってどこかのテレビでやってたな……

「やっぱお前怒っても大丈夫だぞ。」

「うがああああ！！好きで怒ってるんじゃないやねえよ！！」

「龍さん！火に油を注がないで下さい！！」

「え？火なんてないだろ？」

「比喻です！！」

その後は六課の全員が集まるまで幼女のハンマーを【最強の盾（兵  
吾ガード）】で防いでいた。

「ヴィータいい加減にせえ。話しが始まらないんや。」

いつの間にか部屋には起動六課の主力全員が集まっていた。その中  
で痺れを切らせた八神はやてが赤髪幼女に強い口調で言う。

「うつ……ごめん、はやて。」

そう言っただけで席に座るヴィータと呼ばれた赤髪幼女。

それによつてはやてが喋りだした。

「いやあ、ウィル君と龍君達が知り合いだったんも驚いたんやけど、  
もつと驚いたのは偶然異世界で鉢合わせって……もしかして狙った  
ん？」

「修学旅行中にわざわざ面倒ごとに巻き込まれたりしたくないよ」

「それもそうやな。」

そう言っただけはさて。というか今更だけど民間協力者扱いなんだな。

まあ、そうでもしないとここ（管理局）にいれてもらえないし六課の任務内容なんて教えてもらえないだろうけど……

……ていうか俺って民間協力者なのか？ただ敵を教えたただだし。何もしないような気もするけど……

まっ、いいか

「じゃあ僕から質問があるんですけどいいですか？」

ウィルが立ち上がり質問をしようとする。

「ええよウィル君。」

「それじゃあ失礼して。僕達を襲ってきた人達は誰なんですか？あの人達なにも喋ってくれなくて」

「そのことなんやけど、ウィル君達……その襲ってきた人殺したりしてへんよね？」

「???当たり前じゃないですか。僕のデバイスも非殺傷設定になってますから間違いないはずです。」

「そうなんか……実は襲ってきた奴なんやけどその人達は覚えてないか……その、死んでるんや。」

……覚えてないか死んでる、か。

考えられる可能性は三つ。

一つ目。全員が口裏を合わせている場合。これなら全員が覚えてないと言っても不思議じゃない。

だけどわざわざ襲ってきた奴が死ぬ意味がないのでこれはほぼ違う。

二つ目。なにかしら外的影響（精神干渉など）を受けて知らず知らずのうちに行動した。

これなら覚えてないのも頷けるし精神が堪えられずに死んでしまったと仮定できる。

でも、なんか違う気がするだよな。

三つ目は気絶した奴らや死んだ奴らを操れる奴がいて俺達を襲ったか……

個人的にやるとしたら俺はこの方法を選ぶな。証拠も出づらないしなにより自分の手を汚さない。——使い方によっては相当厄介だな。

まあ、何にしる目的がわからない事には始まらない。

「で、六課の人が狙われる理由は？」

思考の海から強制的に抜け出し今一番大切な情報収集をする。

どうやら俺達の誰かがこういった質問をすることはわかっていらしく、はやてが周りにいた隊長・副隊長クラスの人達にアイコンタクトをした。

次に行動したのはフェイト。

ゆっくりした動作で椅子から腰を上げ話し始める。

「今回私たちはティーゼル国の極秘の応援要請によってあるロストロギアを運んでいました。」

だろっな。ロストロギア 古代遺物関係じゃなかったら六課が動かないだろうし……。

「そしてそのロストロギアがこれ。」

そう言つてフェイトはスターズと凜に指示を出す。

取り出されたのは豪華な装飾が施された小さな箱。上部にはティール国の国飾である剣と銃が交差した盾彫られていた。

「龍君と兵吾君は知ってるはずやね。」

そうして取り出されたのは

「え?」「はあ?」

「金色の装飾。鍵型の古代遺物。……【五つの城壁<sup>ランバレルシティ</sup>】ですね。」

「そうだよ。凜とスターズの皆が運んでくれたんだ。」

まさしく俺達が求めている物だった……

俺とウィルは絶叫をあげそうになるのをグッと抑える。だが内心は複雑すぎる。

——いやいや、なんであんの！？俺達が二年近く【五つの城壁】ランパレットを探してやっとこの前見つけたのにいい！！

——え？はあ？ランパレットって、なんで？りゅうやんも知らないみたいだったし……。

「（……あれ？）」「

だが二人同時に違和感を抱いた。

「というところも【黒い箱】ブラックボックスが狙ったんですかね？」

「そういう事になるね。この前は飛行艇で奪われたけど今回はそうならないように万全を期すから。」

そう、今回俺達【黒い箱】ブラックボックスは何も関与してない。

なら誰？

アイツらにしては手が強引過ぎるので違う。

——ならまた新たな勢力？それとも、ただの強盗じみた奴？

考えだしたらきりがない。

が、今回俺達はやってもない罪（後にやるつもりだったが…）を上乗せさせらるという、屈辱窮まりない状況にされたのでグチヨグチヨにして管理局に突き出してやる。

「フッフッフッフ。」

「（うわー！りゅうやんが黒い笑みをこぼしてる。）」

だが黒い笑み蔓延<sup>はびこ</sup>る中、兵吾が険しい顔をしていた。

・・・

「万全を期すって、なんですか？もう管理局内にいるんですよ。このままコイツ（ランパレット）も預かるんじゃないんですか？」

兵吾の質問は的を得ていた。いくら俺達『黒い箱』<sup>ブラックボックス</sup>が武闘派集団だからってわざわざ管理局に入ったロストログアを狙おうとは思わない（最後の手段で考えては置くが…）。

兵吾の質問にはやては困ったような笑みを作る。

「それがどうしても上層部から許可が降りないんや。」

「許可がってどうしてです？管理局はこういった古代遺物を保護、保管すれのが仕事じゃないんですか？上の許可が必要なんですか？」

「そうなんやけど……」

「そんな言わないで兵吾君。はやてちゃんだって頑張ってるんだよ。」

責めるような口調になった兵吾をなのはが優しく諫める。

——【五つの城壁】を集めるための許可を上層部がださない？

まさか【五つの城壁】<sup>ランパレット</sup>の本当の能力を知ってる？

……そんなわけないか。

「確かにそうですね。はやて様は何も悪くありませんね。で、これ（ランパレット）どうするんですか？」

「ひとまず六課で預からせてもらうつもりや。」

その言葉を聞き兵吾は満足したように椅子に座る。

ここいらで気付いたんだが俺、さっきから何も発言してないしものすごい空気じゃね？

俺はそう思いながらうなだれるのであった。

スターズと凜ちゃんが巻き込んでしまった民間人の中に見知った顔があった。

『フェンディ・ウィリアム』通称ウィル君。

私——フェイト・T・ハラオウンは不謹慎かもしれないがこの事態に感謝した。

私とウィル君とは模擬戦以来だけど、その時の戦いぶりから将来性の高さを把握し管理局に誘い込むつもりだった。

そのチャンスがこんなに早く来るとは思わなかったが私には好都合である。

「ウィル君、ちょっといい？」

六課での事情説明が終わった後私はウィル君に話しかける。

一瞬、ウィル君が眉を<sup>しか</sup>顰めた気がした。

「どうしたんですか？フエイトさん。」

だがそれもすぐに拡げられたウィル君の笑顔によってわからなくなる。

見間違えだと思った私はすぐに話を続けた。

「ウィル君つてもうすぐ学校卒業するんだよね。卒業後はどうするか決めてるの？」

「んー、まだ決めてないですね。あと半年近くありますから、ゆっくり考えます。」

「それじゃあ、どう？将来の選択の一つに管理局なんて。」

「……考えておきますよ。」

そういつてウィル君は笑顔のまま踵を返し龍君と兵吾君のもとに向かった。

「ふざけないでよ。誰のせいで管理局から追い出されたと思ってるんだ。」

少年の弦きは辺りの喧騒に紛れて消えた。

その四 協力? いいえ極秘です。(前書き)

最後です

#### その四 協力？いいえ極秘です。

一応あの後はい旦解散となった。

補足しておくが俺達は限りなく、保護された民間人に近い民間協力者だ。なのでロストログアを狙う正体不明の人物がいるとわかった以上、俺達も下手に動かない方がいい——と言ったのはなのだった。

かといって、やはりどうもあの場所（六課組がいる部屋）は心苦しいので管理局内部をぶらぶらと見学させてもらうということで手を打った。

兵吾はまだ六課の人達とコミュニケーション？が足りないらしくいろいろ話をしに行っている。

——もしかしたらアイツ六課に入りたいのかな？いやに必死そうだったし。

隣にいるコイツはどうなんだろうか？

俺と一緒に此処まで来たウィルに問い掛けようとする。といってもどんな返答が来ても最終的には管理局に一時的でも所属してもらうことになるんだが……

「ウィル、お前将来はどうしたいんだ？」

そう言くとウィルはなぜかムツとした顔をこちらにズイツと寄せる。明るい茶髪が俺の前で跳ねるように浮いた。

「りゅうやん“アイツ”と同じ質問しないで。ただでさえこんなところ（管理局）に来てイライラしてるんだから。」

少し怒気を含んだ口調。だが“りゅうやん”と言っている手前そこまでは怒ってないんだろう。

ていうか

「お前この前まで『フェイトさん』て呼んでなかったか？なんでもた急に“アイツ”なんて呼ぶようになった？」

「あの時は“アイツ”と長い時間いたから変えるの忘れてたんだ。」

——へえ、そうですか。

「僕は将来も何も『黒い箱』ブラックボックスに所属してる。これが変わらない限り僕はどこにもいかないよ。」

怒っていると言っていたが素直に答えてくれるウィル。優しいな。

「任務で管理局の職員になれってものがでたら？」

そのまま固まるウィル。

「……まさか次はそういう任務？」

「嫌なら違う奴に回すけどな。」

「……いいよ、受ける。」

ウィルは顔を露骨に歪ませ不承不承という感じで承諾した。それに俺がいいのか？と口に出して聞いた。

「本当は嫌だけど僕の管理局行きていうのは必要な行程なんですよ？」

「まあな」

「なら僕はそれに従うよ。」

「……そうか。」

本当にありがたいな。

俺は少し用事があると言ってウィルと別れた。

周りの管理局員が普段着の俺を見てどうしてこんなところに民間人がいるのかと疑問に思ったらしいが声をかけてくる奴はいなかった。

かなり目立つと思った俺は一旦、局内のトイレに入り魔法を使った。

「ん、いい感じだな。」

行ったのは【変身魔法】。一応管理局内ということでガチムちな身長百九十センチの浅黒い男にしてみました。

——これならばれる心配はないだろう。

そう思い俺は目的の場所に向かい歩き続ける。

二十分は過ぎただろうか？俺は周りにいた管理局員に聞きまくって目的の場所まで来ていた。

俺が来たのは管理局内で次元犯罪者が置かれている所謂監獄または牢屋と言われる場所に繋がる転移魔法陣だった。

転移によって衛星軌道留置所に来た俺は今度はここの職員の服装に変え、また歩く。

俺は目的の人物の監獄を見つけ行動を起こそうと看守らしき人物に近づく。どうやら軌道留置所の監獄のなかでもここは結構上な犯罪者が抑えられているらしく鉄格子付きの牢屋が三つあるだけという簡素な造りだった。

「おーい！見張り交代の時間だぞー！」

「おう、ありがてえ！ー！ちょうど腹減ってたんだ！じゃあここの鍵置いとくから頼んだぜ。」

俺はそれに任せとけと言って看守の男を見送る。

——めっちゃ簡単に潜入できちゃった。

少々ミッドチルダの最高留置所施設っていうのだからもつと凄いと思ってたが期待ハズレだ。

俺が侵入するぶんには構わないんだけどな。

「さて、始めましてかな？ジェイル・スカリエツティさん。」

「……君は誰だい？」

どうやらいきなり声をかけられたことで警戒したみたいだ。

「まあまあ、そんな警戒しないで。あなたが私の条件を吞んでくれれば話しますから。」

そう言って俺は演技のように大きな動作で手を広げる。

え、口調が違う？一応変装してる時の癖です。

「条件？」

「そう条件です。スカさんだってこんなところに長くいたくないでしょ？」

それはそうだがとスカさんは困ったように返答してきた。

「まあとにかく話だけでも聞いてください。決して悪い話しじゃありませんから。」

「……いいだろう。話してくれたまえ。」

そう言っでスカさんは話を聞いてくれる体勢になった。

「まずあなたを此処から出します。」

「！？」

「あ、言っておきますけどただじゃないですよ？もちろん条件付きです。」

そう言つとスカさんは若干沈んだように見えた。

「そんな難しい条件じゃないですよ。ただ私が作る【機兵装甲】バードスーツの手伝いをして欲しいんですよ。“極秘で”。」

「……私に頼むということは違法研究かね？」

「んー、最後の工程でロストロギアの耐圧試験するだけだからそこまで違法じゃないんですけどね。スカさんの技術の高さに惚れたんですよ。」

そう言つて軌道留置所の服を着た身長百九十センチの浅黒い男がはにかむ。

「いいだろう、引き受けよう。ただし条件を追加させてくれ。」

なんだろうと思い、言ってみてくださいと俺がスカさんの発言を促す。

「娘達……——ウーノ、トーレ、クアットロ、セツテも此処から出してやってくれ。」

今のスカさんの目は研究者のソレでは無く娘を守ろうとする父親のような目をしていた。

——…スゴイ。

その眼力の強さに思わず一歩退いてしまった。

この人を選んだのは間違ってた。俺は口を僅かに釣り上げ静かに笑う。

「くつくく、いいですよ。その条件を吞みます。」

そう言うスカさんは安堵したように笑みをこぼした。

「ただし娘さんには悪いですが一年と半年待ってもらいます。」

「仕方あるまい。私達が長い間此処にいるくらいなら一年や二年構わない。」

「え？博士はすぐに出しますよ。」

「……どういうことだ？」

「まあ、悪くいえば人質ですね。スカさんが逃げないための鎖です。」

必要ないと思いますが、と最後につけ加えて話を締める。

賢明なス力さんなら選択肢など初めから一つしかないことをわかってくれるだろう。

案の定ス力さんはしばらく悩んだ挙げ句、仕方あるまいと言いました承してくれました。

「して君は誰なんだい？」

「ああ、忘れてました。」

そう言つて俺は変身魔法を一時解く。身長が僅か（……ではないが）ばかり低くなった俺の目線がス力さんの目線とぶつかる。

「改めて、【黒い箱】序列無し【Joker】や【深淵】と呼ばれてる、神無月龍だ。よろしく」

そう言つて自己紹介をするとス力さんは驚いたような顔をしている。

——なに？俺そんなブサメンだった？

「まさかあの【黒い箱】ブラックボックスの参謀だったとは…。」

「ん？知ってるのか？」

「聞いたことしかないが、私のような裏の最深部にいるような者しか知らないはずだ。なんでも戦闘力だけなら裏の世界の五指に入るとか……」

……俺達結構有名だったんだな。

「それでは今から『黒い箱』の首領にでも会いに行くのかね？」

「違う。最初に言っただがこれは“極秘”だ。誰にも知られないようにやってくれ。『黒い箱』にも、だ。」

「……わかった。」

そう言っただけで、早速から貰った転移札をスカさんに渡し俺は管理局に戻るため踵を返す。

俺の計画も僅かながら前進した。

ティーゼル国  
王都『ゲイン』

「ああー、ひーまー。」

王都のさらに中枢。お城の中で少女が呟いた。

身長は約百三十センチではないだろうか？彼女は中学二年生なのだが童顔とその低身長で本来よりも低年齢に見られることが多い。

そんな少女が今自室にあるソファーに腰をかけている。

「ひーまー」

……こういった言動も相まって幼く見えるんだろうが。

「暇なら勉強でもなさったらどうなんですか？アリス様。」

少女の隣には従者（いやメイドと言った方がいいだろう。）が悠然とした佇まいで主の横に立っていた。

「勉強なんてめんどくさいじゃない。」

「またそんなことを言って……。リリス様は暇な時は勉学に励んでいますよ。」

「あー、さすが優秀な妹ね。私と違って頭がいい。」

怨めしい怨めしいと呟きながら頭をぐりぐりとソファーに擦りつける。

その時に彼女の綺麗な金髪が右へ左へバサバサと振られた。

「あらそんなこと言って。アリス様だって戦闘なら天賦の才の持ち主じゃないですか。」

王女が強くてどうするのよ。と溜め息混じりで心の片隅で呟いた。

「それに腕っ節が強い女はモテないのよ。」

そう言って少女は今度は心の片隅ではなくソファアの片隅で溜め息を吐く。

「“また” 龍様のことですか？」

「な、なになつなに言ってるのよ！！今は龍のことなんか何も言っていないじゃない！？」

「あら、いつも会話の中に龍様が出てるので、てつきり腕っ節が強い女と自分を重ね合わせて『なんで龍私を意識してくれないかな』とか思っていたのかと思いましたけど違うんですか？」

「うぐっ！」

このような会話は日常茶飯事。つねにメイドが主に勝つという図だが…。

微笑ましいことは間違いないだろう。

今日もティーゼル国は平和だった。

「ちなみに私も龍様のこと結構好きですよ？」

「あんたは私を怒らせた。」

#### その四 協力？いいえ極秘です。（後書き）

ご精読ありがとうございます！！

多国籍軍です！！

まずは地震の被害が大きい中この小説を手を取っていただきありがとうございます。

自分も地震の時に東京にいたんですがヤバかったです。

被災地の方はこれからもまた正念場だと思うので頑張ってくださいです。

本当はもっと書きたいんですがちょっと明日用事があるので失礼します。

あと駄文ですいません。

あとストーリーがごり押しですいません。これからも精進していきます。

原作設定を参考にしていきたいですが矛盾がうまれたり現実でうまれない現象があったら『作者馬鹿だなあ』と思ってスルーしてください。

さい。

それでは!!

その五 えっ！貴方って……（前書き）

連続投稿

後書きは最後で…

この小説のストーリーはごり押しです。それが大丈夫な人だけ見てください。

その五 えっ！貴方って……

さて気付いている人も多いと思うがこの『ティーゼル』国は王様が国を治める完全王政の国である。

王様が治めているといってもこの国王はしっかりと民の意見も取り入れ、なおかつ元来持っていたであろう政治力で国をどんどん豊かに大きくしていった。そういったおかげかこの国の王様は国民の評価が高くとても人気である。

だがそんな国王も人間なのだから欠点の一つや二つはある。

そしてその一つが……――

「アリスやあゝ。待っておくれえゝゝ。」

「……」

自分の娘に異常に弱い。所謂親バカというやつであろう。

金髪低身長の少女――アリスは自分の父親である『ティーゼル』国国王が今の今まで隠していたことについてが原因で怒っていた。

それはアリスが王女という身分を偽って学校に通っていたのを黙認していたことでも王様が彼女のおきプリンを食べたことでもない。

彼女の国では国王が代々【五つの城壁】を管理し守ってきた。それこそ国民や臣下、果ては“家族”にも秘密で行っていた。

そう、今のいままで……

——どうして今【五つの城壁】がここにあるって言うの！もっと早く言いなさいよ！！

もう一度言うがアリスは怒っていた。理由は自分の父が【五つの城壁】について何も言ってくれなかったことだ。

説明し忘れたが金髪低身長の彼女『アリス・B・ティーゼル』はティーゼル国の第一王女であり【黒い箱】のメンバーである。

なぜ一国の王女が犯罪組織にいるのかは割愛させてもらう。

『黒い箱』は今まで【五つの城壁】を探して数年の月日を費やしてやっと一つ見つけた。これは、決して遅いわけではなく単純にそれ程情報が出回らないものなのだ。

まあ、それだけ探してたものが自分が今まで寝食を行っていた場所にあると言われたらキレるってことだ。

早足で後ろから追いついてくる奴（国王）を振り切り自分の部屋に入る。

その時に鍵とチェーン（特別製——対父親用）を使うのを忘れない。  
一呼吸後にガンガンツ！という音と『アアリスウウ！ゴメンよお！！』という声が扉から響いてきたが私は扉に蹴りを一発お見舞いして奥の部屋に行った。

私はいつものお気に入りのソファーに寝転がり思考を加速させる。

正直情報が少な過ぎる。

事の始まりは先日王城に届けられた一つの手紙。その中身はベッタベタな脅迫文だった。

内容は難しかったのでまとめさせてもらうが『お前の城にあるロス・トロギアを渡せ。渡さないと私の兵がお前の城を攻め落とすぞ』的な内容だった。

もちろん私はそんなこと出来るはずないしと思ってたし父も胡散臭  
そうな目をしていた。

だが一緒に入っていた一つのタペストリーが父の顔を歪ませた。

そこで表されているのは魔法を司る五大元素を表した五角形。<sup>つかさて</sup>だが、  
それを否定するかのように両側の斜め上からレイピアのような剣で  
交差するように下まで貫かれていた。

これを見て父は顔色を変えた。冷静沈着、質実剛健と言われ続け  
た父がだ。

その後は管理局に連絡をとり【五つの城壁】を預け私達に事情を説  
明し（殆ど伏せていたが…）今に至る。

「ダメね……まだ情報が少ない。」

「俺もそう思っぜ。」

「!？」

返ってくるはずがない返答。驚いてそちらに顔を向けると……

「よお、アリス。」

中性的な顔立ちの黒髪短髪の子供——『Jack』の東堂<sup>とうどう</sup>逞<sup>たくま</sup>麻が笑

顔で私に片手を上げて挨拶をしてきた。

「……あんだねえ。ここは仮にも王城なのよ。」

“見つかったら斬首よ斬首”と呆れながら言う私に“アホか、科学者嘗めんな”と言う逞麻。会話が繋がらない。

「で、どうしたの？」

「……お前が調べて欲しいいつたから調べたのにそれはねえんじゃねえか？」

そう私は『黒い箱』に【五つの城壁】の情報を渡し、逞麻に色々な事を調べてもらった。

「冗談よ、冗談。で、どうだったの？」

「……まあ、いいか。じゃあ報告だ。」

そこから逞麻の調査結果を聞いた。

「ふうん。じゃあその犯罪集団がこの城を襲ってくる事はないんだ。

」

「ああ。向こうが狙ってたのは【五つの城壁】だからな。それが無い今、この城なんかどうでもいいんだろ。」

「で、なんだっけ。ほら……ウィツ、ウィツチ……」

「『魔女狩り（ウィツチハンター）』か？」

「そうそれ！そんな犯罪組織がなんで【五つの城壁】を狙ってるの？」

「知るか」

上の会話でわかると思うが私が遅麻と話してわかったことは二つだ。

一つはこのお城が本当に襲われるかだ。今は他の世界で住んでいるが此処は私の国だ。襲われるなら私も兵士と一緒に前線で戦わなければ一国の主の娘として恥ずかしい。

もう一つはあのタペストリーから誰がこんな物を送ってきたか割り出してほしかったからだ。

これも意外に簡単に判明した。なんとこの脅迫文を送ったのは裏の世界では規模も認知度も実力も最上級である組織『魔女狩り（ウィ

ツチハンター』と呼ばれるところであった。

「【五つの城壁】は回収出来そう?。」

「無理だな。管理局内に入った時点で諦めるべきだ。……と言いた  
いんだがなぜか管理局が【五つの城壁】をこの王城に返すらしい。」

「……はあ?。」

管理局がロストログアを回収せずに元の場所に戻す?そんなこと聞  
いたことない。

それは逞麻も同じらしく困惑した顔をしていた。

「なんでまた?。」

「さあ知らねえ?管理局は【五つの城壁】を手元に置きたくねえん  
じゃねえの。」

——確かに考えられるけど……

そうして私は一つ疑問を感じる。

「そういえばなんで私達【五つの城壁】を五個も集めてるの?。」

「はア?。」

逞麻は振り返った。

「いや、だつてさ。“私達の目的”ならともかく“ウィルの目的”なら【五つの城壁】一つで足りるじゃない？だからなんで…かな…  
…」

なぜか逞麻の目が私が話しを進めることに冷たくなる。

なぜ？

「お前、龍の話し聞いてなかったろ。」

「え？」

「だから、確かに【五つの城壁】は死者を黄泉がえらせれるけど魂までは戻せない。一番最初に言つたろ。」

……確かに聞いたような。

「だから【五つの城壁】を五個集めて【理崩しことわりくず】の……」

そこまで言つと扉の方から『誰かの声がするううう！逢い引きかあ  
あ！！逢い引きなのかああ！！』という父の叫び声がある。

どうやら声が聞こえたようだ。

「ん？ ばれたかな。仕方ない……逃げるか。」

そう言っただけで、麻は朱色の本【魔女の書庫】を出す。

【魔女の書庫】は本体に蓄えられた魔力を使い光りを放った。

「じゃあ俺は一回アジトに戻るからな。」

「ん、わかったよ。」

そう言っただけで手を振る私。

だが、ふと久しぶりに皆で買い物したいなという願望が生まれてしまった。

——うん、たまにはいいだろう。

そう思った私はすぐに提案した。

「久しぶりに私とイヴと麻で買い物行こうよ」

「……いいけどなんでまた。」

「え？だって

たまには“女の子三人”で買い物もいいじゃない？」

此処はティールゼル国の王都ゲインの城下街

そこでクマのぬいぐるみを持った一人の少女が  
沢山の人の波に飲まれ右に左に、と揺られている。

「ふみゅ」

「……大丈夫？」

クマのぬいぐるみを持つ少女は目を回し、フラフラと千鳥足で少しずつ前に進む。

「ていうか見失っちゃたね。どうする？」

「……管理局本部に行こう。」

「え！？カチコミするの！？」

その問いに少女はコクつと首を縦に振った。

クマのぬいぐるみはそれに対して呆れたような表情（ぬいぐるみに表情はないが……）をしていたが……

そしてまた歩き出す。

だがその途中でぬいぐるみはある事に気付いた。

「そういえば管理局の場所知ってる？」

「……知らない。」

フルフルと今度は左右に首を振る。

「……………どうするの？」

「……………あの人に聞こう。」

長い沈黙の後ちょうど前からきた二人組の女性に声をかけた。

「……………すみません。」

「あら、私？」

「……………はい。……………少し道を教えてほしいんですが。」

「いいわよ。どこに行きたいの？」

「……………管理局の本部なんです場所がわからなくて。」

「まあ！ちょうど私達も今からそこに行くのよ。どう、一緒に行かない？」

「……………いいんですか？」

「別に構わないわよ。」

「……………なら、お願いします。」

「決まりね。私はカリム・グラシア。こっちは……」

「シャツハ・ヌエラです。」

二人組の女性が少女に挨拶してくれた。一人は金髪の物静かそうな女性もう一人は活発そうなショートヘアの女性だった。

少女はこんな優しい人がいるんだなと思いながら自身も挨拶をする。

「……丁寧に。私の名前は……」――

## その六 予言

あれから三日たった。

つまりこの世界に来て四日目。

どうやらウィル達が追っ払った奴らに仲間がいて報復されないようにする対策らしく、俺達はひとまず管理局に寝泊まりすることになった。

自分の身を守るようにと戦闘訓練にも参加させられた（兵吾は自発的だが……）。

そして今はなぜか俺達はスターズ&ライティング対俺達三人＋凜で模擬戦をしている。

「兵吾とウィルはエリオを確実に潰せ！！凜はスバルを牽制！ティアナは俺が抑えとく」

「わかったよ」「いいぜええええ！」「わかりました。」

作戦なんて難しいものはない。指示したのは二人で一人を確実に倒せということ。

ちなみに俺は前に出て白兵戦っていうタイプじゃなく後衛で補助するタイプでFW陣でいうフルバックだ（俺専用のデバイスがあれば白兵戦も出来なくはないが…）。

「ふはっはハハは！エエリイイオオくううん！！ああそびいいましょおおお！！」

「……どうしよう、りゅうやん。僕、これ（兵吾）制御出来る自信がないんだけど。」

……兵吾キメエな。ウィルは………ドンマイ。

「エリオ君！！」

「スバル先輩行かせませんよ。」

こちらではスバルと凜が相対していた。

魔法で身体強化をしたのだろうか？身体全体を淡い赤のオーラみたいなのが凜を包んでいた。

そして一瞬で俺の視界から消えたと思ったたら次の瞬間にはスバルの前で腕を振りかぶっていた。

——あれ？確かアイツ魔法主体ってさっき聞いたから遠距離だと思っただけど……。万能距離<sup>オールレンジ</sup>か。さすが冴姫家の跡取り天才的だな。練度もスバルに引けをとってないほど高いし。

と考えて俺もティアナに意識を戻す。

ぶっちゃけキャラはスルーした。キャラもフルバックだから本当は一番初めに潰したいけどティアナがそれを許すとは思えない。

なので数の均衡が崩れた瞬間に攻め立てるつもりだ。

「へえ、貴方少し戦術学でもかじってるの？いきなりニオンなんて……」

「まあ、それなりにな。」

ティアナが俺に聞いてきたが『黒い箱』<sup>ブラックボックス</sup>のメンバーはなぜか突撃思考が多いからな。こうやって戦い方考えないと効率が悪いんだよ。

俺はそこまで考えて学園配布のデバイスを使い、魔導杖を出現。同時にバリアジャケットも展開する。

男の着替えは見たくないだろ？だからそこは割愛。

「でも戦術学かじつても実力はどうなのかしらね？」

「はっ！ いっちょ前に挑発ですかあ？ 黙ってかかってこいよ三下が  
あー！」

一方さんマジばねえっす。

Sideフェイト

「やっぱりすごいな……。」

私達隊長陣は皆の模擬戦をモニター室で見守っていた。

「そうだね。 フェイトちゃんがすごい勧誘するだけあって基礎も良  
く出来てる。」

“鍛えがいがあるね”となのはは嬉しそうに言った。

今日の模擬戦は実戦経験がないウィル君達がスターズとライトニ  
ング相手にどのくらい戦えるかを見るために用意したものだったの  
だがウィル君の格闘センスと兵吾君の突破力で徐々にティアナ達を  
押していった。

「……」

「？ とうしたの、はやて？」

はやてが何か眉根を寄せてモニターを食い入るように見ていた。

「なあ、フエイトちゃん、なのはちゃん。龍君見て何か思わへん？」

「龍君？」

モニターに視線を戻すと龍君がティアナを中距離魔法で釘付けにしていた。

その後も龍君は無理せず中距離魔法で攻撃。他の人が危なくなったら補助魔法か攻撃魔法で援護していた。

「特に不思議な事はないんじゃないかな？上手く皆の補助もしてるし攻撃魔法も悪くないけど……ただ積極性に欠けるかな。」

「私も最初そう思ってたんやけど……。」

ここで最初二対一で戦っていたエリオがついに墜とされた。

次に龍君はウィル君達に“キャロを狙え”と言って攻撃を続ける。

「なんか私達のデータを取っとる感じがするねんけど……。」

「龍君が？」

「流石にそれはないんじゃないかな。」

「だとなえけど……」

そこまで言つてモニターから声が聞こえた。

『キャラ口ちゃあああん！こわあくないよおおー！ぐっへへへ。』

『いやあああああ！！』

『もうやだこの人。』

「……それよりも模擬戦止めない？」

なのはが呟くよりも早く私はキャラ口を助けに行った。

Side 龍

あの模擬戦は結構俺達が押していたんだが兵吾が爆発的にキモくなつたので中止。

俺が兵吾に肉体言語での O H A N A S I をしてあげてキャラ口は事無きを得た。

「りゅうちゃん、これ（兵吾）どうする？」

「生ものは魚の餌でいいんじゃないか？」

「んゝ、わかったあ」

ウィルは黒いゴミ袋に生ものを入れて海に向かった。

——……行っちゃった。

冗談半分だったんだけど……まあ、今更気にしてもしょうがないか。

半分無理矢理に考えを変え管理局を歩きだす。

ちなみにスカさんの脱獄はばれてない。俺がちょっととした細工をして身代わりを立てたからだ（ちなみに俺と面識ゼロの人）。

「あつ、龍さん。」

ちよつと考えて歩いていたらだろうか？目の前のFW陣＋凜に気付かなかった。

「おうっ！ビックリした。お前らか……」

「そんな驚かないで下さいよ。龍さんはこれからどこに？」

凜が一步前に出て言う。

「今から飯食いに行こうと思ってるだけだな。……あつ！キヤロ、さつきはゴメンな……兵吾が馬鹿で」

「いえっ！気にしてないですから謝らないでください。」

——優しいな。俺ならボコる……兵吾を。

コイツらも昼飯を食べに行くところだったらしく俺も一人で食べるのは寂しいので一緒に食べる事にした。

夏場と言うこともあってか陽射しが強く夏バテしそうだったのでそうめんを食堂で注文した。……のだが

「……お前ら食べ過ぎだろう。」

これはスバルとエリオにかけた言葉だ。

コイツら俺と同じようにそうめんを頼んだんだが量が違った。もう山盛りを越えてる。名付けるならまさに小宇宙<sup>コスモ</sup>。

うっぷ、吐きそう。

「そんなに食べると太るわよ。」

これはティアナのセリフ。ちょっと棘がある言葉だ。

「ええ、別に私は太らないけどなあ。」

「僕も別に太るって感じませんが。」

成長期ですね、わかります。

そんなこんなで話していると前から隊長、副隊長それに知らない女性  
性が二人こちらの方に歩いてきた。

それに気付いたFW陣は立ち上がり敬礼。六課の部隊長八神はやて  
は“座ってええよ”と一言言った。

「食事中にごめんなあ。実はちょっと聖王教会の人達が来て下さっ  
て皆を見たい言うてな。」

そう言う後ろにいた金髪女性と紫っぱい髪？の女性が前に出てき  
て挨拶をした。

悪いけど挨拶部分カットな。他のFW陣は知っていたので俺だけ自  
己紹介したんだから。

「それで本題なんやけど……説明してもらってもええか？」

「わかりました。」

はやての言葉で聖王教会の騎士『カリム・グラシア』は説明を始めた。

「実は私の希少能力<sup>レアスキル</sup>【予言者の著書】で気になるものがありました……」

「それがこれです。」

カリムの横に控えていた紫っぱい？髪をしている修道騎士——『シヤツハ・ヌエラ』が一枚の小さな洋品紙をだす。

ていうか

「なあ、【予言者の著書】<sup>プロフェーティン・シュリフテン</sup>て何？」

隣にいるティアナに小声で聞く。彼女も俺がわからないことを考慮して説明してくれた。

曰く【予言者の著書】はカリム・グラシアのレアスキル（これは聞いた。）で詩文形式の古代ベルカ語予言能力であり、その解釈難易度の高さから『良く当たる占い』程度にしか考えられてないらし

い。

——こんなレアスキルまであんのかよ！

希少能力は有り得ない現象を起こすって聞いていたけどコレは非現実的過ぎるだろ！！

「もうよろしいですか？」

「はい！お願いします。」

どうやら俺達を待っててくれたらしい。カリムは笑って説明を続けた。

「予言の内容はこうです。」

『五つの光り輝きし錠前じょうまえを求めし者達。彼らは全ての錠前を巡り血で血を洗うだろう。』

しかし、それは全て意味が無い。なにせ最期は全て消えてしまうのだから……』

……まだコレは途中です。今は全て解読するように尽力しています  
が……この予言は当たっているかどうかともわかりませんが一応知つてもらうために今日は来ました。」

「『血で血を洗う』って……物騒やな。」

そう言うのは、はやて。やはりこの占いは信じられているのだろう。苦い顔をしている。

「そうですね。あとこの『光り輝きし錠前』って【五つの城壁】ランパレットじゃないですか？なんか形が鍵ですし。」

「スバル、あんたねえ。そんなわけないでしょ」

「こらティアナ。駄目でしょ、そんなこと言ったら。」

スバルを馬鹿にしたティアナを注意するのは。さながら娘を叱る親……いや、妹を叱る姉かな？（外見的に）

「私は龍君の意見を聞きたいんやけど……」

「俺……ですか？」

はやてに意見を聞かれる俺。今までウィルが兵吾が喋ってたから面と向かって喋るのはコレが初めてかもしれない。変な言葉使いになっってしまった。

「別に龍君は管理局員やないんやし敬語じゃなくてええよ。」

「そうか。じゃあお言葉に甘えて……といってもはつきり言っただけだ。もう少し情報があればいいんだけど……。」

「さよか……」

“さよか……” じゃねえよ。

「まあ、それが普通やね。無理言ってごめんな。」

「ん。気にしないでいいぞ。」

まあ、はっきり言ってその予言は当たってるし、予言の『最期には  
全て消えるのだから』っていうのはいい表現だな。

---

「そういえば……」

カリムはその精悍な顔を俺達に向け問い掛ける。

「クマのぬいぐるみを持った紫髪の少女を知りませんか？」

——知りません。



その七 闘いと躊躇いと少女（前書き）

最後です。

## その七 闘いと躊躇いと少女

僕——フェンディ・ウィリアムは今、兵吾っちを捨てようとしたが逃げられてしまった。

仕方なく僕は管理局の中を歩くことにした。

青々と光る草花がざわざわと風に揺られる。ある程度歩くと前からクマのぬいぐるみを持った少女が歩いてくるのが見えた。

「どうしよう。カリムさんとシャッハさん見失なっちゃたね？」

「ふみゅー」

……なんかぬいぐるみと会話してるような気がするんだけど。

なんにしろ小さい子を置いてくなんてできないので近づくことにした。

「君どうしたの？」

僕が少女に声をかけると少女は弾かれたようにこちらを見た。若干驚いた顔をして僕を見つめる。

——ん？僕の知り合いかな。いや、でも記憶に無いし…。

そこまで考えると少女は抑揚のない声で“……道に迷った”と言った。

とにかく思いだすより少女を送ろうと思った僕は少女に聞き返した。

「そうなんだ。どこに行きたいの？」

「……んーと、襲ったら一番被害が出そうなところ。」

「……は？」

「……え？」

聞き間違えかな？なんかすごいこと聞いたんだけど…

「……貴方は【五つの城壁】を奪わないの？……『黒い箱』の『King』、フエンディ・ウィリアム。」

「……！」

ざっとその場から退避。

急いでデバイスを起動させる。

「……」

「……安心して、戦うつもりは無い。……ただ聞きたかっただけ。」

少女の真意はわからない。だが確かに戦う意思はないようだ。

「……三日前に僕たちを襲ってきたのは君の仲間？」

とにかく少女が戦いたいののかどうかは別にして情報を集めることにした。

その質問に少女は小さな首を左右に振り答える。

「……違う。あれはただの人形。……仲間じゃない。」

「……ふうん、そう。」

少女からの答えは頭からネジが何本か外れている答えだったが少女が“裏の世界”に住んでるなら別段不思議ではない。むしろ裏の世界では正常な奴の方が珍しい。現に僕も……いや、僕たちもおかしいことは自覚している。

「君は【五つの城壁】を集めるの？何のために？」

「……それは貴方達と同じ。この世のしがらみを断つため。」

“……”って博士が言ってた。  
”と、少女はゆっくり呟いた。

「……貴方はなんで管理局なんかにいるの？」

「僕も色々あるんだよ。」

「……色々ね、貴方はそんな曖昧なものでここにいるの？」

——失礼な。今回ここに来たのは偶然の産物だよ。

そう思っていたが少女が“それに”と続けた言葉が僕を変えた。

「……貴方はいいの？十年前のあの日から——ううん、貴方の母親が“フェイト・T・ハラオウン”に負けたあの日から貴方達は管理局員に中傷と侮蔑を——……」

「グリフォン！！」

《All Right》

頭が真っ白になった気がした。幸い辺りには誰もいなくグリフォンを起動しても問題なかった。

でも僕はたとえこの場に他の人がいたとしてもグリフォンを使っていただろう。

僕の右手に青色の柄をもつ西洋剣が展開された。

今、頭にあるのは少女が誰かということでもなくて十年前のことを

知っていることでもない。

ただ少女を殺すこと。

僕の頭には“僕から話した”以外で十年前の話を知っている奴はイコールで殺さなきゃいけない奴となる。

感情が高ぶる。

思考が加速する。

少女は相変わらずその場に立っていた。だが少しさつきと違う部分がある。

持っていたクマのぬいぐるみが光っていたことだ。

「……ベアー、セツトアップ」

「任せて！」

少女の服が一度粒子に変換される。粒子に変化した彼女の服はバリアジャケットとして再構築された。

白のゴシックドレス

だがそれよりも目に入っただのは両手につけられた鉤爪にリールが付いている不思議なものだった。

少女が軽く一振り腕を振るう。次の瞬間キラッと一瞬の光りとともに僕のお腹から肩口の部分までばっさりと切られた。

「ぐっ!？」

「……くすっ。」

致命傷にはならなかったものの結構痛い。それよりも困るのが今の技が“なんにも見えなかった”ことだ。

早いという感じではなくどちらかというなら不可視の魔法がかかっているのだろう。

少女は微笑を浮かべ言う。

「……貴方ほどの人が、こんな安い挑発に乗るなんて。よっぽど自分の母親のことが好きなのね。」

「だまれえええええ!!」

気に食わない。ムカつく。さまざまな負の感情が渦巻いているのがわかる。

僕は何も考えずに突っ込んだ。

剣の柄を両手で掴み上段から振りかぶられ勢いをつけた剣撃はあっさりと避けられた。

繰り出す次撃。コレは右に避けられると同時に右足での側頭蹴りのカウンターを貰う。

苛立ちが募る。思い通りにならなくてムカつく。子供みたいだとも思ったけど別にどうでもよかった。

「グリフォン！」

《Load Cartridge》

ガシュツと機械的な音とともに薬莢が三つ排出された。

「願え、安らぎを。誓え、神への忠誠を。我は神の代行者。」

《execution: cleanse azure flame  
of sin（執行：罪を清める青い焰）》

僕が使える中では珍しい武器付加型の【断罪魔法】。その中でも最強に属する魔法だ。

剣の周りに青白い光りが纏った。どこか神々しさを纏う僕の最強の剣だ。

「……詩文による詠唱と古代ベルカ語の魔法名。…これが【断罪魔法】。」

少女はどこか焦った風な顔になると苦々しく言った。

僕は剣を構える。少女も戦闘体制になった。

二人は同時に走り出した。

S i d e  
龍

「ん？」

いきなりだが六課のFW陣と俺は聖王教会の騎士カリムから紫髪のクマのぬいぐるみを持った少女『アダム・マリオネット』を探してくれ。と頼まれて皆でばらばらに探すことになった。……んだけどなあ。

「また、めんどくさいことを……」

一応魔力には敏感な俺は今現在ウィルが誰かと戦ってることに気付いた。

「管理局で面倒事を起こすなよ。」

はあと溜め息とともにウィルの座標を特定し、ウィルを中心に音を遮断すると同時に隠蔽の効果がある結果を発動させた。

ちよつとやさつとじゃ壊れないしバレもしない便利な結果だ。

ここでウィルが【断罪魔法】を使いそれを誰かに見られたら全てが台無しになるので仕方なしに俺は戦いのある場所に向かった。

S i d e ウ イ ル

僕の剣が発光し辺りを青い聖炎が対象を燃やし尽くそうと迫る。

だが少女は腕を振るう。それだけで土が盛り上がり聖炎から守った。

——なんとなくわかってきた。多分少女が使っているのは極限まで細くした鉄系かなにかに、さらに不可視の魔法をかけて使っている。

所々で光ることと鉤爪についてるリールがその証拠だろう。

怒りを無理矢理内側に貯め冷静に対処しようと頭をフル稼働させる。

ならこの魔法もあんまり意味が無いのだがその状態でさらに剣が何本にもわかれた。

これは飛行廷を襲った時に使ったグリフォンのスキル。今回はそれに【断罪魔法】を併用した。

青い聖炎を纏た何本の剣が僕の周りを回る。

——いくら周りの土を使い防御してもコレなら防御ごと貫ける。

そう思った僕は一斉に少女に剣を落とす。一つ一つの剣がまるで彗星の如く降り注いだ。

【AMFVer3】

その無機質な音とともに少女の右目が突如金色に光り輝いた。そしてその視線にある剣は、纏っていた聖炎を消し地面に落下した。

——これはイヴの右目と同じ……——【AME】！！

そこまで考えると僕は少女の右目の視界から外れようと跳んだ。

この【AME】。通称アンチ・マギリング・アイは【AMF】をもとに開発された対魔法の消滅兵器だ。

魔力消滅濃度はイヴの【AMFVer2】の五倍から六倍とイヴ自身から聞き戦慄したのを覚えている。イヴの【AMFVer2】は

エースオブエース『高町なのは』のバリアジャケットをゼロ距離で  
だが破るほどのものだ。

それを考えればこの【AME】の凄さがわかるだろう。つまりこの  
視界内に入った魔法は例外なく、それこそもちろん僕のバリアジャ  
ケットと【断罪魔法】も消えるだろう。

そう思った僕は戦術を変えた。

地面に刺さった剣を盾に少女に近く。その時に一本引き抜き二刀流  
で攻める。

「はあああああ！」

「なっ！」

どうやらこんなに早く対応してくるとは思わなかったんだろう。少  
し対処が遅れていた。

そこを見逃す僕じゃない。

一気に両手の剣で少女の鉤爪を壊しそのままマウントを取った。だ  
がその時に抵抗されないように右腕に剣を刺す。

【AME】の弱点は物理攻撃に弱いこと。イヴの時は近付けなかつ

たがこの少女はまだ立ち回りが甘い。実戦経験が少ないのだろう。

「……どうして？」

右腕から流れる血が痛々しいがそれについて全く顔を変えずに聞いてきた

この質問はどうしてこんなに早く対応できたか聞きたいのだろう。

「ちょうど君みたいな女の子がいるからね。」

口調は普通だが内心はまだ殺さなきゃいけないと思っている。だから首に剣を突きつけた……………のだが

「……私みたいな？」

この子はマウントを取られた状態で首を傾げた。

——この子殺されることが考えてないのかな？  
なんか凄い毒気抜かれるんだけど…。

それでも僕の中での公式は変わらない。

「じゃあゴメンね。……死んで」

「……」

そう言う少女はやっと自分の状況を理解したのか暴れ出した。  
しかし自分の右腕が地面と剣で縫われているのでどうしようもない。

僕はそのまま剣を降り上げて……

「……死にたくない。」

ぼつりと呟いたその言葉を聞き手を止めてしまった。

S i d e  
龍

——おお、凄いねあの子。『アダム・マリOTT』だっけ？

戦闘力も高いしなにより能力がいい。イヴと同じスペックだけど今回は経験が足りなかったかな？

それにウィルはいつもイヴと模擬戦してたから対処法もバッチリだったし……

「……死にたくない」

あ、ウィル躊躇ってるな。

まあ、いつも俺達の前では“母様を馬鹿にしたやつを殺す”って  
言ってたけどあいつはこういうこと事態初めて……

まだ覚悟が足りなかったんだろう。もしくは殺すこと事態が間違っ  
てると思ったか。

まあ、まだ人は殺せないだろう。こんなところで壊れても困るし……

「おい、ウィル。」

「……りゅうやん、いつから居たの？」

「中盤からだ。それと、お前はもう管理局内に行っとけ。」

そう言つとウィルは苦痛を伴つたような顔で反論した。

「でも、りゅうやん。僕はこの子を……——」

「いいから言うことを聞け。お前をまだ“壊れさせる”わけにはい  
かないんだよ。それに結界内をグチャグチャにしゃがって、片付け  
るこっちの身になれってんだ。」

「……わかったよ」

俺の前半の言葉の言外に“お前に殺しは早い”と言う意味を含ませてウィルに言う。

ウィルはそれに渋々ながら頷いてくれた。

ウィルが立ち上がる前に俺がアダムにバインドをかけ身動きが取れないようにする。ウィルはそれを見ろといそいそと管理局に向かって歩いていった。

ウィルが完璧に見えなくなり辺りは静さを取り戻す。

——それにしてもこの子痛覚が無いみたいだな。  
アダム

ある意味よかったかな。いくら俺でも流石に痛がる女、子供殺すのは気が引けるし……。

「ああ、期待させてゴメンな。俺は【五つの城壁】を狙う奴に容赦しないんだ。」

「！？やだ……死にたくない。死にたくない！」

シャドウを起動させ俺の手に黒い片刃の刀が装備された。

それは少女<sup>アダム</sup>から見たら自分の命を奪う死に神に見えたかもしれない。

「……嫌だ、死にたくない！死にたくない！！死にたく……——」

「せめて痛みが無いように……」

振り上げられた黒刀はなんの躊躇いもなく少女の首に落とされる。

トサツと“何か”が地面に落ちる音がした。辺りに血の雨が降る。

「……【五つの城壁<sup>ランバレット</sup>】か」

その中で佇みながら俺は少女の亡きがらに黙祷を捧げた。

---

「あっ、りゅうさん！こんなところにいたんですか？」

「ん？ああ、騎士カリム。」

「普通にカリムでいいですよ。それよりアダムちゃん見つかりました？」

「ああ、紫髪でクマのぬいぐるみを持つ少女だった？」

「そうですけど……」

「残念だけど“見なかった”な。もう帰ったんじゃないかな？」

「そうですか、はぐれてしまって心配だったんですけれど……」

「あっ！そういえば……」

「うをつ！ティアナと愉快的FW陣！？」

「なによそれ……それより、なんかウィル君が暗かったけどなんか知ってる？」

「……おはよう。」

## その七 闘いと躊躇いと少女（後書き）

ご精読ありがとうございますー！！

多国籍軍です。

今回投稿した小説のテーマは一番最初から

『ちよつとした説明と伏線』『これからの暗示』『ウィルの弱さ、龍の狂気』

です。

最初の逞麻のところは伏線が少なかったからちよつと残念です。…でも皆さんはもうわかりますよね？（伏線というか事実露呈というか……）

次に予言の方は、これから起こるロストロギアを巡る闘いが激しくなる……のかなあ？作者自身わかりませんがそのようなことを表現したかったです。

最後のウィルの弱さ。これはウィルが自分の考えに疑問を持ち目的のために人を殺せない……つまり意志の弱さを表現したかったです。

龍はそれとは逆に自分の目的のためなら殺しを厭わない……本来ならウィルと対比して強さと書くべきなんですけどここでは狂気と表現したかったです。

ちなみにこの狂気は後々使います。

本当駄文ですみません。

三月中に一部終わらせたいけど無理かな？

まあ、がんばりますので

お願いします!!

その八 悪に永久の眠りを……（前書き）

すいません、今回単発です。

## その八 悪に永久の眠りを……

一人の少年が女性に手をひかれて道無き道を歩き続けている。

わかってる、これは僕の夢。明晰夢ってやつだっけ？

朧げな意識の中、必死で脳を使い意識を定めようとした。

それにしても淋しいなあ。夢じゃなきゃ死んでるはずの母様と  
手をとって歩くことは出来ないからねえ。

『ねえ、母様？どうしてジクウカンリキヨクをやめちゃったの？』

ああ、幼い頃の僕はなんて無知なんだろう。その場にいたら、ぶん  
殴ってでも喋らせなかったね。

『……それはね、ウィル。私が弱かったからよ？管理局にいられな  
い程、心も体もね。』

『？母様はココロもカラダもツヨいよ。』

『ふっふふ。ありがとう、ウィル。』

当時の僕はわからなかったけど改めて見ると母様の無理にした笑顔

がハッキリと見て取れる。

……《そう、これは僕の過去》

僕の母様『エルディ・ウィリアム』は昔、管理局に属する管理局員だった。ちなみに父様は知らない。母様がいればよかった僕は興味もさほど湧かなかったしどうでもよかった。

だが父様の家『ウィリアム家』は僕の主戦力にもなる程の力をもたらししてくれた。

#### 【断罪魔法】

その強力な魔法を有する『ウィリアム家』は古参の良家として有名である。だがそんなウィリアム家にも昔から大変な問題があった。

それは子宝に恵まれないということだった。

『継承魔法』を受け継いでいる者の運命なのかどうかはわからないが、継承魔法を一子相伝で受け継がせるウィリアム家はどうしても二人以上の子供が産まれない。

そして古参の良家といっても分家などがあるほど大きい家ではなく時代の流れとともに確実に衰退していった。

そんな中、僕の母様は歴代の【断罪魔法】の所有者の中で一番と言ってもいい程力をもっていてその力を誇りに思っていた。

だけれどその力を持っていた母様は人を見下す癖があつた。……いや、今思うとあれは『ウィリアム家』が舐められないよう作られた性格だったのかもしれない。

そんな僕だつてわからないものが他の人達にわかる訳もなく母様が所属している管理局内では『実力はあるが傲慢な厄介者』として見られていた。

それでもそれなりの地位があり実力があつた母様に文句や不満はなかった

……—あの時まで

『あら、貴女が犯罪者の娘？』

今から十年前まだ管理局に母様がいた時期にそれは起こつた。

『え？』

『貴女に言ってるのよ。それともクローンって他の人間より器官が低いのかしら?』

『貴女は誰なんですか?いきなりフェイトちゃんになんてこと言うんですか!今すぐ謝ってください!』

『あら、いやよ。なんで私がこんなクローン(出来損)ないなんかに謝らなくちゃいけないの?』

母様は管理局内で少し不安定な時期があつた。追っている秘密組織『魔女刈り(ウィッチハンター)』の情報がまったく出てこなかったからだ。

そんな時に管理局にきた力モ。母様はストレス解消程度に考えて言ったのだろう。だけどそれはなのはさんや、はやてさんから見たらとても感じが悪いし、いくらなんでも言いすぎだ。

『いいよ。なのは、はやて。本当のことだから…。』

『せやけど、フェイトちゃん!』

『それに関西弁の貴女も一応犯罪者じゃないのかしら?』

『!?!?』

クスクスと笑い母様は立ち去ろうと背を向ける。

『——てください。』

『ん?』

『謝ってください! 私のは馬鹿にしてもいいけど私の友達を馬鹿にするのは許せない!』

母様は大人しい子だから反論されることは考えていなかったのだろ。少し面を喰らったような顔をしたが、すぐに顔を戻す。

『なら明日模擬戦をしましょう。それでどっちの立場が上かわからせてあげるわ。』

『——わかりました。』

『『フェイトちゃん!?!』』

『……ふん。明日が楽しみね。』

そう言っ母様は去っていった。

『——そういえば、あの人名前言ってない。』

『『あっ』』

最初に説明したと思うが母様は管理局内での実力は上に位置して『エース』と呼んでも語弊は無いだろう。

片や相手はまだ十歳そこらの少女。数でこそ三人だがそこまで脅威ではない。

その油断と彼女達の地力の強さ。その二つの要素が噛み合いソレは起こった。

『ゲームオーバーね。』

“青い柄”の西洋剣を持つ母様。その切っ先をなのはさんとはやてさんに向ける。

やはり模擬戦は圧倒的だった。元来、近接戦闘に自信があった母様は、ウィリアム家に嫁入りした事によって得た【断罪魔法】という強力な遠距離攻撃手段と組み合わせ一切触れさせもなかった。

だが……――

『ああああああ！！』

『なっ！？』

《Photon Lancer Phalanx Shift》

後ろの物影から隠れていただろうフェイトの不意打ち。

直後唸る光玉。

百以上のソレは不意打ち気味に母様を襲う。とつさに魔法障壁を張るが即席の魔法障壁では耐えられるはずもなく直撃を受け吹き飛ばされた母様は簡単に意識を失った。

そう“負け”てしまった。

別に不意打ちで負けても 負けは負けだ。エース級に勝った三人の少女は称賛され褒め讃えられるだろう。

だが母様は？

いつも傲慢な態度をとった母様は？実力があるとされていたが新人の三人の少女に負けてしまった母様は？

答えは火を見るより明らかだろう。

母様の管理局での立場は低くなった。以前のような発言力はなく、一般の管理局員と同じくらいだろう。

実力があつた母様はそれを許さなかった。

自分の家柄と実力に絶対の自信があつた母様はつねに『ウィリアム家』の名声を考え行動していた。その母様の発言力が弱くなることは『ウィリアム家』の家柄の低下を招くと思つたんだろう。

それに問題はまだあつた。母様の今までの態度に腹を立てる人物が母様に間接的だが嫌がらせを行ってきたことだ。

今までそういった人物は母様の力を見せつけ黙らせてきた。しかしさきの模擬戦で勢いづいた何人かが行っているのだろう。自分が勝つたわけでもないのに…。

そついったことが幾重にも重なり母様の精神を擦り切らせた。

精神にも強弱はある。精神が強い人はいざという時に感情が揺れないために落ち着いている。しかし精神が弱い人は、なんでも必要以上に考えてしまいいつも最悪の結果を考えるのだろう。それじゃあ出来るものも出来なくなる。

案の定と言つべきか、その時から母様の任務成功率は五割をきってしまった。

管理局としても実践がともわなくなつた管理局員などいらぬ。ましてや母様は『実力はあるが傲慢な厄介者』だ。実力が無くなれば只の厄介者。そんな人を管理局がいつまでも手元に置くわけもなかった。

それでも母様は管理局に辞めさせられるくらいなら自分から辞めてやると言つて長年続けていた管理局生活に終止符を打った。

今まで管理局内に住んでいた僕と母様はそこを追ひ出され実家に向かうため時空廷に乗り込んでいた。

『ねえ、母様？どうしてジクウカンリキヨクをやめちゃったの？』

僕のその質問に母様は悲しそうに俯いた。

『……それはね、ウィル。私が弱かったからよ？管理局にいられない程、心も体もね。』

『？母様はココロもカラダもツヨいよ。』

『ふっふふ。ありがとう、ウィル。』

だけど僕らに救いはなかったみたいだ。

実家に帰ってから安息の地はなかった。ウィリアム家にも今回の失態は届いていたらしく全員が全員同じことを言った。「恥晒し」と……。

母様は長年ウィリアム家のために尽力していた。そのことを認められずに身内から中傷されれば傷付くだろう。

母様の心は病んでしまった。それだけ母様にとってウィリアム家というのは大きいものだったんだろう。

それから八年たった。

今や病院で寝たきりになってしまった母様は昔の面影がなく非常に弱々しかった。

ストレス性のなんとか。詳しい名前は覚えてない、けど命に関わるというのは聞いていた。

——どうして？なんで母様がこんな目にッ！？

「そこにいるの、ウィル？」

母様はその弱々しい口を開け僕の名前を呼ぶ。目も既に見えなくなっているらしい。両目は開いてはいるが目の焦点があっていない。母様は何も見えない中僕を呼んだ。

「……いるよ、母様。」

僕がそう言つと母様は嬉しそうに言った。

「よかった。私はね……もう長くないわ。」

何が？とは聞かない。それは僕も医者から聞いていたことだ。

「そんなことないよ、母様！！大丈夫、絶対僕が助けるから！！だからそれまで……」

「いいのよ、ウィル。自分の身体だもん、わかるわ。だから私の話を聞いて。」

僕はその言葉を聞いてグッと押し黙る。

「ありがとう、ウィル。」

「……いいんだよ。それより話って何？」

僕がそう言つと母様はまるでこれから何を言つのか、少し間を置き話だした。

「貴方にウィリアム家を守ってほしいの。」

——なんで？母様はウィリアム家に見離された。現にこの八年間お見舞いに來たウィリアム家の人はいない。

そんなところをどうして！？

「ごめんね……私はこの家を守らなきゃいけなかったの。代々受け継がれたウィリアム家を……。それが私とあの人との約束だから。」

母様の強い言葉。そこに迷いは無く明確な意思だけがある。

あの人というのは僕の父様なのだろう。ここまで母様に思われている人が今いないのが残念だと思った。

「わかってるよ、母様！だからこれからも僕と一緒に……」

「……違うわ。言つたでしょう？私は長くないわ……。これからは貴方だけで守るの、ウィリアム家を。」

そう言つて母様は僕の手を自身の手で優しく包みこんだ。

「貴方はまだ小さいのにこんな大変なことを頼んでごめんね。本当に私が不甲斐無い（ふがいない）ばかりに……」

「そんなこと無い！！母様は世界一頼りになるから……だからそんなこと言わないで。」

「……ありがとうウィル。」

そう言つた直後、母様はゆっくりと目を閉じていく。

「ウィル。出来ることなら私はもっと、貴方たちとあ、そびたかつ……た、なあ………」

ピー——つと機械特有の甲高い音が鳴り響く。

その音を聞き付けたのか白衣を着た男が危機迫る顔で母様に近づき、後から来た看護婦に指示を出す。

「心配しないで。僕が必ずウィリアム家を守るし母様の敵を討つか  
ら……」

夕暮れが辺りを照らす中、僕は母様の亡きがらを前にして折れぬ  
誓いを立てた。

母様をここまで追い詰めた奴等は全部悪だ。  
それなら……

——全ての悪に永久とわの眠りを…

今、母様の形見であるデバイス『グリフォン』を手に、歩きだそ  
う。

---

朝の光がカーテンの隙間から洩れ僕を照らしている。それのおかげ

なのか僕は比較的スツキリと起きられた。

「ん」。昔のことを夢に見るなんて久しぶりだなあ」

——それに昔の誓いも思いだした。

伸びをしながら冴えた頭で思考する。こつち（テューゼル国）に来てから六日目の朝。管理局内での簡易ベッドは硬い気がする。身体が痛い。

多分昔の夢を見たのはあの時の迷いのせいかな？今までいつかこういう日がくるのはわかったのに目的のために誰かを殺すのを躊躇っちゃった。

まだ人を殺したことはない。今まで殺さなくても僕に実害がなくて放っておいたがそうもいかなかった。

だけどあのクマのぬいぐるみを持った少女に僕の倒さなきゃいけない敵“フェイト・T・ハラオウン”

もう殺さないなんて言っただけだ。

そうだ

誓いを思いだせ

悪に永久の眠りを……

その八 悪に永久の眠りを……（後書き）

ご精読ありがとうございます！！

多国籍軍です！

まず、すみません。

学校が始まったのでこれからは前回みたいに三話連続で投稿とかは出来なくなると思います。

それにいつ投稿出来るかもわかりません（ショボーン）

さて、修学旅行（まったく関係なかったが……）は次回で無理矢理的になりますが終わらせる……はずです。

これでウィル中心？の物語は一旦終了。

さあ、次は誰でしょう？

それではノシ

第一部エペローグ 【Girl meets a girl】（前書き）

少ないです

## 第一部エピローグ 【Girl meets a girl】

俺思っただけどさ？高校時代の思い出って大切だと思うんだ。一生に一度しかないじゃん？一回限りじゃん？まあ、大学に進学する奴はいいと思うけど……。ソレはソレじゃん？仲間とワイワイガヤガヤするなんてこれが最後じゃん？

まあ、何が言いたいのかというと……

「修学旅行おおおおお！！」

修学旅行を何も楽しんでいないということだ。

龍達が管理局に一時的に保護？されて一週間たった。

毎日が訓練から始まり、訓練に終わる厳しい日々。軍人養成学校じゃないんだからやめてくれよと龍は常々思っていたが、ウィルが管

理局に入るための土台だと思い続け、なんとかなつたらしい。

そんな事を思っている間にウィルと兵吾が六課のメンバーと仲良くなっていた。細かく分類するとウィルはスバル、ティアナや凜といったFW陣。兵吾はなのはにフェイトそれからはやてといった隊長陣だ。

ちなみに龍は余計なことは言いたくとはかりに誰とも仲良くなっていない。あまり関わりたくないようだ。

さてこの管理局が回収した【五つの城壁】ランバレットはその危険度の認知がただ出来てないのかそれとも“何か違う思想”があつたのか誰もわからないが管理局は頑かたくなにこのロストログアを『ティーゼル国』に返却しようとした。

だがしかし、それをはやてが黙っているわけもなく直に上層部に抗議。

【五つの城壁】の危険性を兵吾が以前持ってきた資料を使い説くと同時に管理局がどうして一度回収したロストログアを返すのかと声高々に非難した。

そのおかげか、上層部は渋々ながら（イメージだが）一年間『ティーゼル国』に脅迫、またはそれに類するものがなかった場合返却するという事で幕が下りた。（はやては不満そうだが…）

「で、俺達はどうなるんですか？」

龍達もいつまでも管理局にいるわけにはいかない。彼らもまだ学生。やりたいことはたくさんあるはずだ。

「そのことなんやけど龍君達、修学旅行潰れてもったやろ？せつかくの高校時代のが思い出が潰れるのも嫌やろうし……」

「『ティーゼル国』を少し廻らない？」

はやてとなのはが楽しそうに言う。いくら一週間襲撃がなかったからって（本当はあったが……）緩みすぎじゃないかなと龍は思ったが口にはしなかった。

「いいですねえ。僕は行きたいです！」

「俺も！俺も！！」

「兵吾、どうやって戻ってきた？」

そしてFW陣を呼びに行くために皆で移動することにした。

＝  
＝  
＝

「次は“あいつ”の物語り、か……。ストーリーがわかっているつても辛いよな。」

——まあ、俺は物語りのための憐れな子羊<sup>スケープゴート</sup>。精々、この物語りが完結するために動きますか…

冴姫　凜は楽しんでいた。

私が就職した時空管理局の機動六課。ほとんどの皆さんが私より年上なのにそんなことを気にせず対等に扱ってくれる。

一週間前に知り合った人達はフランクに、かつ私が不愉快にならない程度に話をしてくれる。人見知りの私でも楽しく話が出来た。

「今日は楽しかったですね」

ティーゼル国の歴史的な建物を廻り買い物をしていたらいつの間に

か空が赤みがかっていた。

一日がまるで一時間のようで短く感じ、一日がもっと長くなってほしいなと初めて思った。

「本当だよな」。楽しかった、楽しかった。」

「僕も。もっと皆で遊びたかったのに――」

ねえ――、とウィルさんがこちらを見て頷く。

「なら皆でまた遊べばいいじゃない？」

「いいねティア！そうしようよ。」

前で歩いているティアナ先輩とスバル先輩が振り向いてこちらを向いた。

「いいですね！それじゃあ――……」

「凜ちゃん前見て！危ないよ――！」

「えっ？キャッ――！」

「うわっと――！」

なのはさんの注意も虚しく、私は話に夢中になってしまい前からきた人とぶつかってしまった。

「いてて……」

私はぶつかった拍子に尻餅をついてしまう。立てない程ではなかったけど少し強く打ってしまった。

「おい、大丈夫か？」

そう言って私がぶつかった人は私の眼前に手を出してくれた。

「はい。あ、ありがとうござい………ます」

目の前にいたのは中性的な顔の人。多分年は私と同じくらいだろう。

それよりも……

私の目の前にある手の奥

彼の胸元で光る銀色のアクセサリー

「ん？、どうした？」

それは二つの銀色の“指輪”をモチーフにしていた冴姫の紋章。

「お……に……い……ちゃん？」

絞り出した声はか細く、どうしようもなく弱かった。

## 第一部エピローグ 【Girl meets a girl】（後書き）

ご精読ありがとうございます！！

多国籍軍です！

第一部エピローグです。まだまだ行き当たりばつたりの要素が多いですかどうかご贔屓に…。

書き方が定まりませんねえ。これから三人称視点とキャラ視点、どっちがいいんでしょうか？

それも考えながらやっていこうと思います。

下手くそな作者ですが頑張っていきます。

さあ第二部も頑張ります！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8397p/>

---

魔法少女リリカルなのは——願う世界——

2011年10月8日13時44分発行